岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第430集

広岡前遺跡発掘調査報告書

ひろおかまえ

緊急地方道路整備事業関連遺跡発掘調査

岩手県水沢地方振興局土木部
(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

広岡前遺跡発掘調査報告書

緊急地方道路整備事業関連遺跡発掘調査

序

本県は、埋蔵文化財の宝庫と言われるとおり、古くは旧石器時代から平安時代までの遺構や遺物が数多く確認されています。このような先人の残した貴重な文化遺産を保護し、後世に伝えていくことは全県民に課せられた責務であります。また、一方では幹線道路網や農業基盤整備など、社会資本を充実させることも行政上の重要な施策であります。しかし、このような開発行為が埋蔵文化財の保護・保存と、より調和のとれた地域開発を推し進めることが今日的な課題であります。

財団法人岩手県文化振興事業団では、埋蔵文化財センター創設以来、岩手県教育委員会による調整と指導のもとに、やむを得ず消滅する県内各地に所在する遺跡の発掘調査をおこない記録保存に努めて参りました。

本報告書は、緊急地方道路整備事業に伴い江刺市稲瀬に所在する広岡前遺跡の発掘調査を実施した成果を記したものです。

今回の調査では、多くの成果を挙げることができましたが、中でも平安時代を中心とした集落遺跡であることが明らかになりました。

現地での発掘調査および報告書作成にご協力を賜りました水沢地方振興局土木部、江刺市教育委員会をはじめとして、関係各位に心より感謝申し上げます。

おわりに、本書が広く活用され、埋蔵文化財に対する理解と関心をいっそう深めることに寄与することを切に希望いたします。

平成15年5月

財団法人　岩手県文化振興事業団

理事長　合田　武

例　言

1．本報告書は、岩手県江刺市稲瀬字広岡前246－143ほかに所在する広岡前遺跡の発掘調査結果を収録したものである。

2．本遺跡の発掘調査は、緊急地方道路整備事業に伴い遺跡の一部が消滅するため、記録保存を目的として実施した緊急発掘調査である。調査は、水沢地方振興局土木部と岩手県教育委員会生涯学習文化課の協議を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが担当した。

3．岩手県遺跡登録台帳登載の遺跡番号はME96－0399、遺跡略号はHOM－02である。

4．発掘調査の期間・担当者・調査対象面積は次のとおりである。

平成14年９月17日～平成14年11月28日　調査第１課　福島正和・江藤　敦　3,510㎡

5．室内整理の期間・担当者は次のとおりである。

平成14年11月１日～平成14年２月28日　調査第１課　福島正和

6．基準点の測量・打設は、有限会社　北上測量設計に委託した。

7．野外調査および室内整理・報告書作成にあたり、次の方々から指導・助言・協力をいただいた。（順不同・敬称略）

中村英俊・鎌田　勉・日下和寿（岩手県教育委員会）、千葉達也・及川　洵・野坂晃平・佐藤好幸（江刺市教育委員会）、伊藤武士（秋田市教育委員会）、井上雅孝（滝沢村教育委員会）

8．野外調査では地元江刺市教育委員会・㈱丸謙建設・近隣住民の方々に多大なるご協力をいただいた。

9．本報告書の執筆・編集・校正は当センター臨時職員の協力を得て、福島が担当した。

10．本報告書では、国土地理院発行の次の地形図を使用した。

１：2,5000　陸中江刺

11．土色及び土器の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所色票監修による『新版　標準土色帖』2002年度版に準拠した。

12．調査で出土した遺物および調査の記録は、岩手県立埋蔵文化財センターで保管している。広く活用されたい。

13．調査成果の概略については「平成14年度岩手県埋蔵文化財発掘調査略報」においても公表したが、調査に関する記載内容については本報告をもって正とし、すべてにおいてこれを優先する。

目　次

序
例言

〈本　文〉

Ⅰ．調査に至る経過 …… 1

Ⅱ．遺跡の立地と環境 …… 1～ 6
1．地理的環境 …… 1
2．歴史的環境 …… 4

Ⅲ．調査の方法 …… 7～ 9
1．発掘調査の方法 …… 7
2．整理作業の方法 …… 8
3．基本層序 …… 9
4．凡例と掲載表記方法 …… 9

Ⅳ．検出遺構と出土遺物 …… 10～41
1．Ⅰ区の遺構と遺物 …… 10～33
2．Ⅱ区の遺構と遺物 …… 34
3．Ⅲ区の遺構と遺物 …… 34～40
4．遺構外出土遺物 …… 41

Ⅴ．考察 ―― 広岡前遺跡出土の須恵器について ―― …… 42～51
1．はじめに …… 42
2．出土した須恵器各器種の様相 …… 42～43
3．出土した須恵器椀 …… 43～44
4．出土した須恵器水瓶 …… 44～47
5．施釉陶器と特殊須恵器 …… 48～49
6．まとめにかえて …… 49～51

Ⅵ．調査のまとめ …… 52～58
1．はじめに …… 52
2．竪穴住居を中心とする遺構と遺物 …… 52～53
3．鍛冶関連遺構及び関連遺物 …… 53
4．総括 …… 53～58

報告書抄録 …… 79
職員名簿 …… 80

〈図　版〉

図1　遺跡位置図 …… 2
図2　地形分類図 …… 3
図3　周辺の遺跡 …… 5
図4　調査区地区割図 …… 7
図5　層序断面模式図 …… 9
図6　Ⅰ区遺構配置図 …… 10
図7　竪穴住居2　平・断面図 …… 11
図8　竪穴住居2　出土遺物 …… 12
図9　竪穴住居3 a　平・断面図 …… 13
図10　竪穴住居3 b　平面図 …… 14
図11　竪穴住居3 c　平面図 …… 16
図12　竪穴住居3　出土遺物 …… 19
図13　竪穴住居3　出土石製品 …… 20
図14　土坑1～7　平・断面図 …… 21
図15　土坑1・3　出土遺物 …… 22
図16　土坑7　出土遺物 …… 25
図17　井戸1　平断面図 …… 27
図18　井戸1　出土遺物 …… 28
図19　炉1　平・断面図 …… 29
図20　炉2　平・断面図 …… 30
図21　溝1～12　平・断面図 …… 32
図22　溝1　出土遺物 …… 33
図23　Ⅱ・Ⅲ区遺構配置図 …… 34
図24　竪穴住居1　平・断面図 …… 36
図25　竪穴住居1　出土遺物 …… 38
図26　溝13～16　平・断面図 …… 40
図27　遺構外出土遺物 …… 41
図28　東海地方産施釉陶器と
出土した須恵器椀 …… 43
図29　水瓶 …… 45
図30　広岡前遺跡と他2遺跡の位置関係 …… 47

〈写真図版〉

写真図版1　調査前風景・基本土層断面 …… 60
写真図版2　Ⅰ区東全景・竪穴住居2 …… 61
写真図版3　竪穴住居3 …… 62
写真図版4　竪穴住居3・溝1・土坑1 …… 63
写真図版5　溝1～5 …… 64
写真図版6　溝6～12 …… 65
写真図版7　土坑7・炉1・炉2 …… 66
写真図版8　Ⅱ・Ⅲ区全景 …… 67
写真図版9　Ⅱ・Ⅲ区基本土層・竪穴住居1 …… 68
写真図版10　竪穴住居1・溝13、14 …… 69
写真図版11　竪穴住居2・3出土遺物 …… 70
写真図版12　竪穴住居3出土遺物 …… 71
写真図版13　竪穴住居3出土遺物 …… 72
写真図版14　土坑1・3出土遺物 …… 73
写真図版15　土坑7出土遺物 …… 74
写真図版16　土坑7出土遺物 …… 75
写真図版17　竪穴住居1出土遺物 …… 76
写真図版18　竪穴住居1出土遺物 …… 77
写真図版19　その他の出土遺物 …… 78

〈　表　〉

表1　周辺の遺跡一覧表 …… 6
表2　基準点・補助点座標値一覧表 …… 8
表3　遺物観察表（土器） …… 55

Ⅰ　調査に至る経過

近年の道路交通事情を考慮し、岩手県内各地で緊急地方道路整備事業が計画、実施されている。県道一関北上線も整備事業の対象とされ、計画が進められた。この道路は、一関市街地から桷ノ瀬橋を渡り平泉町、前沢町、水沢市、江刺市の各市町村を経由北上し、北上市に至る総延長約50kmの区間である。このうち、江刺市岩谷堂地区から稲瀬地区を走る区間において、緊急に整備すべき道路として車道の拡幅及び歩道の設置が計画された。安全かつ円滑な通行を欲する地元要望も強く、事業に関して大きな期待が寄せられた。

この事業に伴う埋蔵文化財の取り扱いについては岩手県水沢地方振興局土木部と岩手県教育委員会との間で重ねて協議された。岩手県教育委員会生涯学習文化課によって遺跡の範囲及び遺跡の性格を把握するべく試掘調査が行われた。試掘調査は、先行して水田部分を行い、宅地部分は用地買収契約及び立ち退きの完了後に行われた。試掘調査では、広岡前遺跡の範囲内3,150㎡において遺構、遺物が確認され、平安時代の集落遺跡が予想された。試掘調査の結果を受け、広岡前遺跡の本格的な発掘調査を㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが受託事業としておこなうこととなり、岩手県教育委員会と岩手県水沢地方振興局土木部との間で平成14年度の事業として確定に至った。

これを受け、平成14年４月１日水沢地方振興局と㈶岩手県文化振興事業団との間で委託契約を締結し広岡前遺跡の発掘調査を実施することになった。発掘調査は平成14年９月17日から同年11月28日の間実施し、室内での整理作業は平成14年11月29日から平成15年２月28日の間実施した。報告書は平成15年度に刊行することにした。（岩手県水沢地方振興局土木部）

Ⅱ　遺跡の立地と環境

１．地理的環境

岩手県北部の山地から宮城県北東部に向け流れる北上川は、幾度も蛇行を繰り返しながら岩手県を縦走し、宮城県石巻市追波湾の河口より太平洋に注ぎ出る。この北上川は、東西両側に高く連なる北上山地と奥羽山脈から派生する大小の河川と何度も合流しながら両岸の河川流域にいくつもの大きな沖積平野を形成している。中でも北上川中流域には、発達した沖積平野が東西両岸問わず多く存在する。

北上川中流域には、西に連なる奥羽山脈から派生する和賀川と合流する地点があり、この地点より4.5km下流から北上川自身が砂州を形成しながら大きく蛇行を繰り返す。同時にその東岸は、他ではみられない程の広大な沖積平野がみられる。この沖積平野は、現在の北上市と江刺市との境界あたりから10km以上南にまで伸び、北上川から最大で約４km東まで及ぶ。この平野は、現在の標高約40ｍ～50ｍを測り、北上川中流域の沖積平野の中でも特に大規模に発達した平野である。この広大な沖積平野は、俗に江刺平野と呼ばれ、大部分が北上川の沖積作用によって形成されたものと考えられる。しかし、平野部の中央を南北に流れる広瀬川とそれよりやや南を流れる人首川の複雑な旧河道も作用していると考えられる。江刺平野は、東側に大きく膨らみ、低位段丘面が平野東側縁辺を帯状に縁取る。この低位段丘面は崖を形成しながら標高が高くなり始め、やがて段丘から丘陵地へと姿を変える。この丘陵地は、標高100ｍ～140ｍ程度の底平な北上山地へと続き、広大な江刺市の大半部分を占める。丘陵地には大小幾筋もの谷がみられ、北東から北上川に流れ込む広瀬川や東から流れ込む人首川、伊手川などのやや小規模な河川が谷筋を形成している。

今回調査をおこなった広岡前遺跡は、岩手県江刺市稲瀬字広岡前に所在する。遺跡の所在する江刺市稲瀬地区は、江刺市北西部隅の一角に位置する。地区北端は北上市と、西端では北上川を挟んで金ヶ崎町と、南端はで江刺市愛宕地区や同市岩谷堂地区と接している。稲瀬地区は江刺平野のおよそ北半を占め、広岡前遺跡は江刺平野の中心よりやや北寄りの地点に位置する。遺跡の約１km東には広瀬川が流れ、約1.5km西には北上川が流れ、北には段丘崖がある。江刺平野北半は、広瀬川の旧河道や氾濫原が複雑に入り組んだ状態で存在していることがわかっている。そのため平野の中には旧河道によって形成された自然堤防状の微高地が点在する。広岡前遺跡は、このような砂やシルトを基盤とする沖積層から構成された微高地に立地する。

図１　遺跡位置図

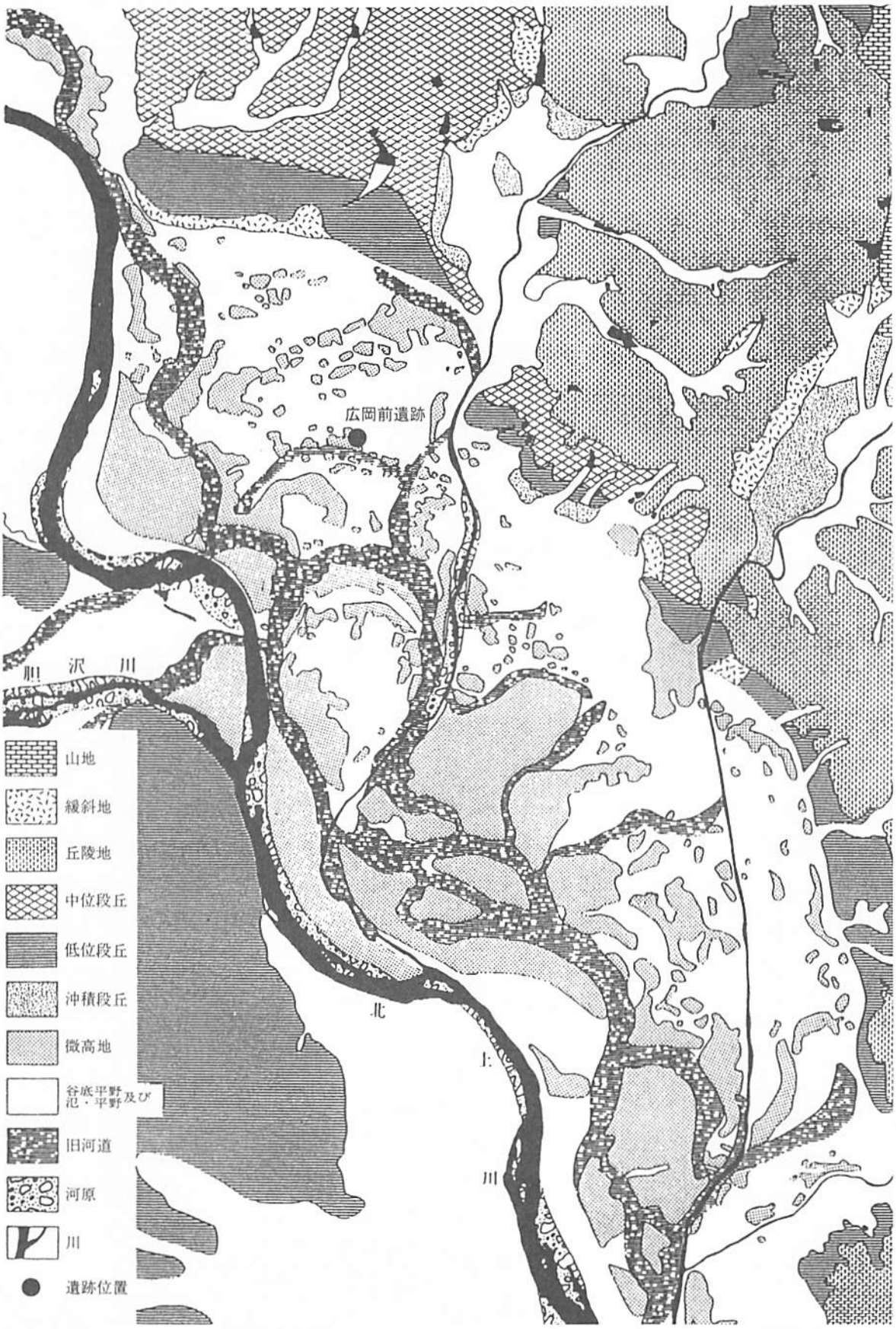

広岡前遺跡
相沢川
北上川
山地
緩斜地
丘陵地
中位段丘
低位段丘
沖積段丘
微高地
谷底平野及び氾・平野
旧河道
河原
川
遺跡位置

図 2　地形分類図

2．歴史的環境

広岡前遺跡の周辺にはこれまでに調査された遺跡、周知の遺跡を含め多くの遺跡が存在する。特に北上川の沖積作用により形成された江刺平野には古代を中心に多くの重要な遺跡が確認されている。広岡前遺跡の所在する江刺市稲瀬地区は、江刺平野の広瀬川北側に位置する。広岡前遺跡周辺には大文字遺跡、十三遺跡、宝禄遺跡、三丁遺跡、天竺老婆遺跡などがいずれも古代の遺跡として確認されている。平安時代が中心時期となる遺跡が多く、周辺には平安時代の集落が点在していた可能性が高いと考えられる。しかし、詳細の判明している遺跡が決して多くないため、集落のあり方や厳密な時期など不明な点が多い。古代以前の遺跡としては、五十瀬神社前遺跡や瀬谷子遺跡が縄文時代の遺構や遺物が確認されている。五十瀬神社前遺跡では、縄文時代中期末の土器と住居が2棟確認されており、瀬谷子遺跡では、縄文時代後期の土器が少量出土している。現在知られている限りでは、五十瀬神社前遺跡は江刺平野における最古の遺跡である。集落以外の遺跡としては、稲瀬古墳群や瀬谷子窯跡群が挙げられる。広岡前遺跡の北約2kmの段丘上に位置する稲瀬古墳群は、古墳群であるという以外詳細は不明である。一方、瀬谷子窯跡群は、これまでに100基を超える窯跡が確認されており、古代の土器や瓦を焼成した大規模な生産地である。窯跡群は、広岡前遺跡の北約1.8kmの段丘上に位置する。この瀬谷子窯跡群は東北地方屈指の土器生産遺跡であり、周辺地域を中心に各地へ製品を供給していたことが判明している。古代の集落では、瀬谷子窯跡群のある張り出した丘陵先の平野で谷地遺跡がある。谷地遺跡では平安時代の竪穴住居が検出されており、遺跡の立地から瀬谷子窯跡群との関連性が注目される。その他には、瀬谷子窯跡群にほど近い鶴羽衣台遺跡で平安時代半ばから末にかけての集落が調査されている。稲瀬地区では平野部微高地上を中心に古代の遺跡が点在するが、遺跡の分布状況及び周辺地形を考慮すると今後未知の遺跡が発見される可能性は高いと思われる。

稲瀬地区の南に隣接する愛宕地区では、弥生時代から古代を中心に多くの重要な遺跡が確認されており、稲瀬地区に比べ遺跡の詳細な内容が知られている。古代以前では、弥生時代前期の遺跡である沼の上遺跡が知られている。沼の上遺跡では、住居などの性格明瞭な遺構はみられないものの集石遺構や多くの弥生土器や石器が出土しており、付近に弥生時代の集落が存在することを示唆している。弥生時代以降、奈良時代以前の江刺平野の様子は、遺跡が確認されておらず判然としていないが、奈良時代の遺跡は少数ながら集落遺跡が確認されている。宮地遺跡、力石Ⅱ遺跡、落合Ⅲ遺跡では、わずかながら奈良時代の竪穴住居が検出されている。これらの遺跡では平安時代の竪穴住居が多数存在している。また、後中野遺跡では8世紀代に営まれた耕作地が検出されている。平安時代の遺跡は鴻ノ巣館遺跡、力石Ⅰ・Ⅱ遺跡、兎Ⅰ・Ⅱ遺跡、落合Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡、朴ノ木遺跡、宮地遺跡、栄町遺跡、中屋敷遺跡など多数が平安時代の集落として挙げられる。特に、力石Ⅱ遺跡では、竪穴住居跡から石帯が2点出土している。石帯は、律令体制下の官位と深く関わる遺物であり、注目に値するものである。また、落合Ⅱ遺跡では多量の墨書土器と木簡が出土した。特に木簡の出土は、県内初の出土であり、近在する力石Ⅱ遺跡出土の石帯と同様に律令体制中枢と深く関わる遺物と考えられる。また、文字の伝播を探るうえで墨書土器や木簡などの文字資料は看過できない。

江刺平野から見て北上川対岸に位置する水沢市では、802年に設置された胆沢城跡が過去に度々発掘調査されており、重要な遺構や遺物が数多く知られている。この胆沢城設置と前後して江刺平野における集落は激増する傾向にあり、以前から胆沢城設置を契機に周辺地域での開発が進み、急激に人口が増加した可能性があると考えられている。また、発達した江刺平野は耕作などの生産地として、急激な人口増加に耐えうる土地であったのかもしれない。

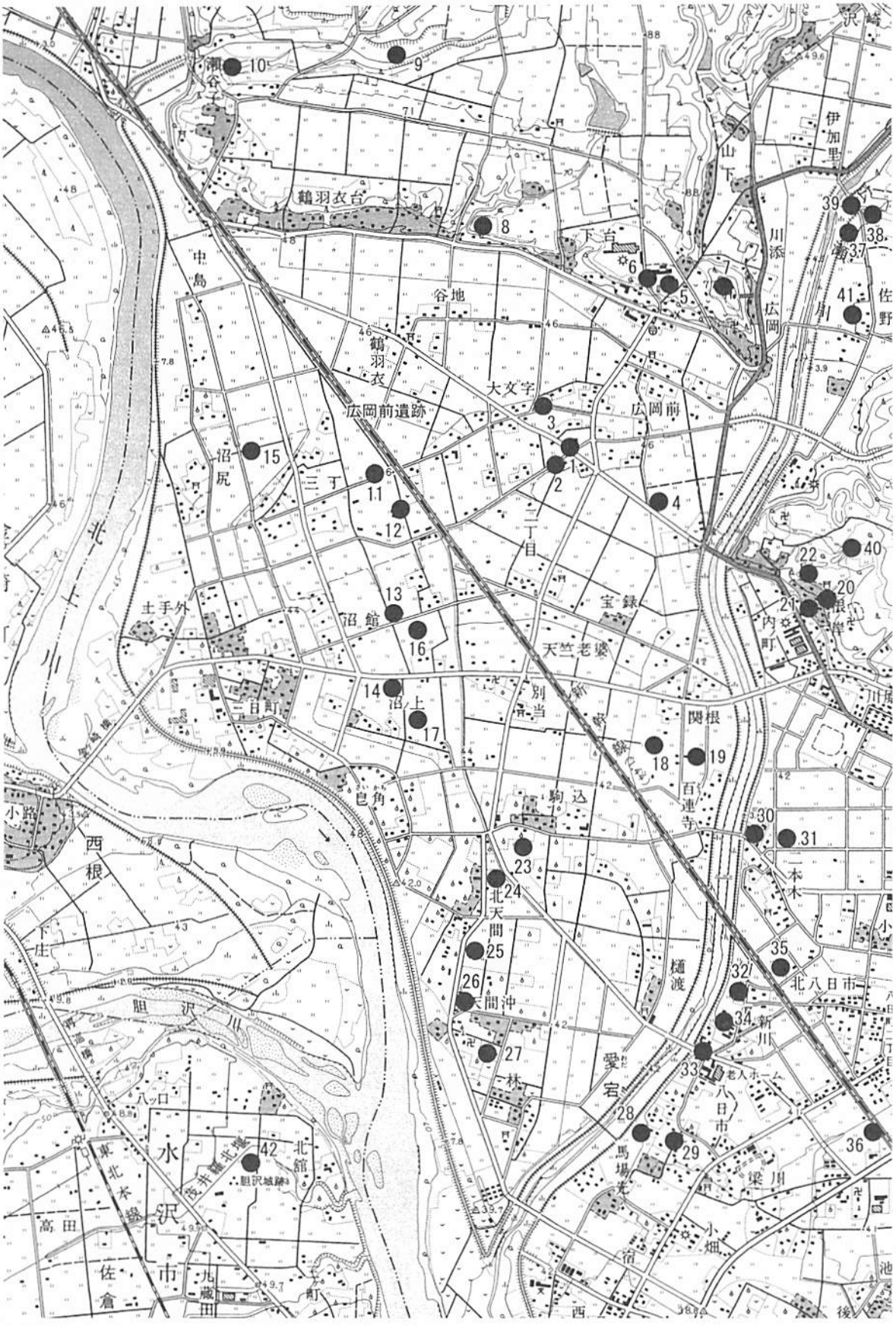

鶴羽衣台
中島
谷地
鶴羽衣
大文字
広岡前遺跡
広岡前
沼尻
三丁
二丁目
土手外
沼館
宝録
天竺老婆
沼上
別当
関根
百連寺
駒込
皂角
西根
下庄
北天間
天間沖
樋渡
愛宕
林
馬場先
小畑
北八日市
新川
一本木
内町
川添
広岡
伊加里
山下
下台
沢崎
潮谷
胆沢川
八ッ口
水沢
北館
胆沢城跡
高田
佐倉
九蔵田
北上川
東北本線
宮城県北線
八日市
梁川
老人ホーム

図3　周辺の遺跡

表1　周辺の遺跡一覧表

No.	遺　　跡　　名	主な時代
1	広岡前遺跡	古代
2	十三遺跡	縄文・古代
3	大文字遺跡	古代
4	宝禄遺跡	古代
5	稲瀬小学校遺跡	古代
6	稲瀬中学校遺跡	古代
7	深山古館	古代
8	鶴羽衣柵	中世
9	稲瀬古墳群	古代
10	瀬谷子窯跡群	古代
11	三丁遺跡	古代
12	天竺老婆遺跡	古代
13	沼館遺跡	中世
14	沼の上遺跡	弥生
15	沼尻遺跡	古代
16	別当遺跡	古代
17	沼の上Ⅱ遺跡	古代
18	東間遺跡	古代
19	百連寺遺跡	古代
20	宝性寺跡	縄文・古代
21	根岸遺跡	縄文・古代
22	根岸洞穴	縄文
23	駒込遺跡	古代
24	北天間Ⅰ遺跡	古代
25	北天間Ⅱ遺跡	古代
26	阿弥陀堂跡	古代
27	林遺跡	古代
28	馬場先遺跡	古代
29	馬場先Ⅱ遺跡	古代
30	二本木Ⅰ遺跡	古代
31	二本木Ⅱ遺跡	古代
32	新川Ⅰ遺跡	古代
33	新川Ⅱ遺跡	古代
34	新川Ⅲ遺跡	古代
35	北八日市遺跡	古代
36	宮地遺跡	古代
37	佐野平館	古代
38	寺岡寺跡	古代
39	佐野山遺跡	古代
40	庚申沢遺跡	古代
41	板橋遺跡	古代
42	胆沢城遺跡	古代

Ⅲ．調査の方法

1．発掘調査の方法

今回、発掘調査をおこなった範囲には現道部分を含まないため、調査区は現道部分によって３地区に分かれた。この３地区に分かれた調査区は、調査着手順に西側約400㎡をⅠ区、北側約500㎡をⅡ区、東側約550㎡をⅢ区と称して作業を進めた。また、３地区ともに調査区の形状が細長く、そのうえ国土座標の軸線より大きく角度を振るため調査区の形状に合わせた任意の基準点を設置し、これらの基準点をもとに区画を定めて調査した。現地における実測及び測量作業は、これらの基準点をもとにおこなった。これらの基準点は３級のものを２点、基準点の補助点を２点設置し精度を高めることに努めた。なお、基準点及び補助点の観測

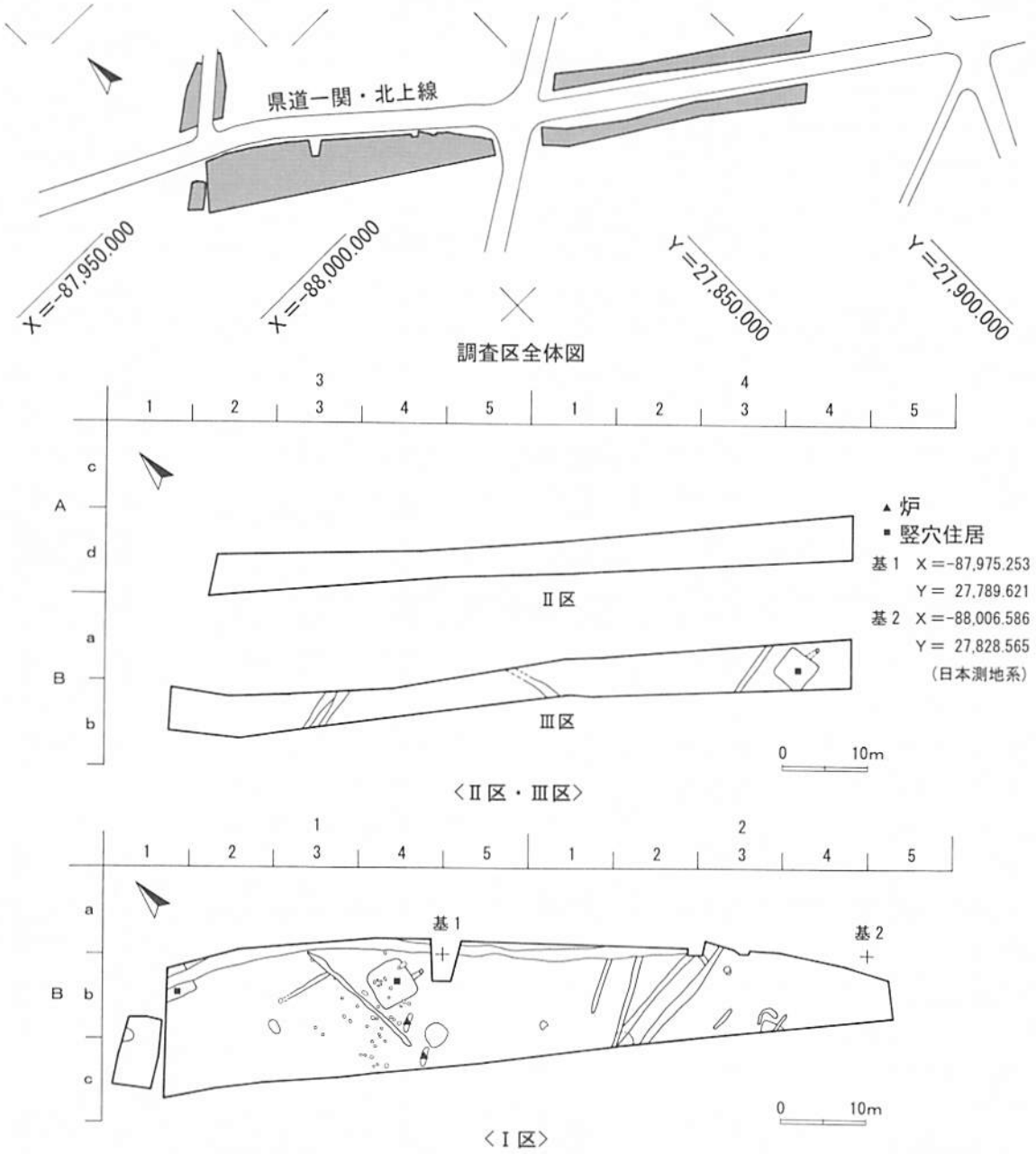


図４　調査区地区割図

表２　基準点・補助点座標値一覧表

点　名	測地系種類	X　座　標	Y　座　標	Z　座　標
基準点１	世界測地系（新）	−87,667.078	27,489.403	44.390
	日本測地系（旧）	−87,975.253	27,789.621	
基準点２	世界測地系（新）	−87,698.411	27,534.600	44.528
	日本測地系（旧）	−88,006.586	27,834.818	
基準点３	世界測地系（新）	−87,673.347	27,497.194	43.890
	日本測地系（旧）	−87,981.522	27,797.412	
基準点４	世界測地系（新）	−87,679.615	27,504.986	43.861
	日本測地系（旧）	−87,987.790	27,805.204	

値は以下の通りである。

出土遺物は、これらの基準点をもとに定めた区画の最小区画である10ｍ四方を基準に取り上げ、平面における出土位置の把握に努めた。

岩手県教育委員会生涯学習文化課の試掘調査と今回の本調査による土層の確認により、現代の水田耕作土及び宅地造成盛土を表土として認定し、重機により掘削および除去をおこなった。表土以下の掘削、遺構の検出作業は人力でおこなった。調査区内であっても道路に近接して危険な部分や電柱、埋設物など掘削に障害がある地点においては安全のため掘削を断念した箇所もある。遺構の命名は略号を用いず、遺構名と番号で表現した。遺構その他発掘調査に際しておこなった写真撮影は、35㎜カラーリバーサル・35㎜モノクロ・６×９モノクロの各フィルムを使用した。また、デジタルカメラを補助的に用いて撮影した。遺構実測では、実測図以外にフィールドカードや野帳を補助的に使用した。

２．整理作業の方法

発掘調査終了後、平成14年11月29日から平成15年２月28日までの期間、室内において整理作業及び報告書の執筆を行った。作業の概略は以下の通りである。

発掘調査に際して作成した遺構の実測原図は、点検と修正をおこない、必要に応じて新たに修正図を作成した。点検および修正を経た遺構図は体裁を整えた後、浄書し報告書に掲載する図版として完成させた。また、遺構実測原図・修正図は通し番号を付し遺構実測図台帳に登録し整理した。発掘調査に際して撮影した遺跡・遺構の写真は、トリミング、紙焼き等の作業をおこない報告書に掲載する写真図版として完成させた。撮影した35㎜、６×９モノクロのポジフィルムとネガフィルムは専用アルバムに、35㎜カラーリバーサルはスライド専用ファイルにそれぞれ整理し、登録台帳を作成後収納した。

出土した遺物は、すべて水洗をおこなった。水洗後の遺物は乾燥させ、註記した後に接合・復元作業をおこなった。以上の作業を終えた遺物は、報告書に掲載するものと掲載しないものに選別し、前者は実測・写真撮影をおこない、後者は出土地点および遺構毎に分類し収納した。遺物実測図は、点検および修正をおこない、浄書し報告書に掲載する図版として完成させた。遺物写真は、報告書に掲載する写真図版として完成させた。

3．基本層序

Ⅰ区の基本層序は、1層が旧耕作土およびそれに伴う盛土または宅地造成盛土からなる。近現代の遺物を含み層厚は、40～50cmであった。1層下位には鉄分、マンガン等の沈着層がみられた。1層を重機により除去すると遺構検出面である。層上面が遺構検出面である2層は黄色シルトを基調としており、場所によっては、やや砂質シルトになる。2層の層厚は、20～30cmを測る。層上面より掘り込まれた遺構埋土以外で遺物は出土しなかった。3層も無遺物の自然堆積層である。2層よりやや灰色掛かり、どの地点においても2層より砂質が強まる傾向にある。層厚は、20～30cmを測る。

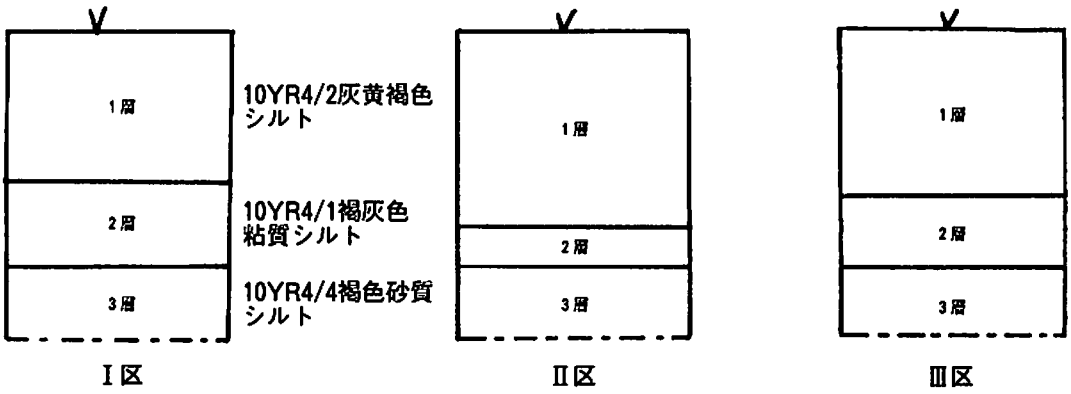


図5　層序断面模式図

4．凡例と掲載表記方法

本報告書では土器の実測図は奈良文化財研究所の報告書に準拠し、原則として4分の1スケール、土器以外の遺物は2分の1スケールで統一した。

土師器の断面は白抜き、須恵器の断面は黒塗りで分けた。

土器の調整技法の表現については、ロクロの回転力を利用した指によるナデを「回転ナデ」、口縁部等にみられる皮や布による横方向のナデを「ヨコナデ」、その他の工具を使用しない通常のナデを「ナデ」とした。また、主に土師器甕内面にみられる板状工具による不定方向のナデは「ヘラナデ」とし、ロクロの回転力を利用した板状工具による横方向のナデを「回転ヘラナデ」とした。須恵器甕の外面にみられるロクロの回転力を利用した連続する横方向の条線は「カキ目」とした。土師器甕や須恵器甕の体部にみられる、刻みを入れた工具を用いて器表面をタタキ締めた痕跡は「タタキ」、内面の当て具の痕跡は「当て具跡」とした。土師器坏にみられる器表面を単位の細かな工具でミガいたものを「ヘラミガキ」とし、工具を用いて、器表面の砂粒が移動した痕跡で、不定方向にケズるものを「ヘラケズリ」とし、ロクロの回転力を利用した横方向の「ヘラケズリ」は「回転ヘラケズリ」とした。

実測図での調整の表現は、「ヨコナデ」や「ヘラナデ」にみられる条線を表現せず、本文での記述に留めた。また、底部の回転糸切り跡は本文での記述、あるいは遺物観察表での表記をおこない拓影は割愛した。ただし、底部に「ヘラ記号」がみられるものについては採拓し、実測図中に拓影を添えた。土師器の黒化処理はアミを掛けて表現した。

Ⅳ．検出遺構と出土遺物

1．Ⅰ区の遺構と遺物

Ⅰ区の検出面は、旧水田耕作土の直下で検出した面である。検出面西端は標高42.5m、東端は標高41.2m、東端約40m²は後世の攪乱及び削平が著しく、遺構・遺物ともにみられなかった。この検出面では、竪穴住居2棟、土坑7基、井戸1基、炉2基、溝12条、柱穴33基を検出した。出土遺物は、ほとんどが遺構から出土した土器類であった。

竪穴住居2

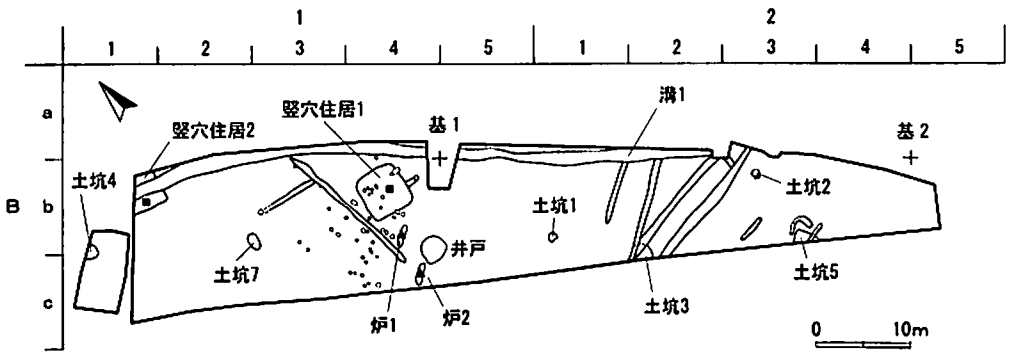
竪穴住居2はⅠ区北端に位置する。大半は調査区外に存在し、主軸線上を溝1に切られる。平面形態は、隅丸方形であると考えられる。

BⅠb1グリッドの調査区境に東西を主軸方向として存在する。2層の上面で褐色土と黒色の粒を含む混合土のシルト質範囲において、約1／4を検出した。当遺構の東西を横断するように溝1によって截られることから当遺構の方が古いと推測される。平面形態は、約1／4程度のみの検出であったため正方形か長方形かは断じ得ない。残存する南壁3.2m、西壁3.8mを検出したが全体は不明である。住居埋土は、大きく2層に細分され、主に2層とも褐色のシルト質で、下層では炭が少量含まれる。全体に強い締りがあり、堆積状況の観察では自然体積であると推測される。残存する西壁・南壁ともに床面からほぼ垂直に立ち上がり、深さは45cmを測る。溝1によって削平を受けていない場所では、貼床を確認することはできなかった。床面では、土坑1基をカマドの南脇において検出した。規模は直径45cmの円形をなし、深さ38cmを測る。埋土は、暗褐のシルト質で焼土・炭を含む。カマドの脇に位置することから、カマド施設に付随する。周溝・柱穴は確認することはできなかった。カマドは、東壁中央付近に構築されており、燃焼部では焼成によって赤変している。カマド本体は、溝1によってほとんどが削平され、左側の袖部と煙道の9割以上は残存しない。天井部が崩落し残存部に天井部の土が被さる状態で検出した。袖部は芯に礫を補強材とし配置し、それに褐色シルトを貼り付けて構築されており、袖部は長さ30～65cm、幅15～25cmほどである。火床部は50～60cmほどの広がりを持ち、焚き口から燃焼部中央付近まで最大厚3cmの焼土が広がり、焚き口から70cmほどの位置に支脚が設置されている。煙道は溝1の極一部分しか存在せず、煙出し口等は不明である。床面においては柱穴を確認することができなかった。

竪穴住居2出土遺物

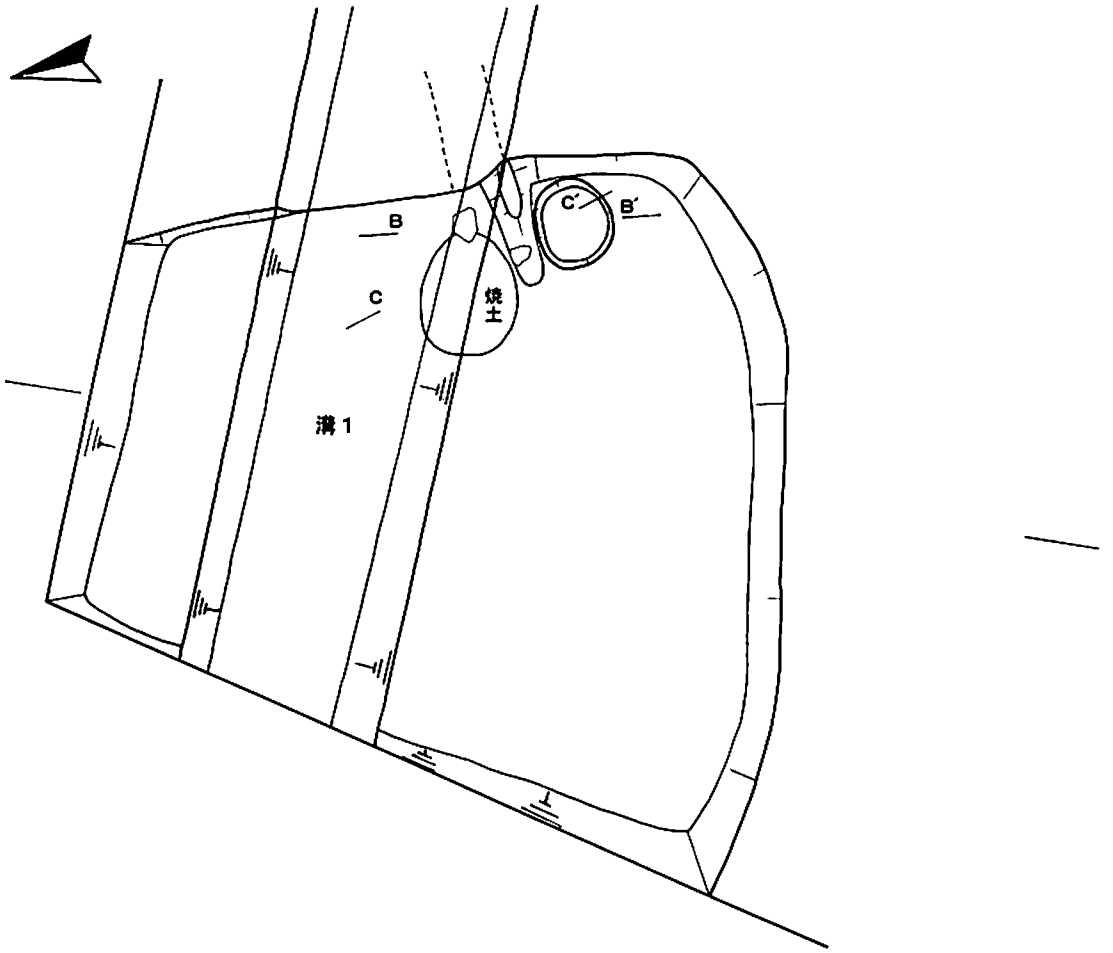
土師器が主体を占め、カマドや煙道などの埋土から出土した。

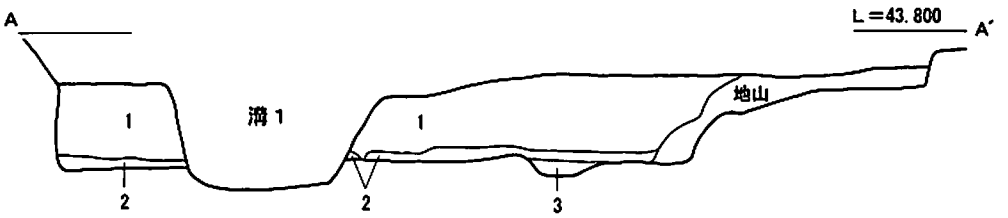
1～3はすべて土師器甕である。1は口縁部から体部半ばまでの破片である。体部下半は丸みを持ち、上



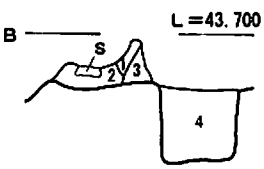
<Ⅰ区>

図6　Ⅰ区遺構配置図

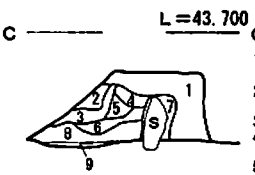




1. 10YR4/6 褐色 シルト しまり強 粘性中 炭1%、焼土焼1%含。
2. 10YR4/4 褐色 シルト しまり強 粘性中 炭1%。
3. 掘りすぎ



1. 2.5YR4/6 赤褐色 シルト（しまり強 粘性中）
2. 10YR4/4 褐色粘土
3. 10YR4/6 褐色 シルト（しまり中 粘性中）
4. 10YR3/4 暗粘土粘質シルト



1. 10YR4/6 褐色 シルト（しまり強 粘性中）
2. 10YR4/4 褐色 シルト（しまり強 粘性中）
3. 10YR4/4 褐色 粘質シルト
4. 10YR4/4 褐色 シルト（しまり強 粘性中）
5. 10YR3/4 暗褐色 シルト
6. 10YR3/4 暗褐色 粘質シルト
7. 10YR4/4 褐色 粘土
8. 2.5YR3/4 暗赤褐色 粘土
9. 掘りすぎ

図7　竪穴住居2 平・断面図（S＝1：40）

半は直立気味である。口縁部は短く外傾する。口縁端部は上方につまみ上げられている。体部は回転ナデにより調整されている。

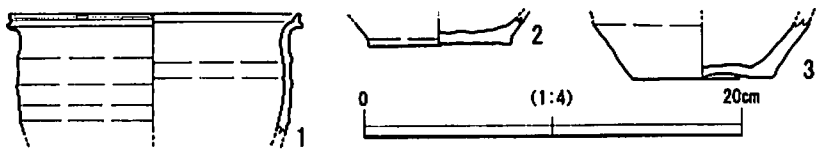


図8　竪穴住居2　出土遺物

2は底部のみの破片であり、全体の形状は不明である。体部は直線的に外傾する。底部は回転糸切りの後無調整である。

3は底部のみの破片であり、全体の形状は不明である。

竪穴住居3 a

主軸方向は竪穴住居2と同じく東西を指向する。規模は、南北で4.5m、東西4.2mを測り、深さは最深部で43cmを測る。平面形態はおおむね方形を呈するが、やや南北長が東西長に比べ長い。埋土は、褐色土を主体とする埋土で、5層から成り自然体積の様相を見る。2層目には炭化物を多く含み、その他の層に於いて混入物はあまり見られない。また、埋土上位には若干の鉄滓片を含む。壁は、各辺とも緩やかに外傾しながら立ち上がる。床面はほぼ平坦であるが、カマド付近では緩やかに高まりを持つ。貼床は断面観察時には確認することが出来なかった。床面では、土坑2基と壁周溝1条、柱穴状ピット1基を検出した。土坑1は、中央よりやや北側に位置し、70×54cmの長円形の土坑である。埋土は、2層からなり上層に須恵器椀がほぼ完形で出土した。土坑2は、カマドの南側に隣接し、50×45cmの円形を成す。埋土は単層で、焼土ブロックを5％、炭3％含む。深さは25cmで土師器が出土した。周溝は、住居の北壁から西壁に沿う格好で周るが、コーナーでは壁と周溝の間に35cmの平坦な隙間を生む。東側と南側では確認することはできなかった。深さは最深部で10cmである。カマドは、東壁中央に構築されている。このカマドは、袖の心材が無く褐色シルトによって被覆し、貼り付けで構築されている。天井部の崩落したブロック土層を一部で確認したが、煙道部の上部から削平されているので全体を確認することはできない。残存する袖内部は、長時間の比熱を受け赤褐し火床部には75cm×60cmの楕円形で厚さ8cmほどの焼土が見られるが、焼成は強く締まりシルト質である。煙道部は、近現代の削平により残存しないことから、半地下式（掘り込み式）あるいは、刳り貫き式かは判別することはできない。また火床部と煙道部に30cmの段差を生じているが、これは住居の壁の一部であり弱い比熱を受けている。煙道部は長さ1.1mあり緩やかに勾配し煙出し口へと接続する。煙出し口は煙道部より一段深く掘り下げられており円形状の土坑となっている。

竪穴住居3 b

主軸方向は、上層にある3 aとほぼ同じで東西方向を指向する。埋土は、住居3 aの床面から厚さ10cmほどが当遺構の埋土になり、褐色シルト質をしており炭を少量含んでいる。形状・規模は、平面形での形状は隅丸方形を基調としていると推測される。規模は南北で4.0m、東西で4.6mを測り、深さは住居3 a検出面より47cmで床面に達する。ほぼ正方形を成し住居3 aと同じように北側の壁を一部張り出す。壁は、床面より垂直に立ち上がり、床面は平坦を成していたと推測される。貼床は断面観察からは確認することは出来なかったので、貼床をしていないものとした。尚カマド付近では3 aと同様に緩やかに上がっていたものと思われる。トレンチの段階において焼土以外に土坑複数確認していた。このうちの1つが、住居3 aより少し古いと思われ3 bの住居に伴うものとした。土坑の規模は直径70cm深さ42cmの円形を呈し単層である。土坑内には墨書土器を1点ほぼ完形のまま、埋設に近い状態にて埋めていた。その他の床面施設は不明である。カマドは、東壁の中央よりやや南側に位置する。残存する部分はほとんど無い。カマド本体を構築していた

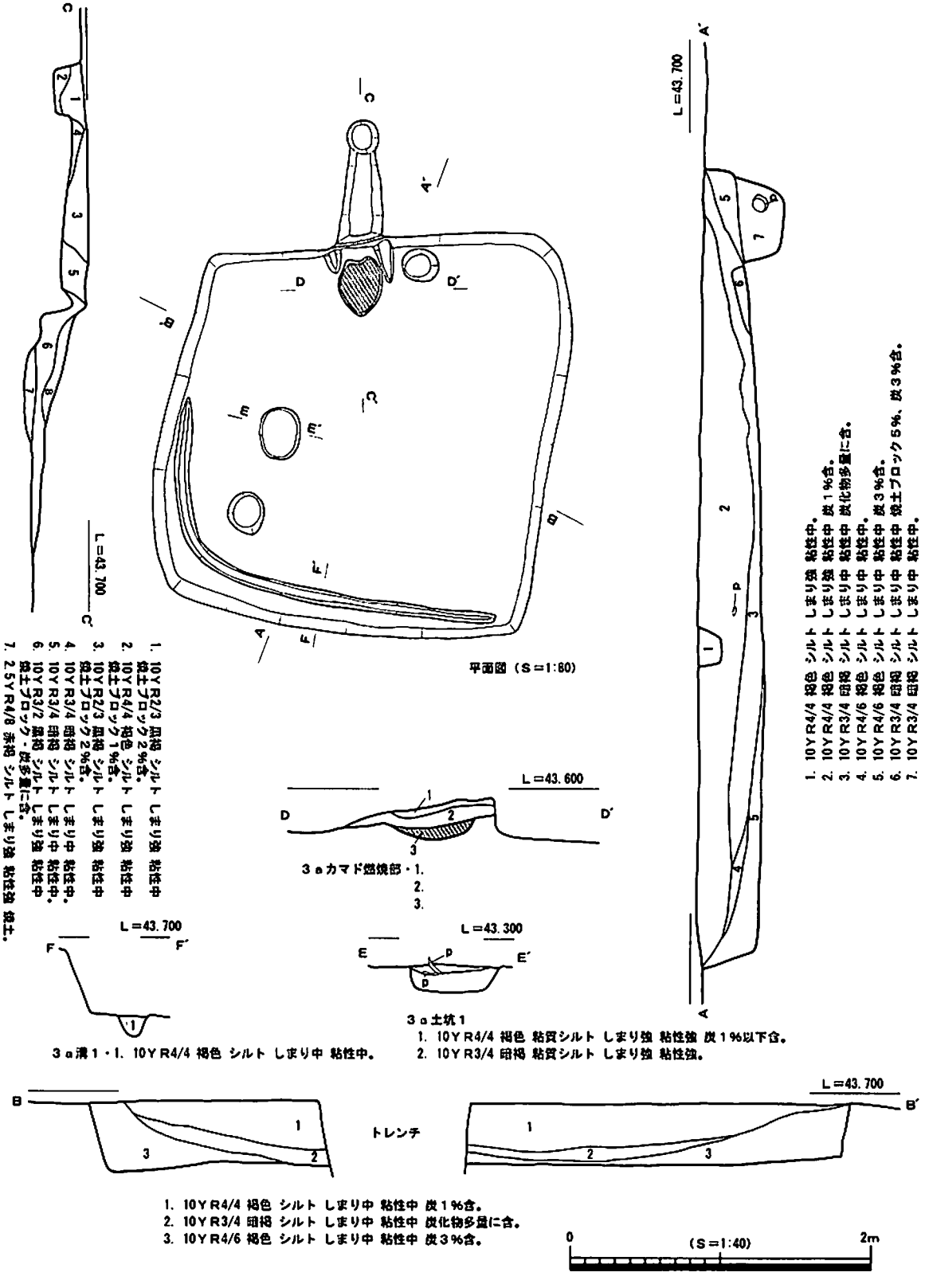


図9　竪穴住居3ａ 平・断面図

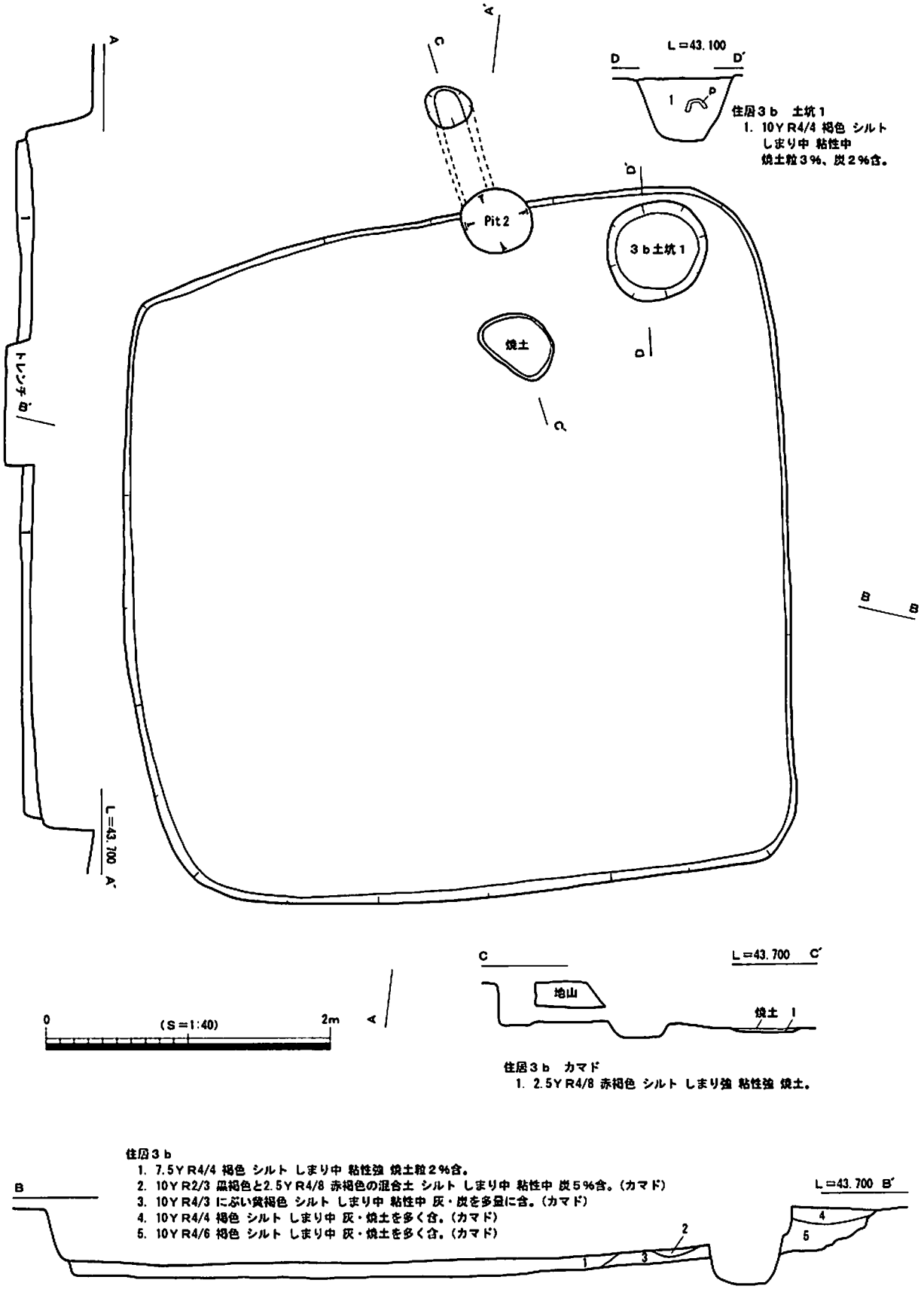


図10　竪穴住居3b 平面図

と思われるものは住居３ａにより壊されおり火床部・煙道部・煙出し口のみ残存している。焼成部は55㎝×45㎝の楕円形で厚さ２㎝ほどの焼土が見られ、強く締りシルト質である。煙道部・煙出し口：煙出し口の間口は住居３ａの土坑２によって切られており住居３ａと同様に段差を持つものかは不明である。煙道部は刳り貫き式で長さは約１ｍ前後であると推測され、ほぼ平坦を成す。煙出し口は煙道部わずかに掘り下げた円形状の土坑となっている。

竪穴住居３ｃ

主軸方向は、ほぼ東西を指向する。埋土は、住居３ｂ床面より下５～15㎝が当遺構の埋土になり、褐色シルト質をしている。 平面形は隅丸方形を基調とする。規模は一辺が3.5ｍを測る正方形の住居であり、深さは住居３ａ検出面から60㎝で床面に達する。北壁を除く他の壁はほぼ垂直に立ち上がり、北壁は緩やかな傾斜を成す。床面は平坦であり、貼床の痕跡は認められなかった。検出した床面から土坑２基と柱穴２基を確認した。土坑１は、西壁と南壁のコーナー付近に位置し長径95㎝短径60㎝の長円形の土坑である。埋土は５層からなり褐色土を基調としながら混入物の入り方で分層を行った。埋土中には若干の土師器が認められたが時期を断定するには不十分であった。柱穴１は、北壁と東壁のコーナー付近に位置し直径50㎝深さ15㎝である。埋土は褐色土の単層で遺物は含まれない。柱穴２は、北壁と西壁のコーナー付近に位置し直径30㎝深さ15㎝である。埋土は褐色土の単層で遺物は含まれない。カマドは、南東のコーナーに位置する。本体：調査前のトレンチと住居３ｂ土坑２によって壊されておりカマド自体は火床部と煙道部の一部を残すのみで、袖・煙道間口は削平され残存しない。火床部には天井部を構築していたと思われる黄褐色土の土が残り焼成部は46×55㎝の楕円形で厚さ12㎝ほどの焼土が見られ強く締りシルト質である。煙出し口の間口は住居３ｂ土坑２により破壊されており構造を知ることは出来ないが、残った煙道部の断面を観察すると火床部とほぼ水平であったと推測される。煙出し口は円形をしていたと推測されるが現状は不明である。３時期にわたるなかで最初の住居であることは層位的に明らかである。

以上のように、竪穴住居３は３回におよぶ作り替えが３面の床面という形となって現れており、それぞれの床面で対応する遺構が検出できた。

竪穴住居３出土遺物

土師器・須恵器が主体を占め、器種構成は須恵器坏類がやや多い傾向にある。これらの遺物は竪穴住居３の埋土、床面、柱穴埋土、カマド、煙道、煙出しから出土した。

１～８・14・15・20～24・32は須恵器坏である。

１は住居３ａ埋土から出土した。口縁端部が直線的に伸びる形態を呈する。体部の下半部から口縁部までが回転ナデによる調整が施され、底部は回転糸切りの後無調整である。胎土には白色砂粒を含む。口縁部外面には、重ね焼きによる色調差がみられる。

２は住居３ｂ埋土から出土した。やや丸みを持つ体部にやや肥厚する口縁部が伸びる形態を呈する。口縁部内面には１条の沈線状凹線が巡る。体部下半から口縁部までが回転ナデによる調整が施され、体部下半部から底部にかけてやや弱い横方向のナデが施されている。底部は回転糸切りの後無調整である。胎土には白色砂粒を多く含む。

３は住居３ｂの埋土から出土した。口縁端部が直線的に伸びる形態を呈し、体部の下半部から口縁部までが回転ナデによる調整が施され、体部下半から底部にかけてやや弱い横方向のナデが施されている。底部は回転糸切りの後無調整である。胎土には白色砂粒を含む。

４は住居３ｂ埋土から出土した。口縁端部が直線的に伸びる形態を呈し、体部下半から口縁部までが回転

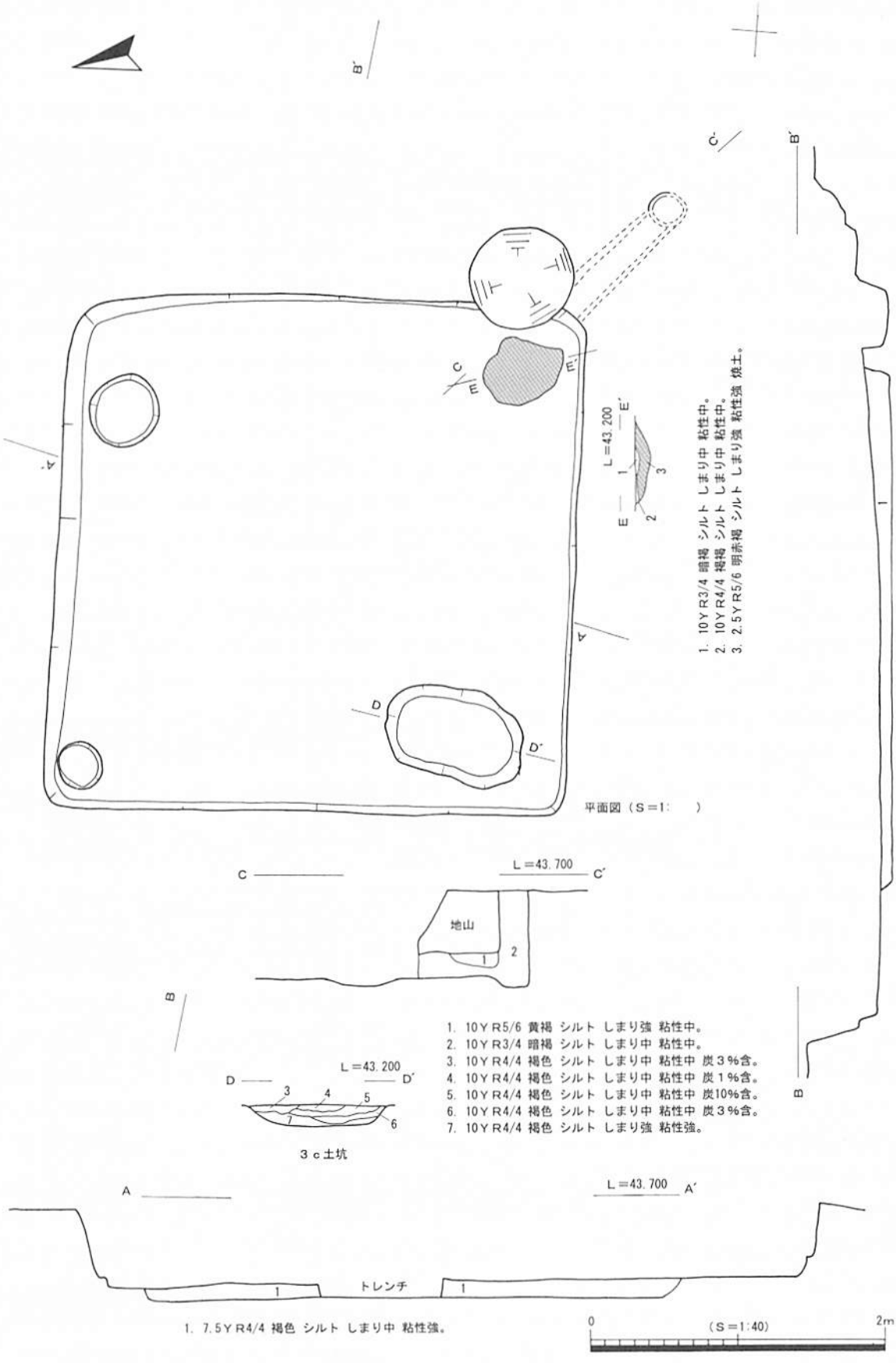


図11　竪穴住居3c　平面図

ナデによる調整が施され、体部下半から底部にかけてやや弱い横方向のナデが施されている。底部は回転糸切りの後無調整である。胎土には白色砂粒を含む。体部下半および底部内外面を除き還元不足が著しい。

5は住居3ｂ柱穴2から出土した。やや丸みを持つ体部に直線的に伸びる口縁部が付き、底部が下方にやや突出した形態を呈する。体部下半から口縁部までが回転ナデによる調整が施され、体部下半部から底部にかけてやや弱い横方向のナデが施されている。底部は回転糸切りの後無調整である。胎土には白色砂粒を含む。口縁部外面には、重ね焼きによる色調差がみられる。

6は住居3ｂ埋土から出土した。口縁端部が直線的に伸びる形態を呈し、体部下半から口縁部までが回転ナデによる調整が施され、体部下半から底部にかけてやや弱い横方向のナデが施されている。底部は回転糸切りの後無調整であり、「十」字のヘラ記号が施されている。胎土には白色砂粒を含む。

7は住居3ａ埋土から出土した。口縁端部が直線的に伸びる形態を呈する。体部の下半部から口縁部までが回転ナデによる調整が施され、底部は回転糸切りの後無調整である。胎土には白色砂粒を含む。口縁部外面には、重ね焼きによる色調差がみられる。

8は住居3ａの土坑2と住居3ｂ埋土から出土した。直線的に伸びる体部と口縁部を持つ。体部の下半部から口縁部までが回転ナデによる調整が施され、底部は回転糸切りの後無調整である。胎土には白色砂粒を含む。全体的に還元不足である。

14は住居3ｂ埋土から出土した。底部のみの破片のため全体の形状は不明である。底部は回転糸切りの後無調整で、胎土には白色砂粒を含む。外面は全体的に還元不足である。

15は住居3ａ埋土から出土した。底部のみの破片のため全体の形状は不明である。底部は回転糸切りの後無調整で、胎土には白色砂粒を含む。

20は住居3ａ埋土から出土した。口縁部から体部の一部の破片であるため全体の形状は不明である。体部の下半から口縁部まで回転ナデによる調整が施されている。胎土には白色砂粒を含む。

21は住居3ａ土坑3から出土した。直線的に伸びる体部と口縁部を持ち、底部が下方にやや突出した形態を呈する。体部下半から口縁部までが回転ナデによる調整が施され、体部下半部から底部にかけてやや弱い横方向のナデが施されている。底部は回転糸切りの後無調整である。胎土には白色砂粒を含む。口縁部外面には、重ね焼きによる色調差がみられる。体部外面には、「大」の字が墨書されていが、文字は天地が逆さになっている。

22は住居3ａ、3ｂの各埋土から出土した。やや丸みを持つ体部に外反気味の口縁部を持つ。体部下半から口縁部までが回転ナデによる調整が施され、体部下半部から底部にかけてやや弱い横方向のナデが施されている。底部は回転糸切りの後無調整である。胎土には白色砂粒を含む。口縁部外面には、重ね焼きによる色調差がみられる。

23は住居3ａ埋土から出土した。口縁部から体部の一部のみの破片であるため全体の形状は不明であるが、体部から口縁端部が直線的に伸びる形態を呈する。体部の下半部から口縁部までが回転ナデによる調整が施され、底部は回転糸切りの後無調整である。胎土には白色砂粒を含む。

24は住居3ａ埋土から出土した。体部から口縁端部が直線的に伸びる形態を呈する。体部の下半部から口縁部までが回転ナデによる調整が施され、底部は回転糸切りの後無調整である。胎土には白色砂粒を含む。全体的にやや還元不足である。

32は外傾する小振りな体部を持つ。体部の下半部から口縁部までが回転ナデによる調整が施され、底部は回転糸切りの後無調整であり、「－」のヘラ記号が施されている。

9・10・18・26・28・29・33はいずれも大小の土師器甕である。

9は住居3 a土坑2から出土した。口縁部から体部上半は欠損しているが、体部下半から底部にかけて完存している。体部は外傾しながら立ち上がる。体部は回転ナデによる調整が施され、体部下端には回転ヘラケズリが施されている。底部は回転糸切りの後無調整である。

10は住居3 a埋土から出土した。口縁部から体部上半は欠損しているが、体部下半から底部にかけて完存している。体部は外傾しながら立ち上がる。体部は回転ナデによる調整が施されている。底部は回転糸切りの後無調整である。

18は住居3 b埋土から出土した。口縁部のみの破片のため全体の形状は不明である。口縁部は肥厚し、端部は上方につまみ上げられている。口縁部にはかすかにタタキの痕跡が認められる。

26は住居3 a埋土から出土した。口縁部から体部上半の破片であるため全体の形状は不明である。体部は直立し、口縁部は大きく外傾する。口縁端部は上下に突出し、下方の端部は鋭い。体部外面にはタタキの痕跡が認められ、回転ナデの後上から下方向にヘラケズリが施されており、体部内面は下位でヘラナデ、上位で回転ヘラナデが施されている。

28は住居3 a埋土から出土した。やや外傾する体部に短い口縁部が取り付く。口縁端部はやや上方につまみ上げられている。体部は回転ナデによる調整が施されている。

29は住居3 b埋土から出土した。直立気味の体部に外傾する口縁部を持ち、口縁端部は上下に突出している。調整は内外面とも剥落や摩滅により鮮明ではないが、回転ナデによる調整が施されている。

33は住居3 a埋土から出土した。やや湾曲する体部と短く外傾する口縁部を持ち、口縁端部は上下に突出する。体部外面には回転ナデによる調整が施されており、頸部付近まで下から上方向にヘラケズリが施されている。体部内面上半は回転ナデ調整が施されている。

11～13・19・27は土師器坏である。

11は住居3 a埋土から出土した。内湾気味の体部を持ち、体部下端は回転ヘラケズリが施されている。内面はヘラミガキが施されており、黒色処理がなされている。底部はヘラケズリが認められる。全体にタール状の物質が付着している。

12は住居3 a埋土から出土した。底部のみの破片のため全体の形状は不明である。内面は黒色処理がなされている。底部の切り離しは摩滅のため不明である。

13は住居a埋土から出土した。高台のみの破片のため全体の形状は不明である。内面は黒色処理がなされている。

19は住居3 a埋土から出土した。体部から底部の破片であり、内面は黒くないが、器表面には光沢がみられる。体部下端には回転ヘラケズリが施されており、底部は回転糸切りの後無調整である。器種は坏としたが、鉢の可能性もある。

27は住居3 a埋土から出土した。内湾気味に立ち上がる体部を持ち、内面はヘラミガキが施されており、黒色処理がなされている。底部は回転糸切りの後無調整である。

16は須恵器壺である。住居3 a埋土から出土した。口頸部のみの破片のため体部の形状は不明である。口縁部は緩やかな曲線を描きながら外反し、端部は上下に鋭く突出する。口縁外面と内面には降灰と自然釉が認められる。

17・25は須恵器甕である。

17は住居3 a埋土から出土した。

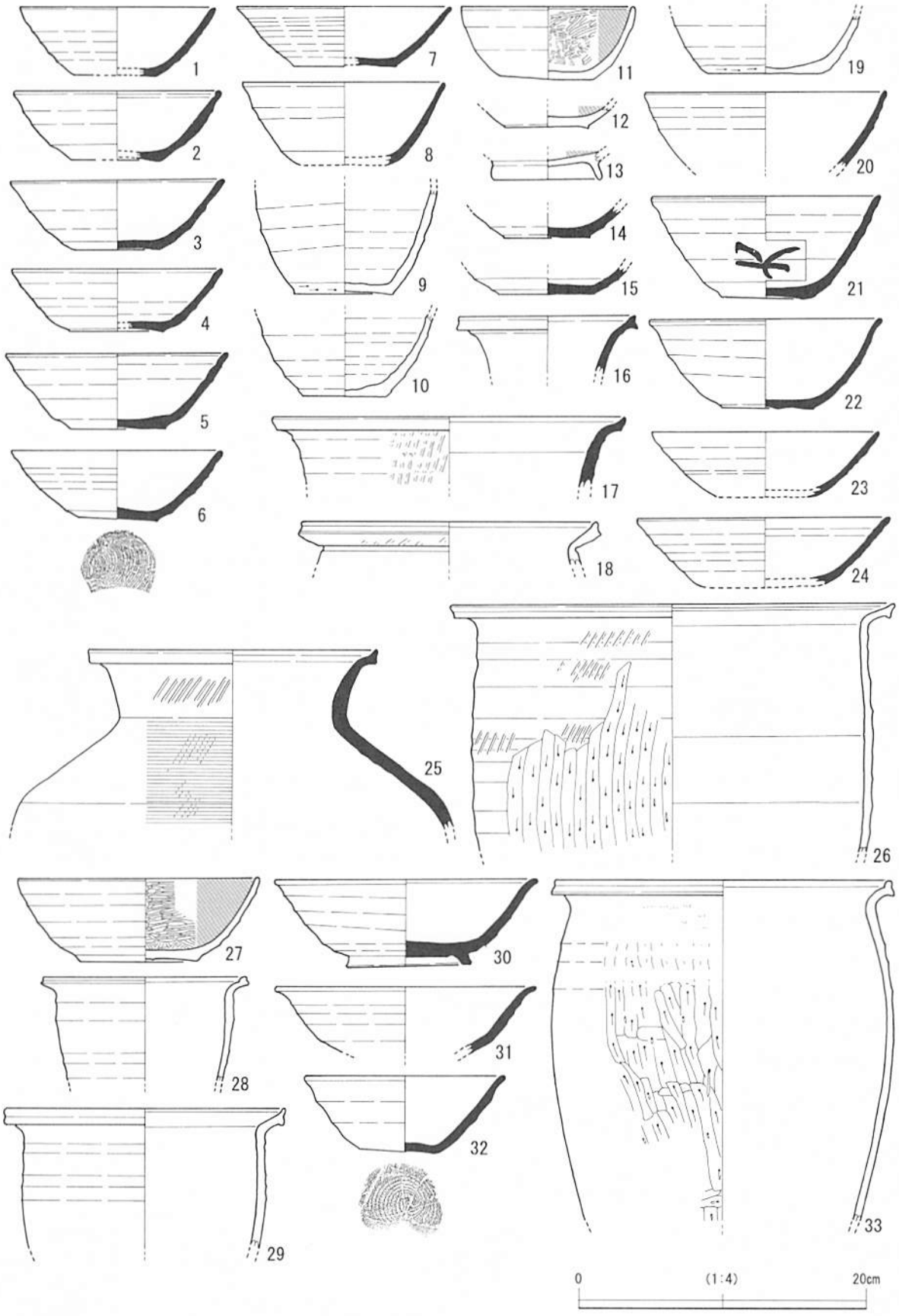


図12　竪穴住居３　出土遺物

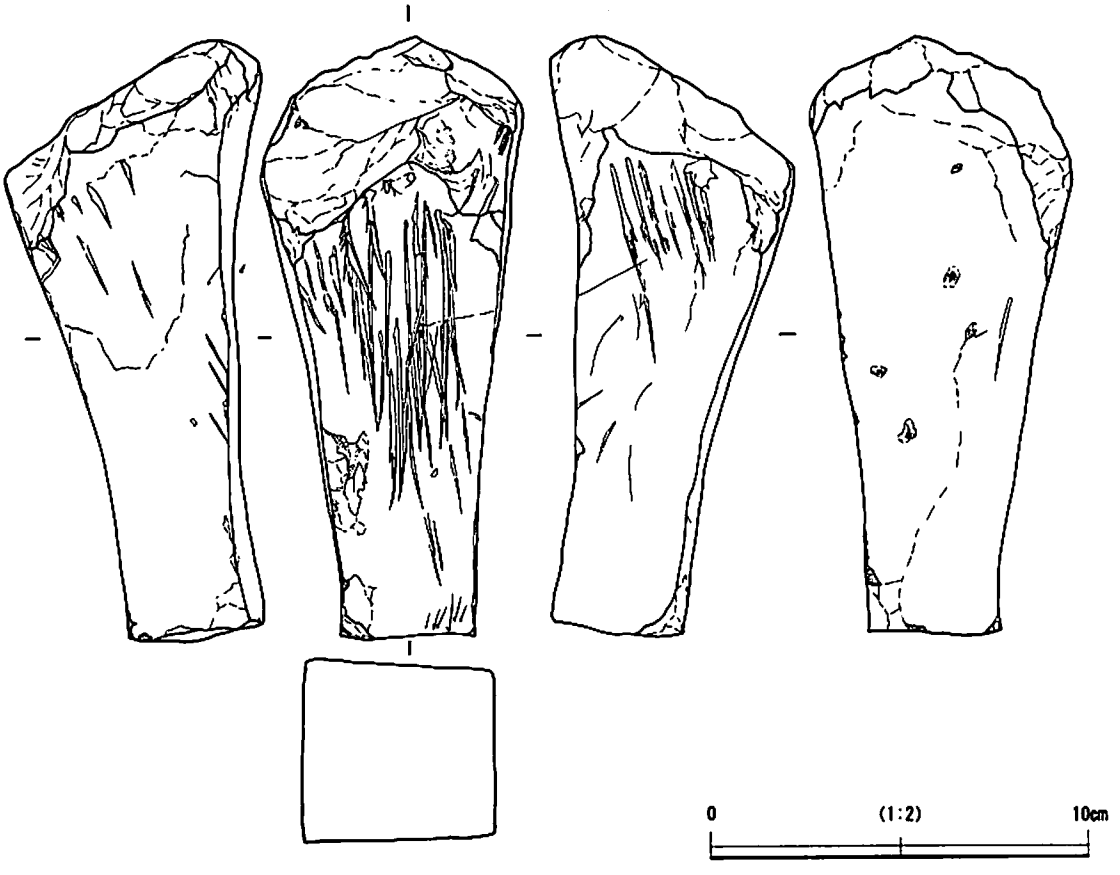


図13　竪穴住居３　出土石製品

25は住居３ｂ土坑１、住居３ｂ埋土などから出土した。ややなで肩の肩部に外傾する頸部を持ち、口縁部は水平気味に短く折れ、外方に端面を持ちながら上方につまみ上げられた口唇部を有する。頸部と体部外面にはタタキの痕跡がかすかに認められ、肩部から体部の外面にカキ目が施されている。体部にはガラス質化した自然釉が掛かる。

30・31は須恵器埦である。

30は住居３ａ土坑１から出土した。口縁部に僅かな欠けがあるが、ほぼ完形である。体部下半に膨らみを持ち、口縁部は外反する。底部には断面ハの字状の高台を有する。体部は回転ナデによる調整が施されており、底部は回転糸切りの後、高台貼り付けのためのナデ以外は無調整である。内面見込み部分は使用のためか器表面の摩耗が顕著である。

31は口縁部から体部の破片であるが、30と同様に外反する口縁部と体部下半に膨らみが認められる。底部は残存していないが形態から高台が付くものと思われる。

土坑１

土坑１は、Ｉ区中央付近に位置し、やや不整な円形を呈し、底面は段を有する。規模は最大径で45ｍ、最大の深さは22㎝をそれぞれ測る。埋土はしまりがないシルトであった。規模は小さく浅い土坑であるが、比較的まとまった遺物の出土が認められた。また、遺物の中には土器以外に焼土塊や炭化物が出土した。

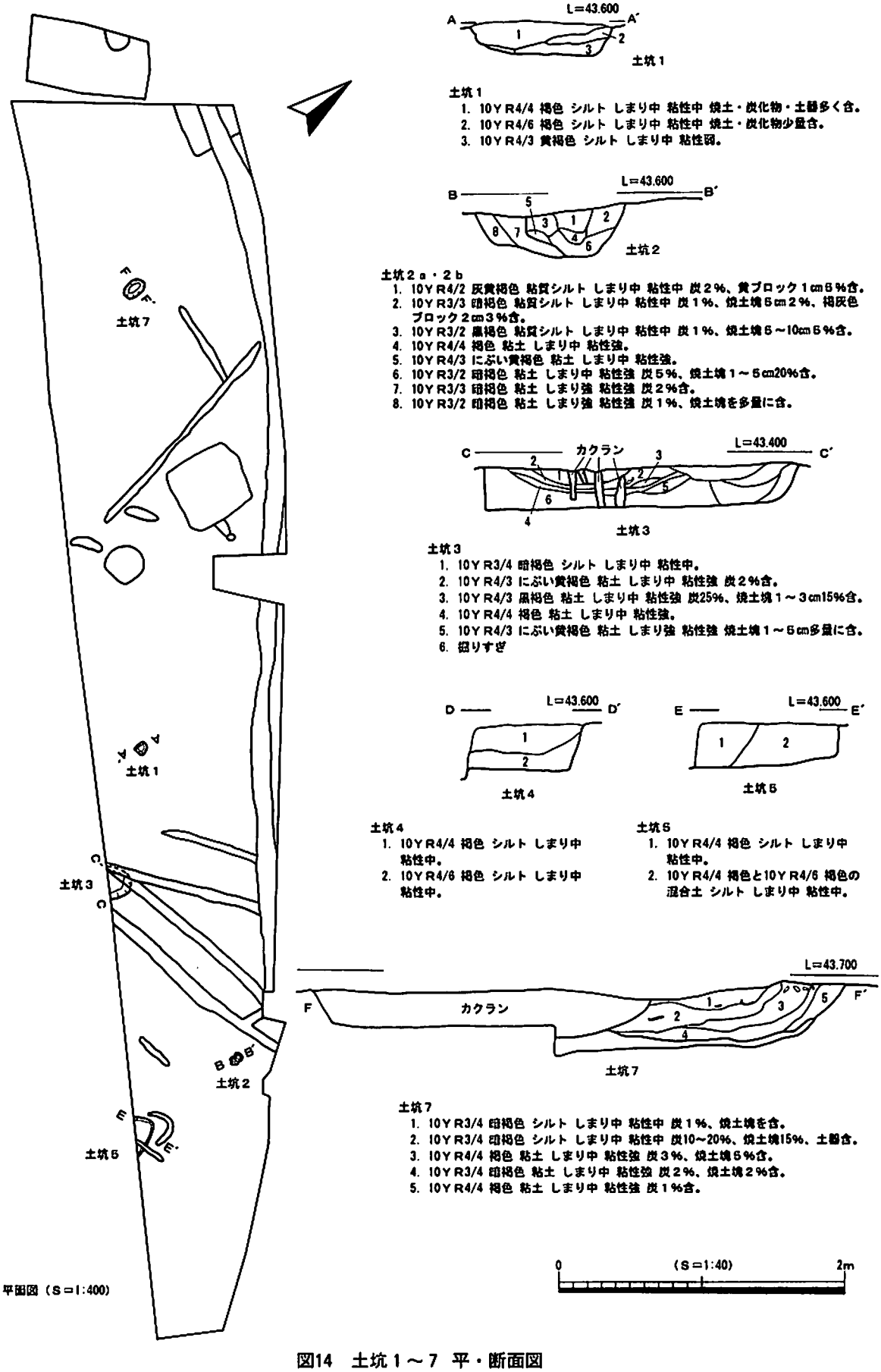


図14　土坑1～7 平・断面図

土坑２ａ

土坑２ａは、Ｉ区の東側に位置し、不整な円形を呈する。底面には若干の凹凸が認められる。規模は最大径で85㎝、最深部の深さは32㎝を測る。埋土はしまりのないシルトであり、埋土中からは多量の焼土塊や炭化物が出土した。時期を特定できる土器等の遺物は出土しなかったが、重複している土坑２ｂを切っていることから少なくとも土坑２ｂより新しい遺構であると考えられる。

土坑２ｂ

土坑２ｂは、Ｉ区の東側に位置し、土坑２ａと重複しながら存在する。平面形態は、土坑２ｂに切られているため推測の域を出ないが、コーナーがみられることから概ね方形を呈すると考えられる。また、底面はやや凹凸が認められる。規模は平面の一辺75㎝、深さ16㎝を測る。埋土はしまりのないシルトであり、埋土中からは焼土塊、炭化物が出土した。時期を特定できる土器等の遺物は出土しなかったが、重複している土坑２ａによって切られていることから、少なくとも土坑２ａより古い遺構であると考えられる。

土坑３

土坑３はＩ区南端に位置する。調査区内では一部のみを検出した。さらに、調査区内においては溝４と溝５によって切られていることから全体の形状を把握することは困難である。残存している部分から円形あるいは楕円形の平面形態が推測される。底面はほぼ平坦であった。規模は残存長約92㎝、残存する深さ18㎝である。埋土はしまりのないシルトであり、埋土中からは土器、炭化物、焼土が多量に出土した。また、最下層では焼土ブロック３㎝大のものが多く出土した。出土した土器の中で、土坑７や住居３から出土したものと接合関係が認められるものがあった。出土遺物は９世紀代のものに限られることから、遺構の時期も大差はないものと考えられる。

土坑１・３出土遺物

土師器・須恵器が主体を占める。土坑１からは土師器・須恵器坏、土師器甕が出土している。土坑３からは土師器・須恵器坏、土師器・須恵器椀、須恵器壺、須恵器甕が出土している。

１・２は須恵器坏であり、土坑１埋土から出土した。

１は口縁端部がやや外反する形態を呈する。体部の下半部から口縁部までが回転ナデによる調整が施され、

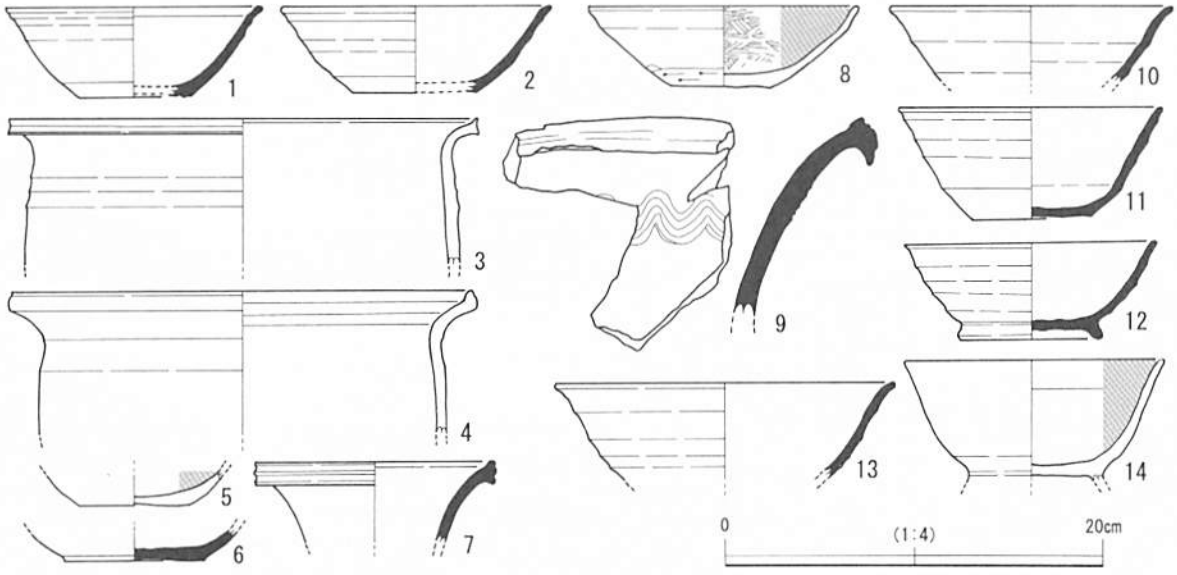


図15　土坑１・３　出土遺物

体部下半部から底部にかけてやや弱い横方向のナデが施されている。底部は回転糸切りの後無調整である。胎土には白色砂粒を含む。口縁部外面には、重ね焼きによる色調差がみられる。

2は口縁端部が緩く外反する形態を呈する。体部の下半部から口縁部までが回転ナデによる調整が施され、体部下半部から底部にかけてやや弱い横方向のナデが施されている。底部は回転糸切りの後無調整である。胎土には白色砂粒を含む。口縁部外面には、重ね焼きによる色調差がみらる。

3・4は土師器甕であり、土坑1埋土から出土した。

3は直立する体部を持ち、口縁部は大きく開く。口縁端部は若干上方につまみ上げられ、口縁端部下端は下方に比較的鋭い。体部外面にはロクロ目が明瞭に残り、体部内面は口縁部の屈曲部以下に回転ヘラナデが施されている。

4はやや直立気味の体部を持ち、口縁部は緩く外傾する。口縁端部は若干上方につまみ上げられる。体部外面は回転ナデの後回転ヘラナデが施されており、体部内面は不明瞭ながら回転ヘラナデが施されている。

5は土師器坏であり、土坑1埋土から出土した。底部のみの破片で、体部や口縁部の形態は不明である。全体的に摩滅が著しく、内面の器面調整は不明瞭であるが、黒化処理されている。体部外面下端には回転ヘラケズリが施されていると考えられるが工具の単位等は不明である。底部は回転糸切りの後無調整である。

6・10・11は須恵器坏であり、土坑3埋土から出土した。

6は底部のみの破片で、全体の形態は不明である。底部は回転糸切りの後無調整である。

10は口縁部が外反気味であるが、底部が残存していないため全体の形態は不明である。体部は回転ナデにより調整されている。

11は外傾する体部を呈する。体部の下半部から口縁部までが回転ナデによる調整が施され、体部下半部から底部にかけてやや弱い横方向のナデが施されている。底部は回転糸切りの後無調整である。胎土には白色砂粒を含む。口縁部外面には、重ね焼きによる色調差がみられる。

7は須恵器壺であり、土坑3埋土から出土した。口頸部のみの破片であり、体部の形態は不明である。口縁端部はやや外傾気味で、上方につまみ上げられている。口縁部には端面があり沈線状の条線が一条ある。頸部内外面とも回転ナデが施されており、ロクロ目の細かな凹凸が認められる。内面には薄い降灰が認められるが、大半は剥脱している。胎土には白色砂粒を含む。

8は土師器坏であり、土坑3から出土した。口縁部から体部にかけて欠損している箇所が多いが底部は完存している。体部は回転ナデが施されており、下端部には不明瞭ながら回転ヘラケズリの痕跡が認められる。底部内面には放射状、体部内面上半には横方向のヘラミガキが施されている。底部は回転糸切りの後無調整である。

9は須恵器甕であり、土坑3埋土から出土した。口頸部のみの破片である。口径を示す曲線は僅かであることから大形の甕であることが考えられる。口頸部はやや外傾し、口縁は上下に突出している。頸部には4状1セットの波状文が施されている。

12・13は須恵器塊であり、土坑3埋土から出土した。

12は口縁部に外反はみられず、体部はやや丸みを持つ形態である。底部にはハの字形の貼り付け高台がある。体部は回転ナデによって調整されている。底部は回転糸切り後、高台貼り付けのためのナデ以外は無調整である。

13は口縁部のみの破片であり、全体の形態は不明である。しかし、著しく外反する口縁部とやや膨らみを持ちながら緩く内湾する体部下半の形態より塊とした。体部には回転ナデが施されている。

14は土師器埦であり、土坑３から出土した。全体に摩滅が著しく、高台底面も欠損している。口縁部はやや外反気味で体部下半に張りを持つ形態である。内外面とも調整は不明であるが、黒色処理されている。底部は回転糸切り後、高台貼り付けのためのナデ以外は無調整である。

土坑４

土坑４はＩ区西端に位置する。遺構は調査区外へも伸びるため平面形態は不明確だが、ほぼ円形を呈するものと考えられ、断面形態は皿状を呈し比較的平坦である。規模は、残存部で直径約1.6ｍ、深さ32㎝を測る。埋土は遺構検出面の基盤層と大きく異ならないシルトを主体とし２層からなる。上層からは土器が出土した。出土した土器は土師器甕で、実測に耐えうる資料ではないが、他の土坑出土遺物とほぼ同時期のものと考えられる。

土坑５

土坑５はＩ区南端に位置する。遺構は調査区外へ続くため、全体の平面形態は不明であるが、検出した部分には角が存在することから方形を呈するものと推測される。規模は残存部で長辺約2.5ｍ、短辺約1.3ｍ、深さは32㎝を測る。遺構の側壁は垂直気味に立ち上がり、底面は平坦で比較的堅緻であった。埋土はシルトを主体とし、上下２層からなる。層中には不純物がみられず、安定しているため自然に堆積したものと考えられる。埋土からは土師器坏片、土師器甕片、須恵器坏片などの遺物が若干量出土した。いずれも細片のため実測は叶わなかったが、９世紀代のものと考えられる。遺構の形態、規模、埋土などの諸属性より、その他の土坑類とは性格を異にすると考えられる。決定的な証拠はないものの竪穴住居である可能性も考慮にいれる必要がある。

土坑７

土坑７はＩ区西側、竪穴住居２と竪穴住居３との中間に位置する。近現代の撹乱によって北東隅が失われている。平面形態は長円形を呈し、底面はほぼ平坦である。規模は長軸3.26ｍ、短軸2.16ｍ、最深部の深さ35㎝を測る。埋土ははしまりのないシルトを主体とし、５層からなる。埋土中からは、焼土塊、炭化物、土器が多量に出土した。出土した土器は土師器、須恵器であり、竪穴住居３や土坑３の埋土から出土した土器と接合関係があるもの、同一個体と認められるものが含まれている。土器は概ね９世紀代のものが中心である。

土坑７出土遺物

土坑７埋土からの出土遺物は土師器・須恵器が主体を占め、器種構成は土師器・須恵器坏、土師器・須恵器甕などから成る。

１～４・13は須恵器坏である。１は口縁部が外反せず、体部は下半でやや丸みを持つ。体部の下半部から口縁部までが回転ナデによる調整が施され、体部下半部から底部にかけてやや弱い横方向のナデが施されている。底部は回転糸切りの後無調整である。胎土は白色砂粒を含み、口縁部外面には、重ね焼きによる色調差がみられる。

２は焼成不良のため摩滅が著しい。口縁部は外反せず、体部下半はやや丸みを帯びる。体部から口縁部までが回転ナデによる調整が施され、体部下端部はやや弱い横方向のナデが施されている。底部は回転糸切りの後無調整である。胎土には若干量の白色砂粒を含む。口縁部外面には、重ね焼きによる色調差がみられる。

３は口縁部が外反せず、体部は下半でやや丸みを持つ。体部の下半部から口縁部までが回転ナデによる調整が施され、体部下半部から底部にかけてやや弱い横方向のナデが施されている。底部は回転糸切りの後無調整である。底部外面には焼成前に「十」字状のヘラ記号が施されている。胎土は白色砂粒を含む。

4は口縁端部がやや外反しているが、底部が残存していないため全体の形態は不明である。体部の下半部から口縁部までが回転ナデによる調整が施され、ロクロ目を明瞭に残している。胎土は白色砂粒を含み、口縁部外面には、重ね焼きによる色調差がみられる。

13は口縁端部がやや外反しているが、底部が残存していないため全体の形態は不明である。体部の下半部から口縁部までが回転ナデによる調整が施され、ロクロ目を明瞭に残している。胎土は白色砂粒を含み、口縁部外面には、重ね焼きによる色調差がみられる。

5～9は土師器坏である。

5は体部過半に丸みを持つ形態を呈する。底部内面は放射状、体部内面には横方向の密なヘラミガキで器

図16　土坑7　出土遺物

面調整が施され、黒色処理されている。体部下端は回転ヘラケズリが施されている。底部の切り離しは摩滅のため不明瞭であるが、回転ヘラケズリの痕跡が縁辺において僅かに確認できる。

6は底部のみの破片であり、全体の形態は不明である。内面は密なヘラミガキが施されているが、底部内面のヘラミガキは摩滅により不明であるが、体部内面は横方向のヘラミガキが施されている。内面は黒色処理がなされている。外面調整は体部下端および底部に回転ヘラケズリ痕が確認できるが、切り離し法は不明である。

7は緩く外傾する体部、体部下半にやや丸みを持つ形態を呈する。外面は回転ナデ調整が施されているが、その他の調整は摩滅により不明である。内面はヘラミガキが施されており、黒色処理がなされている。底部外面においても摩滅や器表面の剥落が顕著なため、調整や切り離し法は不明である。

8は口縁部が欠損しているため、全体の形態は不明である。体部内面はヘラミガキが施されており、黒色処理されている。外面調整は体部に回転ナデが確認でき、体部下端は回転ヘラケズリが施されている。底部は回転糸切りの後無調整である。

9は内外面とも摩滅が著しい。体部は回転ナデが施され、内面は黒色処理されていると思われるが、ヘラミガキは不明瞭である。体部下端は回転ヘラケズリが施されており、底部は回転糸切りの後無調整である。

10～12・14～18・20・21は土師器甕である。

10は底部のみの破片であるため全体の形態は不明である。内外面とも回転ナデが施されており、体部下端には回転ヘラケズリはみられない。底部は回転糸切りの後無調整である。

11は底部のみの破片であるため全体の形態は不明である。外面は不定方向のヘラケズリが施されているが、その他の調整は不明である。底部には切り離しの痕跡が認められず、外面からの指頭圧痕が複数みられるのみである。

12は底部のみの破片であるため全体の形態は不明である。外面には下から上方向へのヘラケズリが認められるが砂粒の動きは顕著ではない。底部には、何かの圧痕が残っているが圧痕原体は不明である。

14は短い口縁部にやや丸みを帯びた体部を持つ。口縁端部は上方と下方にやや突出する。体部は回転ナデが施されているが、内面調整は、器表面がやや剥落しているため不明である。

15は頸部から体部にかけてやや丸みを持ち、口縁部は肥厚し端部は鋭く上方へ向く。体部内外面とも回転ナデが施された後回転ヘラナデによる調整が施されている。内面には炭化物の付着がかすかに認められる。

16はやや外傾気味の体部に短い口縁部を持ち、口縁端部は内傾する。器壁は極限まで薄く体部外面には回転ナデの痕跡が顕著である。形態は甕であるが用途については疑問を残す。

17は直立気味の体部にやや開いた口縁部を持ち、端部は丸く上方につまみ上げられる。体部上位にはタタキの痕跡が認められ、下位ではヘラケズリが施されている。内面は縦方向のヘラナデの後、体部上位のみ回転ヘラナデが施されている。

18は頸部から体部にかけてやや丸みを持ち、口縁部は肥厚し端部は鋭く上方へ向く。体部内外面とも回転ナデが施された後回転ヘラナデによる調整が施されている。

20は底部のみの破片である。外面は不定方向のヘラケズリが施されている。

19は土師器鉢である。適当な器種名がないため甕とした。丸みを帯びた体部と外湾する口縁部を持つ。体部外面は粘土紐痕が明瞭でかすかにタタキの痕跡とヘラケズリが認められる。内面は横方向のヘラミガキと黒色処理が施されている。

22は須恵器甕である。口縁部から体部半ばまでの破片であるが、口縁端部は欠損している。体部外面には

擬格子状のタタキ、内面には放射状の当て具痕がみられる。

井戸1

井戸1は、1区中央よりやや南に位置する。平面形態は、やや不整な円形を呈している。断面形態は、上部約3分の1は大きく、下部3分の2は直立する壁面を持つ。底面は、ほぼ平坦である。

規模は、開口部で直径2.4m、底面で直径0.5mを測り、深さは3.6mを測る。

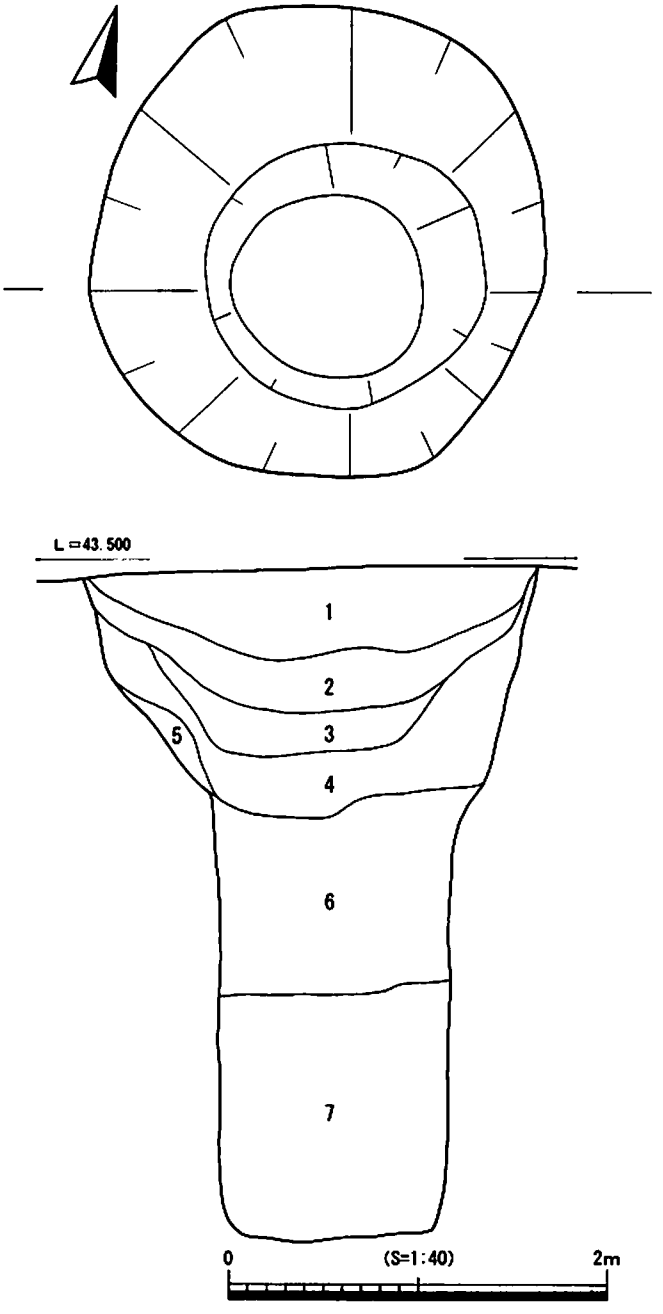
埋土は大きく分けると上下の2層からなる。上層は細分すると5層からなり、いずれもシルトを主体とする自然堆積層である。若干ながら遺物を含んでいる。下層は、開口部よりも直径を減じた下位3分の2であり、細分すると上下2層に分けられる。いずれも湧水のため還元が著しく、グライ化した青灰色粘土の自然堆積層である。この層からは自然木片等以外の人工遺物の出土はみられなかった。

この井戸は内部から井戸枠材の痕跡やその断片がまったくみられなかったことから井戸枠を持たない素掘りの井戸であったと考えられる。

また、井戸1の埋土はすべて自然堆積によるものであり、調査中もかなり激しい湧水が認められた。このことから井戸1は井戸水が枯れたことによる廃絶ではなく、人や集落の移動などによって使用されなくなり、自然に埋没したものと考えられる。

井戸1埋土からの出土遺物は、土器の微細な破片が若干量出土したが、時期を判別するに足る資料ではなかった。しかし、他の遺構同様に中世以降の遺物が確認されなかったことから古代の遺構である可能性が考えられる。

土器以外の出土遺物としては、フイゴの羽口片や鉄滓、鍛造剥片などが埋土上位より出土した。



1. 10YR 3/4 暗褐色粘質シルト（しまり強、粘性強）地山B.L 混じる
2. 10YR 4/4 褐色粘土（しまり中、粘性強）地山B.L 炭混じる
3. 10YR 3/3 暗褐色粘土（しまり強、粘性強）炭微量に混じる
4. 10YR 3/4 暗褐色粘土（しまり強、粘性強）
5. 10YR 3/3 暗褐色粘土（しまり弱、粘性強）
6. 5B 5/1 青灰色粘土（しまり強、粘性強）グライ化図著
7. 5B 5/1 青灰色粘土（6より粘性強）グライ化図著

図17　井戸1　平・断面図

井戸１出土遺物

１・２はフイゴの羽口片である。１は外径5.2cm、内径3.1cmの円筒状を呈し、残存する長さは4.3cmである。先端部は使用により還元しており、鉄の溶着が認められる。２は外径4.2cm、内径2.2cmの円筒状を呈し、残存する長さは3.7cmである。先端部は使用により還元しており鉄の溶着が認められる。３は椀形滓である。長軸6.5cm、短軸5.8cmの盤状を呈する。重さは2.5ｇを計る。

炉１

炉１は、Ｉ区中央で検出した。平面は長楕円形を呈し、北東側は幅が狭く南西側はそれより幅広である。２層の上面で焼土・炭化物・黒褐色シルトの広がりで検出した。検出された形は、長軸2.0ｍ・短軸60cmの長円形を呈する。深さは、最深部で50cmを測る。完掘後の形状は船底形を呈する。埋土は主に黒褐色土・暗褐色土のシルト質の土によって構築されており、焼土は上位面のみにある。中間層に暗褐色土をはさみ、最下層には炭化材を一面に敷き詰められている。

壁は緩やかな半円形を描きながら立ち上がり、底面は一部において平坦を成しその他の箇所は船底形になる。粘土塊３～４cm大のもの以外は出土しなかった。

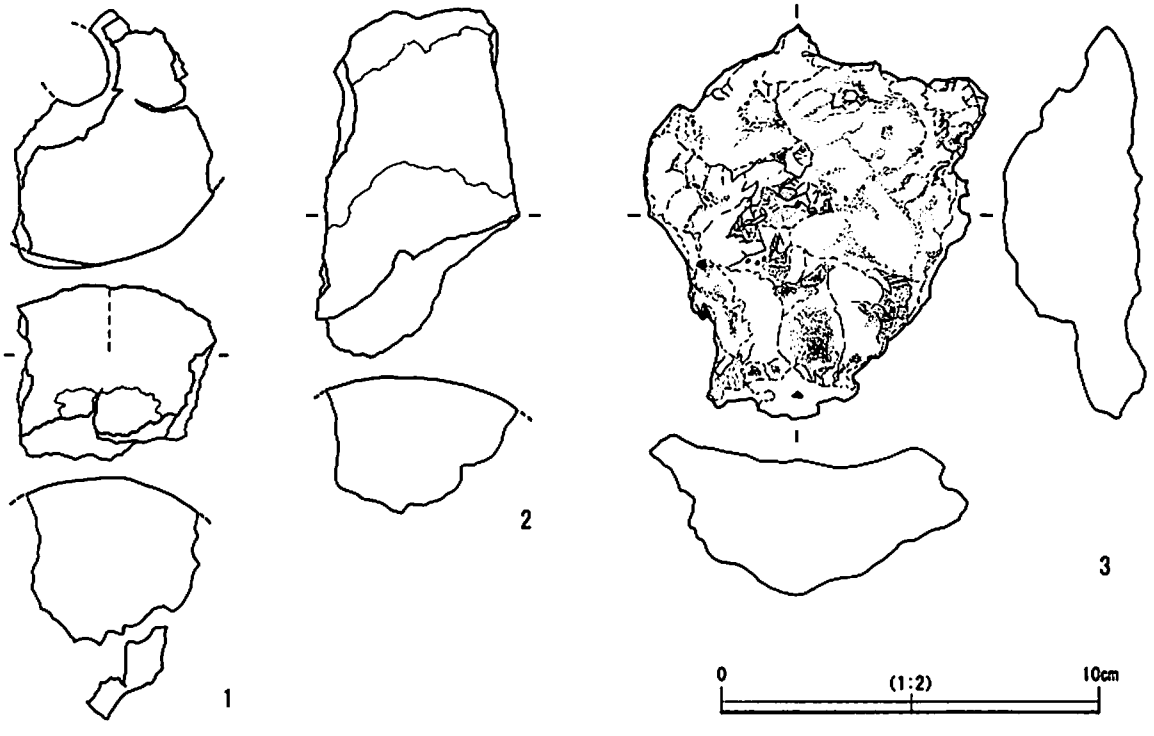


図18　井戸１　出土遺物

この遺構は、現表土より30～40cm下がっていることから、当時操業されていた上部箇所はその後の開発等により残存していない。残存部は当遺構の下半分ぐらいと推測される。検出時には、両端に東西方向に広がりを持つ焼土がある。焼土の内側には支脚と推測される礫4つが配置されており、これらの礫にはいずれ焼土に接する面に比熱を受けた形跡がある。礫の1と3は横方向に、2と4は縦方向にそれぞれ設置され、高さも43.50m～43.64mを測る。底面には炭化材を一面に敷き詰めてあり、その上に支脚焼土が構築されている。焼土を中心に周辺にはマンガンを含む土で構築されており、遺構内からは粘土塊以外の還元焼土・鉄滓・鍛造剥片・炉壁等の副産物は出土していない。しかし同じ遺構形態を持つ炉2から炉内滓1点が出土していることから製鉄関連の遺構であると推測される。

また、付近に付随する遺構は無く全体を構成できる施設を確認することができなかった。

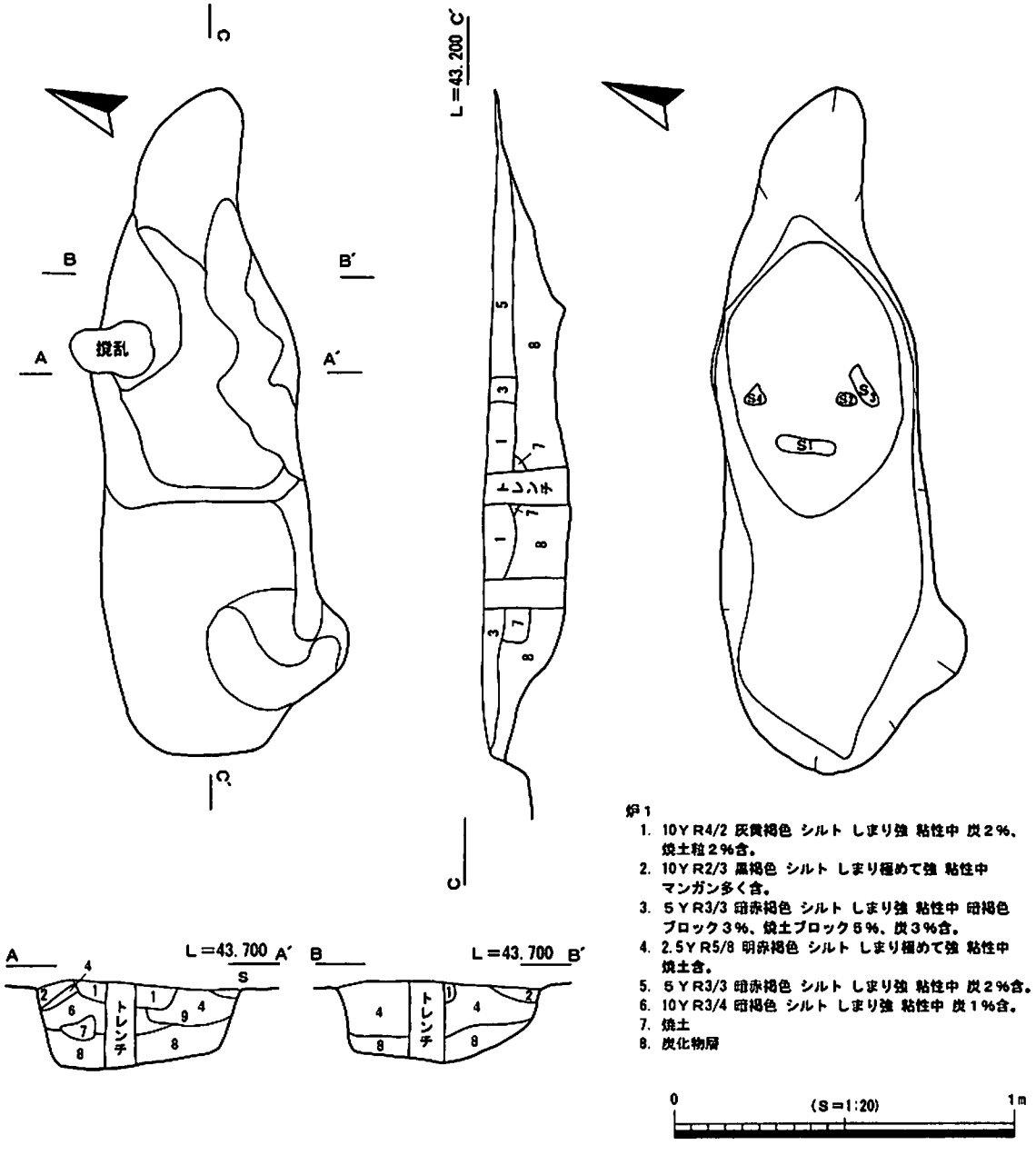


図19　炉1　平・断面図

時期は、不明である。

炉2

ＢＩｂ４グリッドに位置し、２層上面において黒褐と褐色シルトとほぼ中央に馬蹄形状をなす焼土の広がりとして検出した。 検出された形状は、長軸45.5cm短軸12.2cmで長円形の部類に属している。深さは、最深部で60cmを測る。完掘後の形状は船底形を呈する。埋土は、主に黒褐土・暗褐土のシルト質の土によって構築されており、焼土は上位面のみにある。中間層に暗褐土をはさみ、最下層においては炭化材を一面に敷き詰められている。壁は、緩やかな半円形を描きながら立ち上がり、底面は一部でほぼ平坦を成す。出土遺物

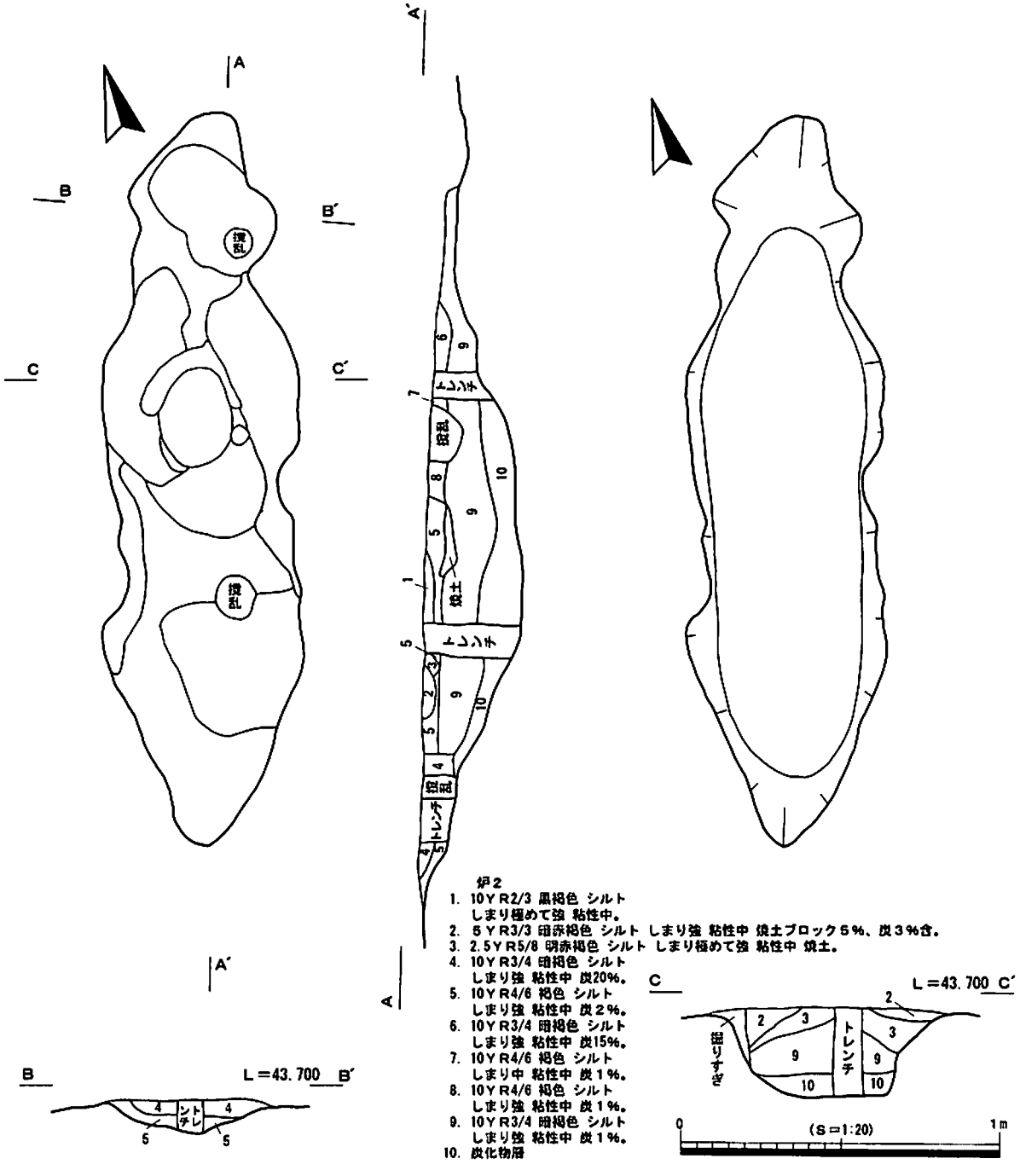


図20　炉2 平・断面図

は炉内滓１点と粘土塊３～４㎝大数点のもの以外は出土しなかった。当遺構は現表土より30～40㎝下がっていることから、当時操業されていた上部箇所はその後の開発等により残存していない。残存部は当遺構の下半分ぐらいと推測される。検出時に確認した馬蹄形状の焼土は、円形をなし焼土自体は縦に、両脇には比熱し堅く締まった構築土が東に延びるように形成されている。焼土を中心とする周辺の埋土にはマンガンを含む層がある。底に炭化材を敷き詰めていることから製鉄炉の可能性であるが、炉内滓１点・粘土塊以外で還元焼土・鍛造剥片・炉壁といった副産物が得られていないことから断定することは難い。同じ遺構形態を持つ炉１からは、焼土塊以外は何も出土していない。また付近に付随する遺構は無く全体を構成できる施設を確認することができなかった。時期は不明である。

溝１～12

Ⅰ区では12条の溝を検出した。溝１は、Ⅰ区北端に位置し、ほぼ東西を指向する全長62ｍの溝である。溝の流末は、東西両端ともに調査区内では検出できず、いずれも調査区外にまだ延びることが確実である。

溝の規模は幅50㎝～80㎝、深さ40㎝～50㎝を測る。

埋土は水性堆積の間層を介し上下２層からなる。埋土上層からは鉄滓、フイゴ羽口片、土器細片が出土した。

溝２は、Ⅰ区北端に位置し、ほぼ南北を指向する全長5.2ｍの溝である。溝の流末は、東西両端ともに調査区内では検出できず、いずれも調査区外にまだ延びることが確実である。

埋土からは土器片がわずかに出土した。溝１と同一の遺構である。

溝３は、Ⅰ区東側に位置し、ほぼ東西を指向する全長15ｍの溝である。溝の流末は、南北両端ともに調査区内では検出できず、いずれも調査区外にまだ延びることが確実である。

溝の規模は幅1.0ｍ～1.4ｍ、深さ15㎝～25㎝を測る。

溝10と切り合いさらに、土坑３を切る。溝10より古いと考えられる。

溝４は、Ⅰ区東側に位置し、ほぼ東西を指向する全長13.4ｍの溝である。ほぼ直線的に伸び、溝の流末は、東西両端ともに調査区内では検出できず、いずれも調査区外にまだ延びることが確実である。

溝の規模は幅65㎝～80㎝、深さ20㎝～32㎝を測る。

溝５は、Ⅰ区東側に位置し、ほぼ南北を指向する全長11ｍの溝である。溝の流末は、東西両端ともに調査区内では検出できず、いずれも調査区外にまだ延びることが確実である。

溝の規模は幅60㎝～72㎝、深さ15㎝～25㎝を測る。

北端は溝１によって切られる。よって、溝１より古いと考えられる。

溝６は、Ⅰ区東側に位置し、ほぼ東西を指向する全長6.7ｍの溝である。溝の流末は、西端で検出した。東端は調査区外にまだ延びることが確実である。

溝の規模は幅31㎝～35㎝、深さ８㎝～23㎝を測る。

東端で溝１に切られる。よって溝１より古いと考えられる。

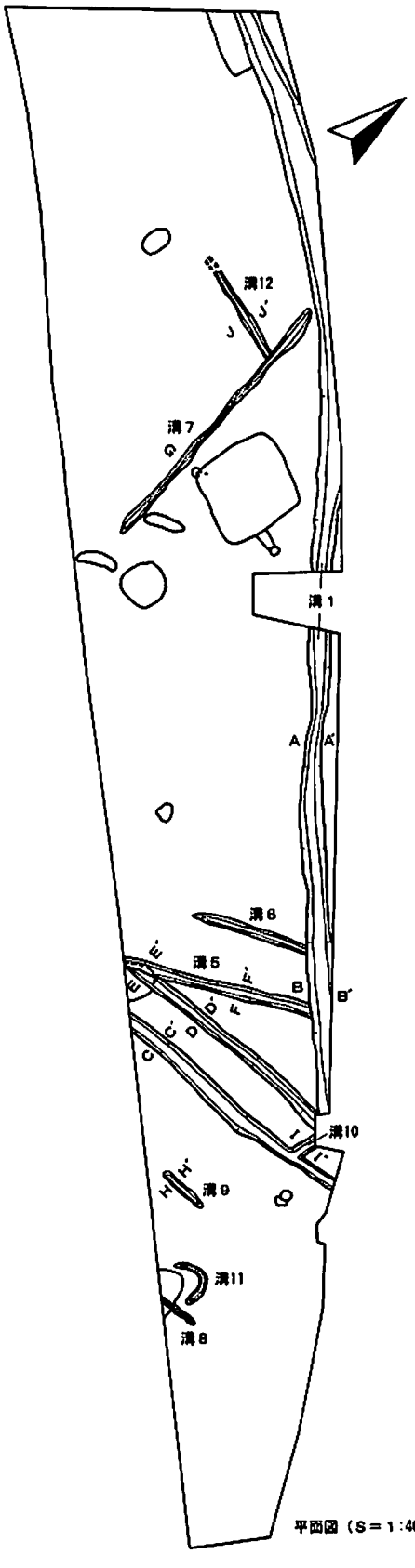
溝７は、Ⅰ区西側に位置し、ほぼ南北を指向する全長16.7ｍの溝である。溝の流末は、南北両端ともに調査区内検出した。

溝の規模は幅40㎝～82㎝、深さ８㎝～20㎝を測る。

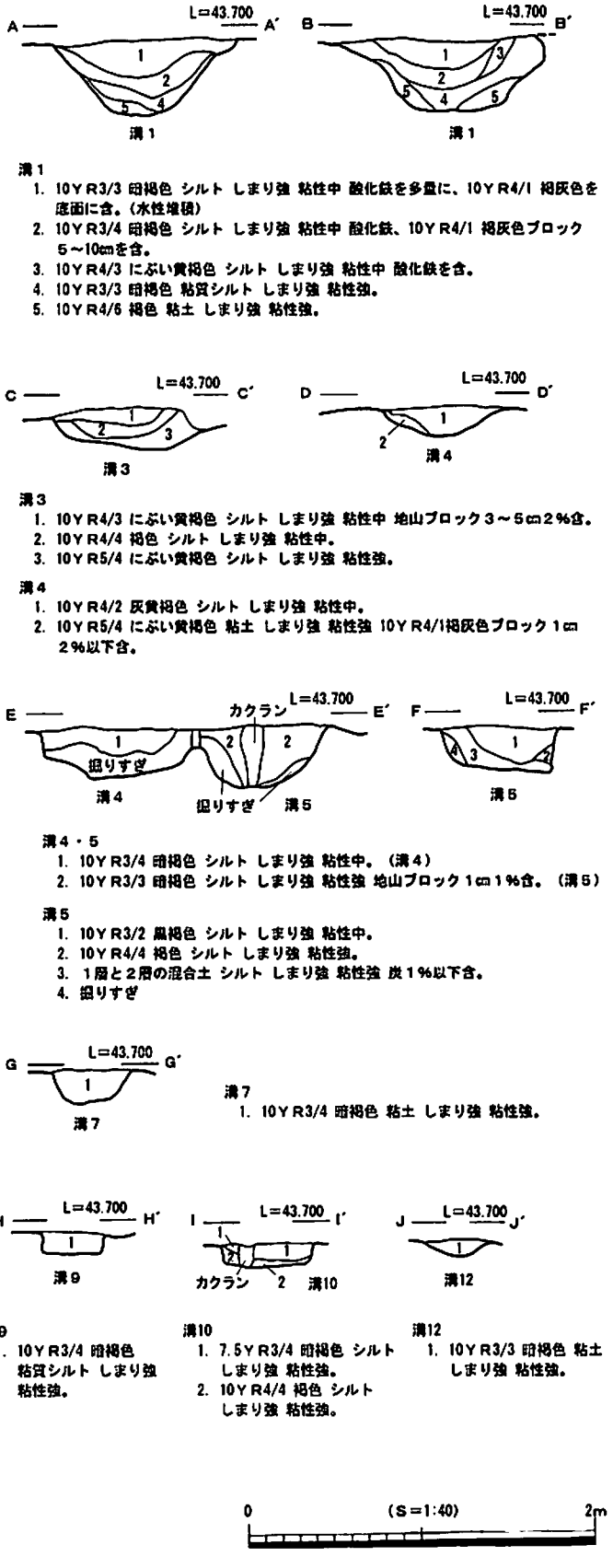
溝８は、Ⅰ区東側に位置し、ほぼ東西を指向する全長2.5ｍの溝である。この溝は、西端が調査区外へ続く。

溝の規模は幅28㎝、深さ12㎝を測る。

土坑５を切る。



平面図（S＝1:400）



溝1
1. 10YR3/3 暗褐色 シルト しまり強 粘性中 酸化鉄を多量に、10YR4/1 褐灰色を底面に含。（水性堆積）
2. 10YR3/4 暗褐色 シルト しまり強 粘性中 酸化鉄、10YR4/1 褐灰色ブロック 5～10cmを含。
3. 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト しまり強 粘性中 酸化鉄を含。
4. 10YR3/3 暗褐色 粘質シルト しまり強 粘性強。
5. 10YR4/6 褐色 粘土 しまり強 粘性強。

溝3
1. 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト しまり強 粘性中 地山ブロック 3～5cm 2%含。
2. 10YR4/4 褐色 シルト しまり強 粘性中。
3. 10YR5/4 にぶい黄褐色 シルト しまり強 粘性強。

溝4
1. 10YR4/2 灰黄褐色 シルト しまり強 粘性中。
2. 10YR5/4 にぶい黄褐色 粘土 しまり強 粘性強 10YR4/1褐灰色ブロック 1cm 2%以下含。

溝4・5
1. 10YR3/4 暗褐色 シルト しまり強 粘性中。（溝4）
2. 10YR3/3 暗褐色 シルト しまり強 粘性強 地山ブロック 1cm 1%含。（溝5）

溝5
1. 10YR3/2 黒褐色 シルト しまり強 粘性中。
2. 10YR4/4 褐色 シルト しまり強 粘性強。
3. 1層と2層の混合土 シルト しまり強 粘性強 炭 1%以下含。
4. 掘りすぎ

溝7
1. 10YR3/4 暗褐色 粘土 しまり強 粘性強。

溝9
1. 10YR3/4 暗褐色 粘質シルト しまり強 粘性強。

溝10
1. 7.5YR3/4 暗褐色 シルト しまり強 粘性強。
2. 10YR4/4 褐色 シルト しまり強 粘性強。

溝12
1. 10YR3/3 暗褐色 粘土 しまり強 粘性強。

図21　溝1～12 平・断面図

溝９は、Ⅰ区東側に位置し、ほぼ東西を指向する全長3.2ｍの溝である。

溝の規模は、幅22cmを測る。

溝10は、Ⅰ区東側に位置し、ほぼ南北を指向する全長1.3ｍの溝である。溝の規模は幅62cm、深さ24cmを測る。

溝３と切り合い、溝３より新しい。

溝11は、Ⅰ区東側に位置し、円形の周溝状を呈する全長1.2ｍの溝である。

溝の規模は幅５cm、深さ3.3cmを測る。

溝12は、Ⅰ区東側に位置し、ほぼ南北を指向する全長4.2ｍの溝である。溝の規模は幅32cm～36cm、深さ20cm～24cmを測る。東西端の底面における比高は約１cmあり、西端底面の方がやや低い。埋土は、不純物皆無のシルトによる単一層であった。

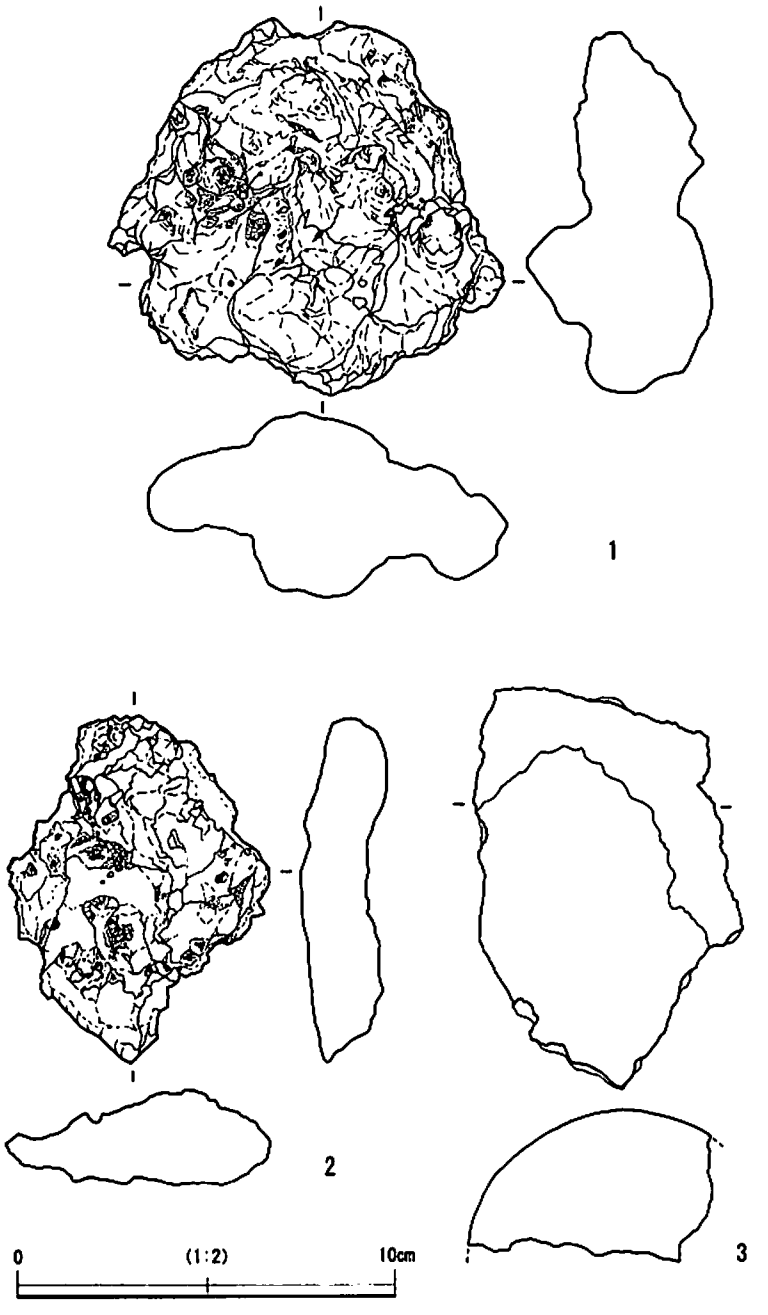


図22　溝１　出土遺物

2．Ⅱ区の遺構と遺物

Ⅱ区では後世の撹乱や削平が著しく、遺構は検出できなかった。なお、下層を確認するためにトレンチを設定し検出面より掘り下げた。その結果、トレンチ底で砂礫層を検出した。砂礫層を構成する主要な礫は角が無い円礫であり土砂堆積物の可能性が高い。このことから時期や規模は不明確ながら、旧河道の存在が推測される。遺物は、近現代の耕作土や撹乱の埋土等遺構外から土師器、須恵器片が出土した。しかしながら、いずれの遺物においても微細な破片であるため実測に耐えうる資料ではなかった。

3．Ⅲ区の遺構と遺物

Ⅲ区の検出面は、旧耕作土及び旧造成盛土の直下に広がる。検出面の標高は西端42.0ｍ、東端40.1ｍを測る。東端は、後世の削平が著しくやや低くなっており、遺構は検出できなかった。しかし、検出面では竪穴住居１棟、溝４条を検出した。

竪穴住居１

竪穴住居１は、Ⅲ区東側に位置する。平面形状は方形を呈し、主軸は東西方向である。

規模は、主軸である東西長で4.2ｍ、主軸と直交する南北長で3.8ｍを測る。残存する側壁の高さは、北側辺で25cm、南側辺で22cmを測る。

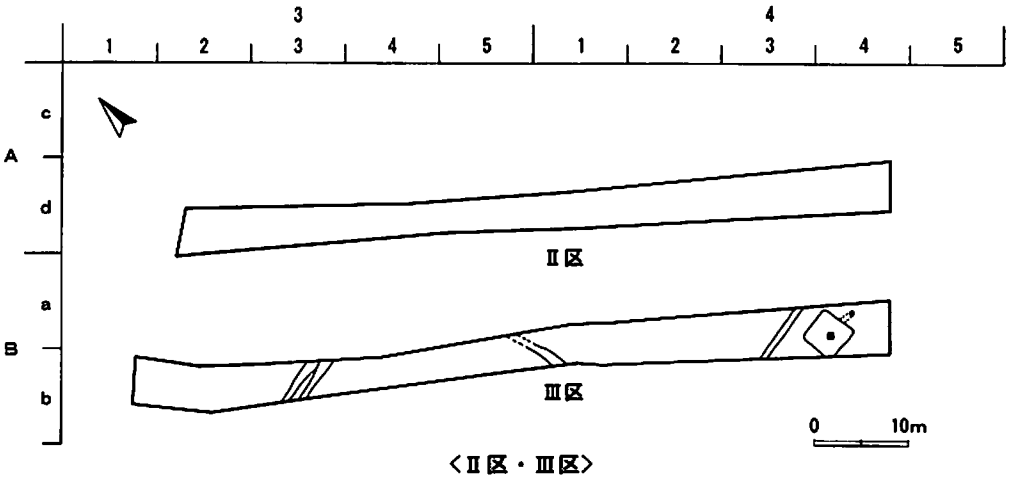
住居を充填する埋土は、やや粘質のシルトであった。

ほぼ平坦な床面を有し、床面の面積は約16.4㎡、床面南東側では約３㎡の貼り床が施されている。床面には、土師器、須恵器などの土器類が良好に遺存していた。特に、東側壁付近の床面には多くの土器が集中して出土した。また、床面中央では、厚さ５cm、径24cmの円形を呈する焼土を検出した。

床面で検出した柱穴は４基を数え、これら柱穴１～４の４基が主柱穴になると考えられる。

カマドは、東側壁中軸線よりやや南寄りに設置されており、南北両袖とも被熱のため赤化していた。北側袖は、上部が崩落しており、約２cmの高まりのみが残存していたが、南袖は良好に残存していた。両袖とも土器や礫等の芯材はみられず、粘質土を突き固めて構築されている。燃焼部底面は被熱の痕跡を残し、中央には底部を上向きにした土師器甕が出土した。甕は明瞭な２次焼成の痕跡は窺えないが、出土状況から支脚として転用され設置されたものと考えられる。

煙道は断面径22cmの円筒状を呈し、カマドから煙出しまで1.6ｍを測る刳り抜き式のものである。底面、側面、天井のいずれも被熱し、崩落を免れ良好に遺存している。煙道は煙出しからカマドに向け、約２％の登



〈Ⅱ区・Ⅲ区〉

図23　Ⅱ・Ⅲ区遺構配置図

り勾配を持つ。煙道埋土は、炭化物を多量に含むシルトであった。埋土の明瞭な堆積方向はみられなかったが、煙出しの位置と形状から考えて開口していた煙出しから流入したものと推測できる。煙出しは平面径30cmの正円形で、煙道には断面キセル状に取り付く。煙出し埋土から土師器甕片が出土した。

竪穴住居1出土遺物

土師器・須恵器が主体を占め、器種構成は土師器甕がやや多い傾向にある。これらの遺物は竪穴住居埋土、床面、柱穴埋土、カマド、煙道、煙出しから出土した。

1～3・5は、須恵器坏である。1と3は住居の東壁近くの床面直上で正置された3の上に1が合わせ口状に伏せて置かれた状況で出土した。

1は口縁端部がやや外反する形態を呈する。体部の下半部から口縁部までが回転ナデによる調整が施され、体部下半部から底部にかけてやや弱い横方向のナデが施されている。そのため、体部下半部に調整差による稜が生じている。底部は回転糸切り痕を明瞭に残し、糸切りの後無調整である。胎土には白色砂粒を含む。口縁部外面には、重ね焼きによる色調差がみられ、端部付近はやや濃い色調を呈する。

3は体部から口縁部にかけて器壁が薄く、最小で2㎜である。1と同様に体部の下半部から口縁部までが回転ナデによる調整が施され、体部下半部から底部にかけてやや弱い横方向のナデが施されている。そのため、体部下半部に調整差による稜が生じている。底部は回転糸切り痕を明瞭に残し、糸切りの後無調整である。胎土には白色砂粒を含む。口縁部外面には、重ね焼きによる色調差がみられ、端部付近はやや濃い色調を呈する。また、底部内面と底部外面の一部に還元不足のためやや赤い色調である。

2は住居の南東隅床面直上から出土した。口縁端部が屈曲し外反する形態を呈する。体部は回転ナデによる調整が施されている。底部は回転糸切り痕を明瞭に残し、糸切りの後無調整である。胎土は、白色砂粒を多く含む。口縁部外面には、重ね焼きによる色調差がみられ、端部付近はやや濃い色調を呈し、底部外面には「十」字状の火襷がみられる。

5は住居埋土からの出土であり、底部と体部下半のみが残存している。底部と体部の境に明瞭な段があり、体部はあまり傾斜角度を持たない特異な形態を呈する。形態は1～3の坏とはかなり異なり、底径も1～3の坏より小さい。

4はカマド埋土出土の土師器坏である。口縁部は外反傾向も内湾傾向も認められず、やや肥厚しながら口唇端部を丸く納める。全体的に摩滅が著しいが、内面にはヘラミガキが施され、黒化処理されている。体部外面下端には回転ヘラケズリが1段施されている。底部は回転糸切りの後無調整である。

6は住居中央付近の床面直上出土の土師器鍋である。体部は外傾し、それに続く口縁は外方に開く形態を呈する。口縁端部は上方へ僅かにつまみ上げられている。体部内面には横方向の回転ヘラナデが施され、体部外面上半には回転ナデの凹凸が明瞭に残る。また、体部外面には単位不明瞭ながらタタキの痕跡が認められ、タタキを切るように下から上方向へのヘラケズリが施されている。

7は住居床面直上出土の須恵器甕である。口縁部から頸部の破片であるため全体像は不明だが、口縁部の作りは丁寧である。口縁部は垂直面を持ち、端部は上方につまみ上げられている。頸部にはわずかにタタキの痕跡がみられるが、大半はヨコナデによって消されている。器面にはほとんど降灰がみられない。

8～18は大小の土師器甕である。

8は住居の埋土から出土した。口縁部は外方に開き、端部は内傾気味に上方へつまみ上げられている。本来この端部は、もう少しシャープであったと考えられるが、摩滅しているためやや鈍い。体部は回転ナデが施されている。

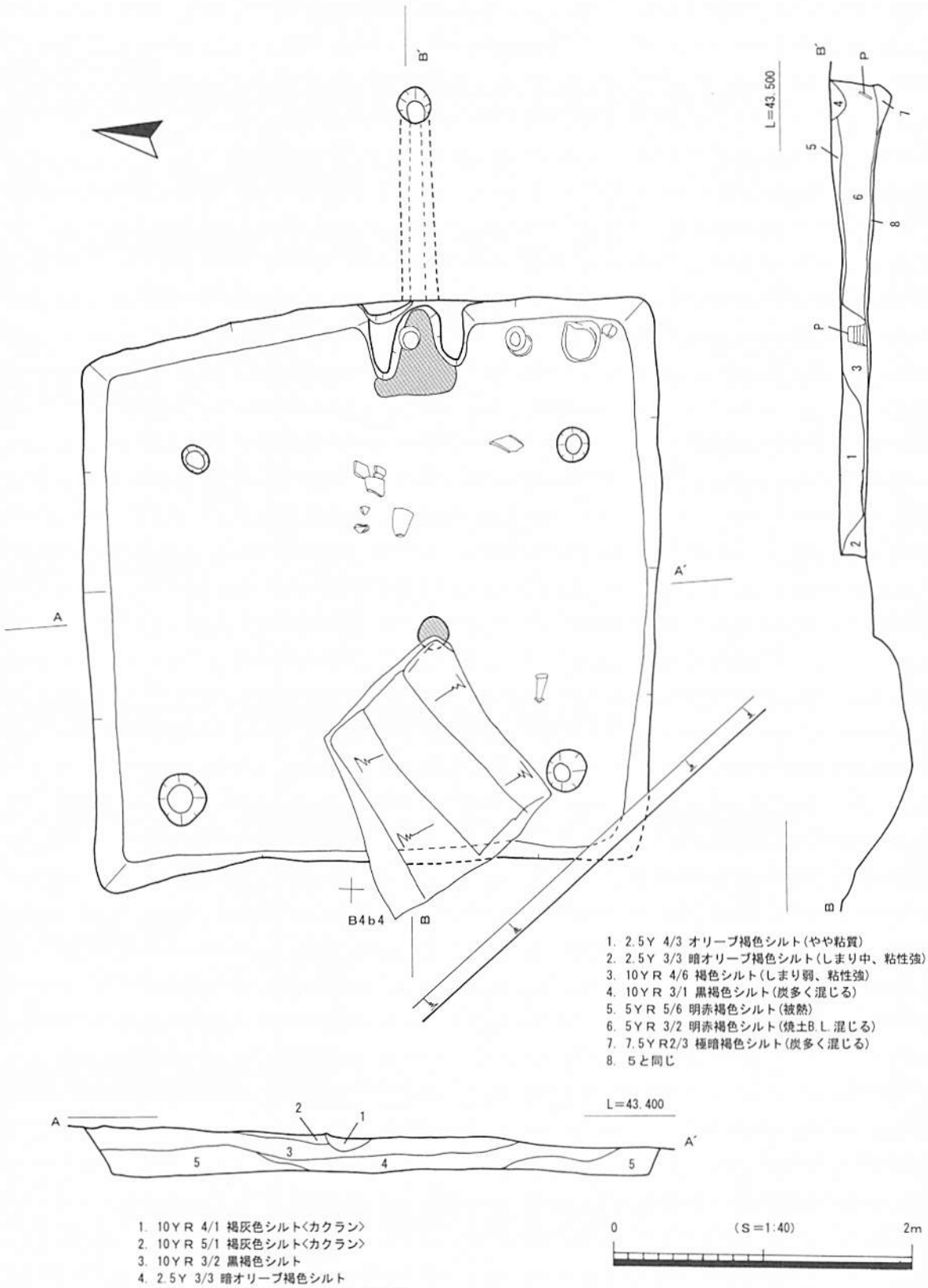


図24　竪穴住居1　平・断面図

9は住居の埋土上層から出土した。緩く外半した口縁は、端部を上方につまみ上げている。この端部の立ち上がりはやや貧弱である。体部は胴部がやや張った形態を呈し、その部分には明瞭なロクロ目を残す。内面は、ヨコナデが施されている口縁部及び頸部以外の体部において横方向に回転ヘラナデがみられる。内外面に黒斑がみられるが焼成時のものと考えられる。

10は住居の柱穴1と柱穴2埋土から出土した。やや丸みを帯びた胴部を持ち、口縁部は外反する。口縁端部は上方につまみ上げられ受け口状を呈し、口唇部は比較的鋭い。体部にはロクロ目が残るが凹凸はあまりみられない。口縁部内面に黒斑が見られるが焼成時のものかどうかにわかに断じ得ない。

11はカマド付近の床面直上から出土している。口縁部は短く外反し、端部は丸く納めている。体部はやや丸みを持ち、ロクロ目を残す。内外面に黒斑を有する。

12は住居の埋土から出土した。口縁部は極端に短く外方に開き、端部は上方にわずかにつまみ上げられた形状を呈する。体部は直立気味に伸びており、外面には明瞭なロクロ目を残す。内面には焼成時の黒斑がみられ、外面には二次的な被熱の痕跡が認められる。

13はカマドの埋土から出土した。口縁部は完存している。口縁部は外方に開き、端部は上方につまみ上げられ丸く納めた形状を呈する。体部は直立気味に伸びており、外面には非常に明瞭なロクロ目を残す。内外面ともに赤斑や黒斑が認められ、二次的な被熱痕跡であると考えられ、出土場所がカマド中心部であることからカマドの支脚の一部として用いられていた可能性が考えられる。

14はカマド内に天地逆さ向きに据えられていた。出土状況からカマドの支脚であると考えられる。口縁部は全く残存していないが、頸部以下の体部は完形である。口縁部の形態は不明であるが、頸部がやや外方に開く形状は同種の土師器甕と違いが無く、同様の口縁形態を呈すると推察できる。体部上半は直立し、下半は底部に向けやや窄まる。体部外面には明瞭なロクロ目を残し、同様に内面も良好にロクロ目を残す。底部は回転糸切りの後無調整である。

15は竪穴住居1埋土から出土した。口縁部はほぼ水平に外方に開き、端部はわずかに上方に伸びる。体部は直立気味であり、外面にかすかなタタキの痕跡が認められる。

16はカマドの埋土から出土した。口縁部は外方に開き、端部は外側にわずかな面を作り、上方へはあまり伸びない。体部は直立気味でロクロ目が確認でき、外面にはタタキとヘラケズリの痕跡を残す。タタキは口縁部から体部上位にかけて認められ、下位ではヘラケズリによって消されている。ヘラケズリの痕跡は上から下方向へ砂粒が移動していることがわかり、工具の動きもこれと同じ方向に使用されたと考えられる。頸部から体部内面には幅1㎝程度の単位で工具痕があり、横方向に回転ヘラナデが施されている。

17は煙出し埋土から出土した。やや直立気味に立ち上がる体部上半から続く外傾する口縁部を持ち、端部は外反気味に上方へつまみ上げられる受け口状を呈する。体部下半は底部に向け内傾する。体部外面はタタキの後、縦方向のヘラケズリが施されている。ヘラケズリに伴う砂粒の動きは上から下のものと下から上のものの両者が認められる。内面は頸部の屈曲以下を横方向の回転ヘラナデが施され、特に屈曲部においては工具によって生じた面が顕著である。

18は住居中央床面直上から出土した。全体的に器表面の摩滅が著しい。長胴の体部にやや長い口縁部が形態の特徴である。体部外面は頸部から下位にヘラケズリが施される。ヘラケズリの方向は上半が縦方向、下半は不定方向である。ヘラケズリの施されていない頸部付近には、かすかにタタキの痕跡が認められる。外面には若干ながら二次的な被熱痕跡が認められる。

19は住居東側壁際の床面直上から出土した須恵器甕である。口縁部と体部上半の一部が欠損しているが、

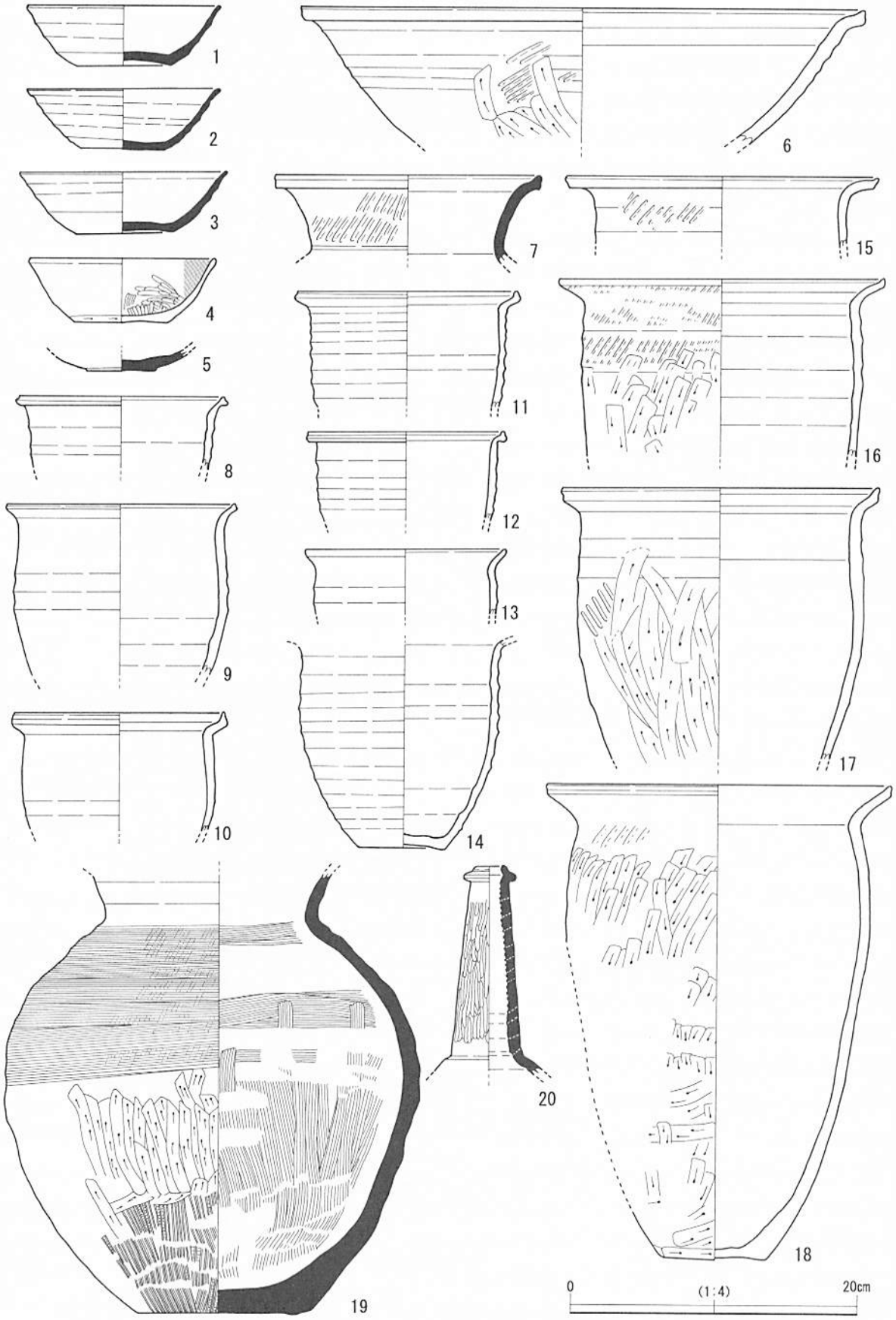


図25　竪穴住居１　出土遺物

その他は良好に遺存している。頸部はやや外傾し、肩部は張らず胴部ほぼ中央に最大径を持つ。胴部下半も張らず底部へと続く。底部は平底で溶着粘土塊の付着がある。体部外面には平行タタキが施される。タタキの痕跡には工具原体の木目がみられ、木目に対して直交する平行線の刻みであると考えられる。肩部から体部上半外面には横方向にカキ目が施されている。カキ目の施されている範囲では、タタキの痕跡が消されているがかすかに確認できる。体部下半内面には、縦方向にヘラナデが施され、体部上半内面には同一工具により横方向に連続する回転ヘラナデが施されている。これらのヘラナデは5本程度の条線1単位が痕跡として明瞭に残存し、部分的に指によるナデによって消されている。この甕は器表面に自然釉が掛かり、釉のガラス質部分は淡い緑色に発色している。

20は住居南西床面直上から出土した須恵器水瓶である。口縁部から肩部にかけて完存している。形態は、肩部から口縁部に向け徐々に径を減じる筒状を呈し、口縁端部よりやや下に鍔状の突起を有する。肩部と頸部の境界には明瞭な段を持ち、肩部はやや撫で肩気味である。内面には粘土紐の巻き上げ痕がナデ消されず明瞭である。頸部器表面には縦方向に非常に密なヘラミガキが施されている。器表面の縦半分には星状の降灰が認められる。

溝13・14　溝15・16

Ⅲ区では南北方向や東西方向を指向する溝を4条検出した。溝13・溝14・溝16は互いに同一方向を指向し、これらは竪穴住居1の主軸方向と同じである。溝15のみが方向を異にする。いずれの溝も調査区外へ両端が伸びると考えられる。

溝13は、Ⅲ区中央よりやや西側で溝14と近接して位置する。東西方向を指向し直線的な溝である。規模は西端の幅1.5m、東端の幅1.2mを測り、深さは西側の最深部で25cmを測る。溝東西端の底面における比高差は約2cmあり、西端底面の方が低い。埋土は、不純物皆無のシルトによる単一層であった。出土遺物は、須恵器や土師器の細片が若干出土したが、図化に耐えうるものはなく時期が明確にできるものではなかった。ただし、西端では底面より約5cm浮いた状態で拳大よりやや大きな円礫が4個まとまって出土した。いずれの礫も自然礫であり、明瞭な加工や使用を示す痕跡はみられなかった。

溝14は、Ⅲ区中央よりやや西側で溝13と近接して位置する。東西方向を指向し直線的な溝である。溝東側で溝13と重複し、溝13を切る。規模は西端の幅63cm、東端の幅22cmを測る。深さは西側の最深部で12cmを測る。溝東西端の底面における比高差は約1cmあり、西端底面の方がやや低い。埋土は、不純物皆無のシルトによる単一層であった。出土遺物は、須恵器の微細片が出土したが溝13出土遺物と同様に図化に耐えうるものではなく、時期は不明である。

溝15はⅢ区のほぼ中央に位置し、ほぼ南北方向を指向する直線的な溝である。溝北端は現代の攪乱により失われている。規模は南端の幅61cmを測り、最深部で25cmを測る。埋土は細かな砂粒を含むシルトによって充填されている。出土遺物は無く遺構の時期は不明である。

溝16は、Ⅲ区東側、竪穴住居1の北西に位置する。東西方向を指向し、直線的な溝である。規模は西端で73cm、東端で70cmを測り、最深部で24cmを測る。溝東西端の底面における比高差は約5cmあり、西端底面の方が低い。埋土は、不純物を含まないシルトによる単一層であった。出土遺物は無く遺構の時期の特定が困難であり、近接する竪穴住居1との共存関係も不明である。

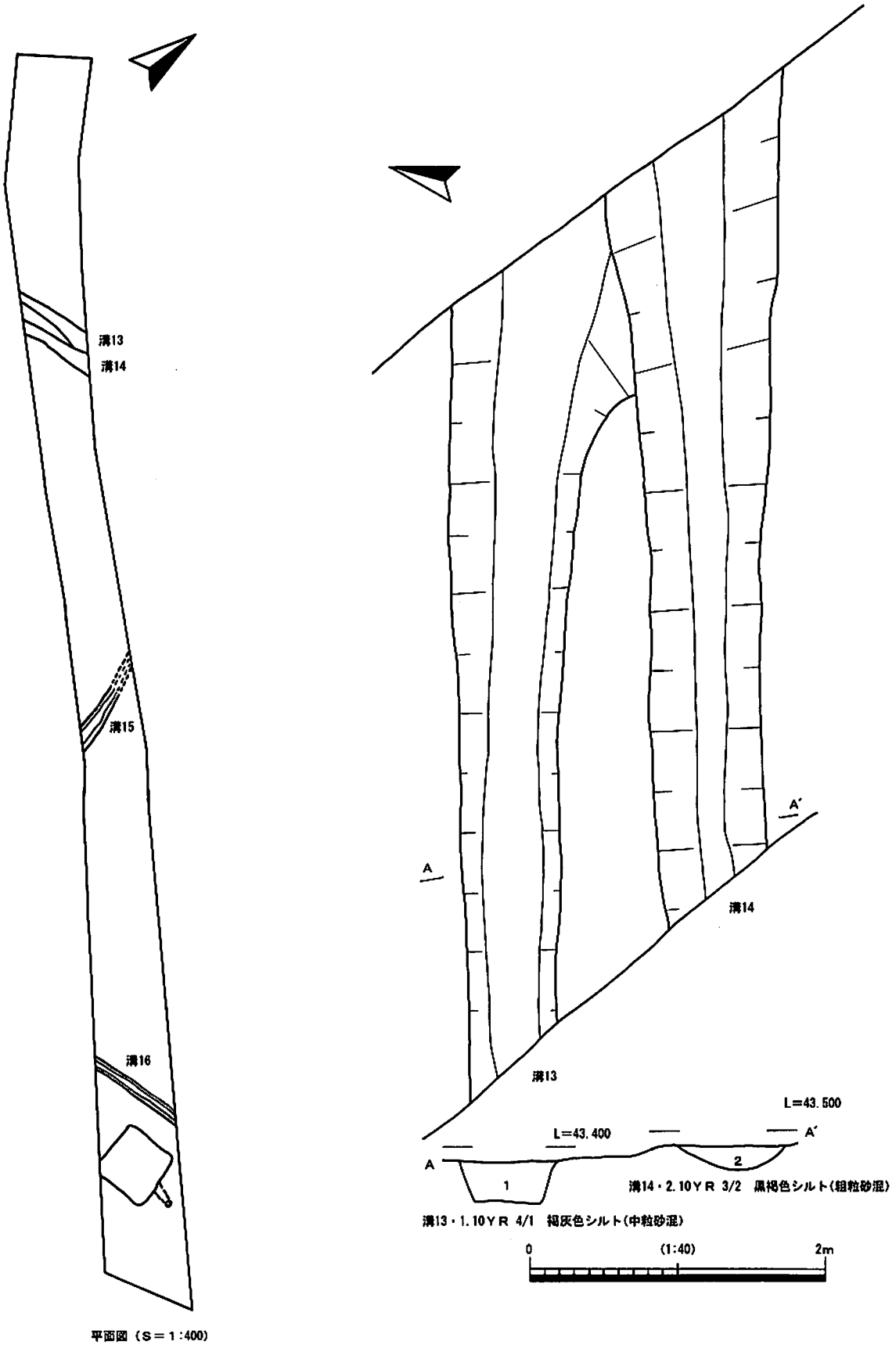


図26 溝13・14 平・断面図

4．遺構外出土遺物

1・4・5は須恵器杯である。いずれもⅠ区1層から出土した。

1は体部が外傾し、口縁部が直線的な形態を呈する。体部の下半部から口縁部にかけて回転ナデが施され、体部下半から底部にかけてやや弱い横ナデが施されている。底部は回転糸切り後無調整である。胎土には白色砂粒を含む。口縁部外面には、重ね焼きによる色調差がみられる。

4は体部のみの破片であるため全体の形状は不明である。体部は回転ナデによる調整が施されている。やや径が小さく径の割には深めである。

5は口縁部がやや外反する形態を呈する。器高は低く底部に明瞭な段を有する。底部は回転糸切り後無調整である。

2は須恵器甕である。Ⅰ区1層から出土した。口縁部のみの残存であるため全体の形状は不明であるが、口径はかなり大きく、大形のものであると予想される。

3は土師器甕である。Ⅰ区1層から出土した。口縁部直下までヘラケズリが及ぶ。体部外面にタタキの痕跡がかすかに認められる。ヘラケズリの痕跡は上から下方向へ砂粒が移動していることがわかり、工具の動きもこれと同じ方向に使用されたと考えられる。頸部から体部内面には幅1cm程度の単位で工具痕があり、横方向に回転ヘラナデが施されている。

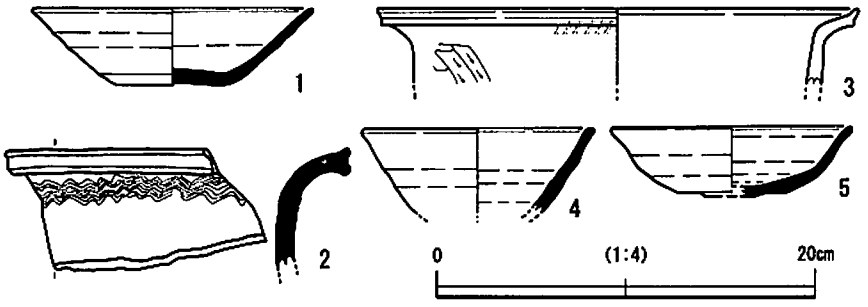


図27　遺構外出土遺物

V．考察 ―― 広岡前遺跡出土の須恵器について ――

1．はじめに

今回調査した江刺市広岡前遺跡では、平安時代の竪穴住居や土坑など当時の生活に密着した遺構から多種多様な土器が出土した。特に、検出した3棟の竪穴住居内や土坑からは須恵器が多く出土し、土師器とともに良好な資料を得ることができた。出土した須恵器は質・量ともにかなりまとまっており、平安時代の江刺平野における土器様相を考えるうえで重要な資料である。

また、遺跡の約1.8km北西に位置する同市瀬谷子窯跡群は、この地域における最大の須恵器を中心とした窯業生産遺跡である。この瀬谷子窯跡群は、比較的近い位置関係にある本遺跡の遺構や遺物との関連性も注目される。この窯跡群は、政治権力の介在するなかで操業されていた官営的窯業生産地と考えられており、北上川を挟んで対岸に位置する水沢市胆沢城跡は、その生産物の一大消費地である。胆沢城跡はこの地域における政治・文化の拠点であり、周辺の一般集落の動態を知るうえにおいて機軸となる重要な遺跡である。

地図上において両者の中間に位置する広岡前遺跡は、やはり重要な遺跡であると予想される。したがって、本稿では出土した須恵器を中心に考古学的な分析をおこない、これら須恵器の歴史的意義について考え、それを発展させて平安時代における土器の生産と流通に関して若干の予察を加えたいと思う。

2．出土した須恵器の分類

今回の調査で竪穴住居から出土した須恵器には一定の器種構成が認められ、これは他の周辺集落においても同様である。この構成は、坏・甕・壺の3種の主要な器種からなり、それぞれ供膳形態や貯蔵形態を担う。尚、須恵器に加え土師器には坏・椀・甕・鍋などがあり、主に供膳形態や煮沸形態を担うものである。

須恵器坏は、竪穴住居1と竪穴住居3から特に多く出土した。出土した須恵器坏はどれも底部回転糸切り後無調整である。底部の残る破片すべて確認したが、その他の切り離しによるものはまったく認められなかった。

坏や椀等供膳形態須恵器と同じく供膳形態土師器との比率は、掲載した遺構出土須恵器坏・椀が供膳形態全体のうち72%、同じく土師器坏・椀が28%と土師器に比べて須恵器がかなり高い比率で出土している。このような供膳形態にみられる須恵器の偏重傾向は、両者の使用頻度、耐用年数、消費速度による差であるかもしれないが、少なくともこの集落にかなり安定した量の須恵器が供給されていたことを如実に示しているのではなかろうか。ほぼ同じ時期の江刺平野に所在する力石Ⅱ遺跡では、同様の方法でデータを抽出すると、土師器供膳形態78%に対して須恵器供膳形態22%である。同じく落合Ⅲ遺跡では、土師器供膳形態85%に対して須恵器供膳形態15%である。このように当該期の集落において、須恵器の供膳形態が高い比率で出土する例は数少なく、その点において広岡前遺跡はきわめて異例の様相を示す集落である。このような状況が生じる要因として、広岡前遺跡が瀬谷子窯跡群という当時の大規模な須恵器生産地に近在する集落であることと深い関係があるのではないだろうか。しかし、ただ単に距離が近いだけでこのような状況が生じるのであろうかという疑問もある。瀬谷子窯跡群により近い集落の様子が不明であるため断定は避けなければならないが、現段階では瀬谷子窯跡群とこの広岡前の古代集落は、実際の距離的関係よりも実質的に近い関係であったことが考えられる。

一方、貯蔵形態を担うと考えられる須恵器甕は、竪穴住居や土坑から出土している。竪穴住居1床面出土

の甕は口縁形態不明であるが、体部外面上半にカキ目、下半にヘラケズリが施されている。回転ナデにより消えているが、頸部にタタキの痕跡も認められる。竪穴住居３出土の甕も体部外面上半にカキ目、頸部にタタキの痕跡が認められる。両者は体部上半にカキ目が施されるという点で共通する。胆沢城SD114出土の須恵器甕にも同様の器面調整が認められる。さらに、この遺構の一括遺物は９世紀第1四半期という年代が考えられているため、今回出土した須恵器甕の年代についても同様の時期が考えられる。しかし、須恵器坏類は述べた通り、底部回転ヘラ切りのものはみられないことから須恵器坏類は甕よりも若干新しい一群のものであることが考えられる。よって、須恵器のみからみた広岡前遺跡の出土遺物の年代は大まかに捉えれば９世紀初頭～半ばにかけてであると推察される。

須恵器甕にみられるヘラケズリ調整は、東北地方特有の調整技法であり、本来は土師器に施される調整である。体部下半にこのような調整がみられる竪穴住居１出土須恵器甕は東北地方で生産されたものであると考えられる。また、頸部～肩部にかけて緑色の厚い自然釉が掛かっており、かなり長い年数操業された窯で焼かれたものであると推測される。焼成具合も良好で貯蔵形態の器種にしては胎土も精良である。ある程度熟練した工人の手で製作され、東北地方に所在する大規模な窯業生産地で焼成された後、この広岡前遺跡に供給されたのであろう。

３．出土した須恵器埦

先述した通り、広岡前遺跡出土の須恵器では主に坏・甕・壺の３種が認められる。しかし、少量ながらこれら３種以外の器種も存在する。その一つは埦である。埦は供膳形態であり、坏の一種と捉えることもできるが、口縁部が著しく外反し、体部下半にやや膨らみを持ち、底部にはしっかりとした高台が付く。このように、坏とは一線を画す形態を呈し、坏とは大きく異なる要素が多く認められるため、今回は埦という別器種として扱うこととした。

今回の調査で須恵器埦は、竪穴住居３から２個体、Ｉ区土坑３から２個体出土した。（図28－４～７）古代における須恵器埦は、東北地方では出土数が少なく、きわめて稀な器種である。岩手県内では、水沢市胆沢城跡や矢巾町徳丹城跡などで須恵器埦が出土しているが、これらの須恵器埦は、いわゆる稜埦とされるもので、体部下半に強い稜が巡る。これら稜埦は、やや深い須恵器坏に高台を貼り付けた印象を受ける形態であり、底部から口縁部にかけて体部下半の稜で屈曲するもののそれ以外は直線的に立ち上がる形態を呈する。しかし、広岡前遺跡竪穴住居３出土の須恵器埦は、須恵器坏とは一線を画す形態を呈しており、いわゆる稜埦ではないと考えられる。

今回取り上げる稜埦と異なる須恵器埦の形態は、猿投山西南麓古窯跡群（猿投窯）など東海地方で生産さ

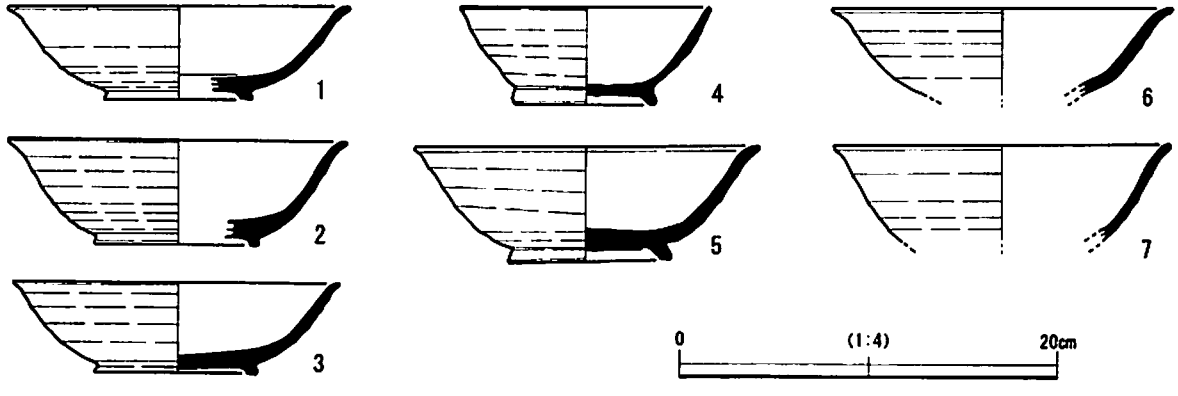


図28　東海地方産施釉陶器と出土した須恵器埦

れた緑釉陶器や灰釉陶器などの施釉陶器椀にみられる形態であり、中でもとりわけ9世紀代と考えられている黒笹14窯式（K14窯式）～黒笹90窯式（K90窯式）の灰釉陶器椀Aと形態および法量が酷似している。図28－1～3は猿投窯にある鳴海支群出土資料を再トレースしたものである。1はNN265号窯出土資料、2・3はNN268号窯出土資料である。これらは、いずれもK14窯式に相当するとみられる。K14～90を区分する属性として高台の断面形状が挙げられる。断面方形のいわゆる角高台と呼ばれる特徴を有するK14窯式椀と断面逆三角形や三日月形のいわゆる三日月高台を持つK90窯式椀とにそれぞれ細分され、年代も9世紀代を前半と後半の半期に区分することが可能である。この属性に注目すると広岡前遺跡出土の須恵器椀の高台は角高台である。このような高台形態から考えて、この椀は9世紀前半に比定されるK14窯式の施釉陶器に何らかの影響を受けて製作されたと考えられる。よって、この須恵器椀は、どのような経緯でどのような影響を受けたかにもよるが、現段階では概ね9世紀初頭～半ばまでの年代が考えられる。

この須恵器椀の生産地は現段階では特定し得ないが、近在する瀬谷子窯跡群で単発的に焼かれたものである可能性も考えられる。

このような須恵器椀は、須恵器というよりむしろ無釉陶器と呼ぶべきものかもしれない。尾野善裕は、K14窯式という灰釉陶器成立期に人工的な施釉のされない施釉陶器と同形態の椀や皿の存在を想定している。このような製品の存否そのものに、まだまだ議論の余地がある段階であろうが、視野に入れる必要はあるかもしれない。

広岡前遺跡出土椀は、竪穴住居3と土坑3出土の3個体が同じサイズであり、土坑3出土の1個体が他の椀より小振りなものである。どの個体もやはり形態は、いわゆる稜椀とはやや異なる。灰釉陶器には、大小相似形の椀がセット関係にあることが知られているが、本遺跡でもこのような大小椀のセットであったのではないかと考えられた。しかし、この土坑3出土の小椀は、口縁部が外反せず、体部の形状は坏に近く、胎土や色調が他の須恵器椀とは異なる点で難がある。この須恵器小椀は、本来他の椀とは別系譜で成立したものかもしれない。

4．出土した須恵器水瓶

出土した須恵器の中で、椀と同じく主要な器種から外れる須恵器の一つに水瓶がある。この須恵器水瓶は、竪穴住居1の床面から出土し、口頸部から肩部までは完存しているが体部は出土していないため全体の形状は明らかではない。しかし、わずかに残存する肩部の張りがあまりみられず、いわゆる「なで肩」であることから体部の形状は正立した卵形を呈すると推測される。長頸壺あるいは長頸瓶の一種と捉えることもできるが、頸部が細長く、卵形の体部が想定されるため、今回は「水瓶」として報告した。

この須恵器水瓶という器種は特に岩手県での類例に乏しく、比較に応ずる資料がみられないため器種について「水瓶」であるという確証は無く「浄瓶」である可能性も考えられる。しかし、「浄瓶」であるための条件として、肩部に子持ちの注口の存在と頸部の鍔状突起および極細の口縁部の存在が挙げられる。しかし、今回出土した須恵器「水瓶」には肩部注口に繋がる痕跡は認められず、鍔状突起は頸部上方ではなく口縁端部直下に付けられている。口縁端部直下に鍔状突起が付いている水瓶の例は唐代の定窯産白磁（白瓷）水瓶があるが、今回出土した須恵器水瓶と比較するには、あまりにも遠くかけ離れた存在であるため比較の対象とはなり得ない。ただ、本来中国で金属製の仏器として製作されていた「水瓶」や「浄瓶」は、日本では主に施釉陶器として生産されているが、稀に無釉の「須恵器水瓶」もみられる。これら須恵器水瓶の多くが東海地方を中心に生産されており、東海地方を中心に周辺で流通しているようである。東海地方における須恵

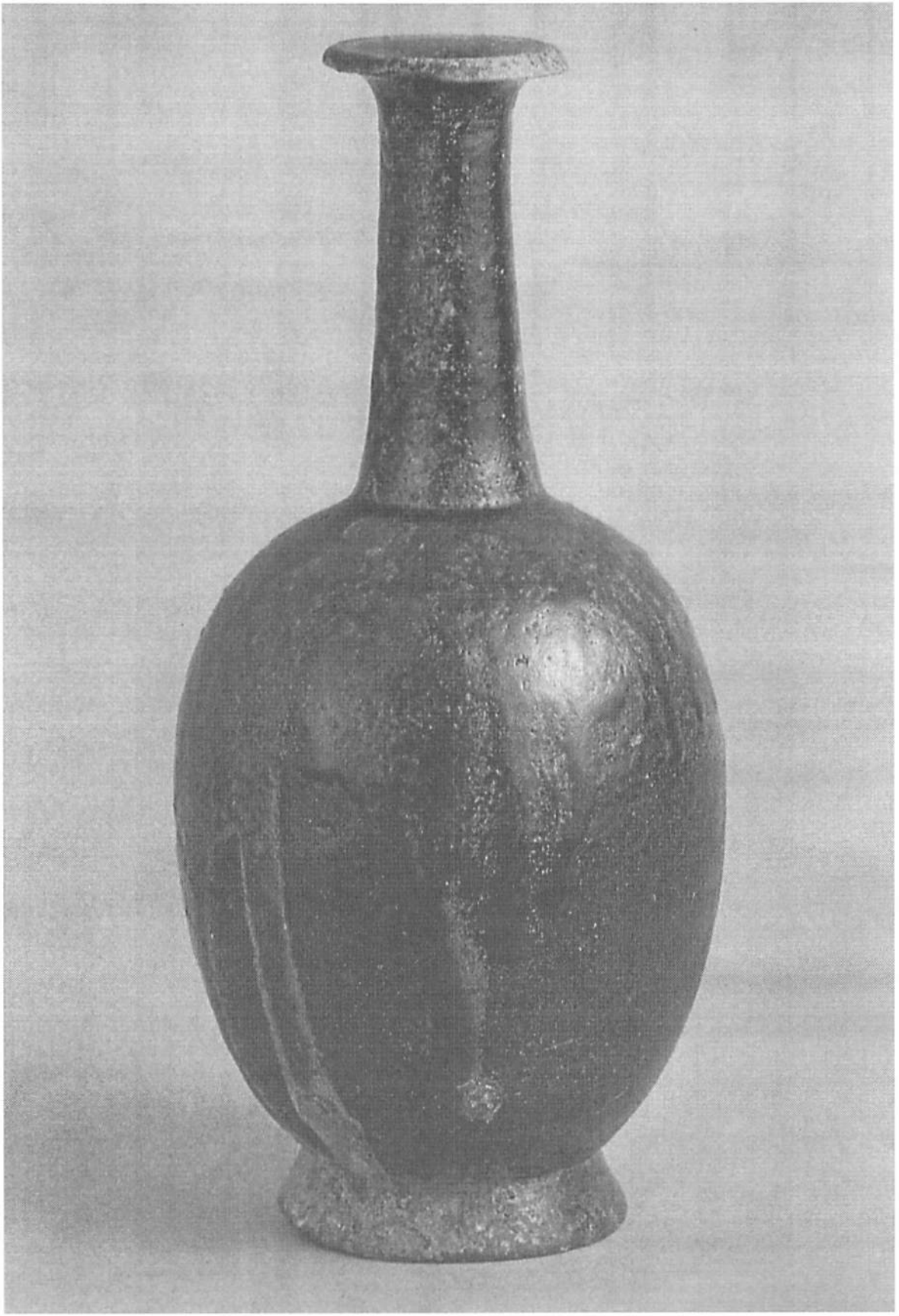


図29　灰釉陶器水瓶（日本陶磁全集６より）

器水瓶は8世紀頃からみられ、8世紀代のものは頸部中位に明瞭な横方向に沈線が施されているが、9世紀代になるとその沈線はみられなくなるようである。今回出土した須恵器水瓶にはそれに該当する沈線はみられない。また、東海地方では、灰釉陶器の「水瓶」や「浄瓶」などの器種が生産されるが、これらの器種が出現するのは9世紀後半と考えられているK90窯式であり、10世紀前半と考えられている折戸53窯式（O53窯式）では減少し、その後姿を消す。以上のことから考えても、この須恵器水瓶は9世紀から10世紀前半までの年代幅の中に収まるものと考えられる。

広岡前遺跡出土の須恵器水瓶を詳細にみていくと器面調整において次のような特徴がみられる。頸部外面には、縦方向のヘラミガキが密に施されている。緑釉陶器の古段階では、1次焼成前にヘラミガキが施されることがあるが、通常ヘラミガキのように器表面の光沢を表出させるような器面調整が、須恵器にみられることはない。このような器面調整が施される背後には、光沢を得たいという意識が強く感じられる。すなわち、施釉されない須恵器に比べて施釉陶器の方がガラス質化した釉薬によって艶やかな器表面を呈する。しかし、今回出土した須恵器水瓶は、施釉されていないため器表面は生の素地そのままである。そこで、器表面の艶や光沢を得るために本来須恵器では用いられないヘラミガキという調整技法が施されたものと考えられる。この調整が施されている須恵器水瓶には、施釉陶器の外観に近付けようとする意識が見え隠れしているのではないだろうか。

通常、土器製作において最終的な器面調整であるヘラミガキは焼成前に施される。例に違わず、この須恵器水瓶も焼成前にヘラミガキが施されており、すでに器面調整の工程段階で施釉による器表面の艶や光沢が得られないという前提があったかと推定される。もし、施釉陶器を意識していたなら、この前提がある以上焼成前の段階において、すでに施釉が断念されていたものとみるべきであり、この須恵器水瓶は施釉陶器を意識していたが、焼成前から優品に近付けようとしながら須恵器として製作されたと考えられる。つまり、この須恵器水瓶は施釉陶器を製作しようとした結果、偶発的に施釉陶器の枠からこぼれ落ちた「須恵器」ではなく、あくまでも施釉陶器を意識・指向した「須恵器」であったと理解できる。

では、先行して述べた須恵器椀と同じように今回広岡前遺跡で出土した須恵器水瓶はどこで製作されたものだったのであろうか。胎土を肉眼で観察すると、大きな砂粒は認められず、粒径の小さな白色砂粒が極少量認められる精良なものである。また、破断面はやや赤みを帯びている。こような肉眼の観察から瀬谷子窯跡群で焼成された可能性が考えられる。また、須恵器椀と同じく大規模な須恵器生産域に近在する集落で出土した須恵器であるので、やはり、瀬谷子窯跡群で焼成された製品である可能性が最も高いのではないだろうか。ただ、このような器種が瀬谷子窯跡出土須恵器にみられないばかりか、主要な供給先である胆沢城跡や周辺の集落からも出土していないため、瀬谷子窯跡群で焼成されたものであっても単発的で極少量だけ生産された器種であったと考えられる。その希少な製品が竪穴住居から出土する集落は、この点においても特殊であり、須恵器生産と深い関わりがあったことが想定できるかもしれない。

このような須恵器水瓶の用途は判明していないが、先述した通り、丁寧な器面調整が施され、大量生産されない器種である。このことから少なくとも日用雑器ではないことは疑う余地はなく、何らかの非日常的な用途が考えられる。本来は仏器の一つであるが、形態も本来のものより崩れているため仏器としての機能を具備していたとは思えない。しかし、何らかの祭祀や儀礼行為に際して用いられたものであったのだろう。また、時には威信財となったのかもしれない。

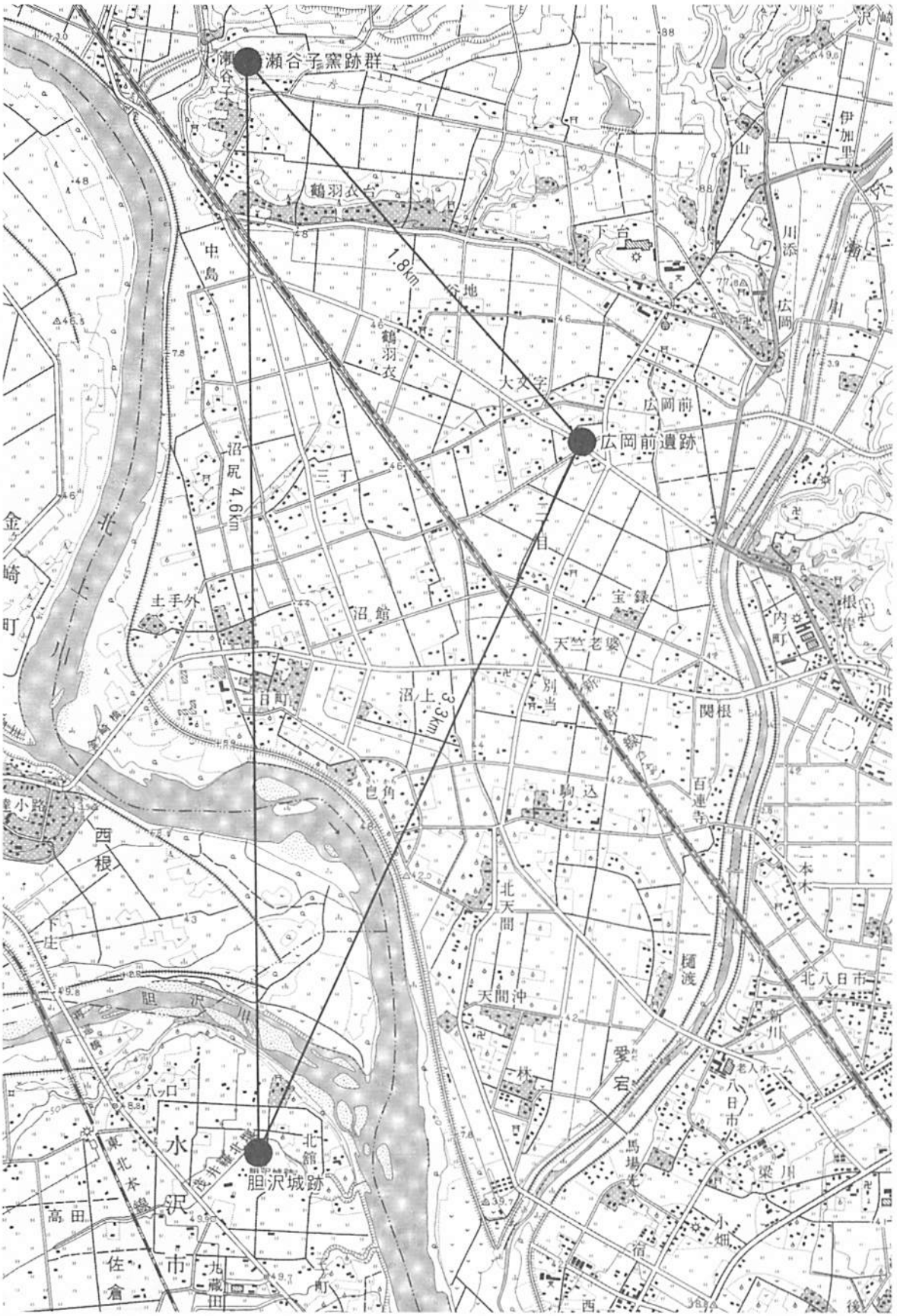


図30　広岡前遺跡と他２遺跡の位置関係

5．施釉陶器と特殊須恵器との関連性

須恵器椀・須恵器水瓶、いずれもこの地域においては特殊な遺物である。また、それぞれの項で述べた通り、これら特殊須恵器は施釉陶器と密接な関係がありそうである。両者の関係は形態の類似から模倣という行為が採択されたと推測される。その行為を探るために器の模倣という行為について考えてみたい。

数多く種類のある器には「模倣される側面」と「模倣する側面」がそれぞれ存在する。より上質な器はその他の器によって目標とされ、そして模倣されるのが器の常道である。このような器の模倣には段階的な序列が絶えず存在する。例えば、模式的に表すと以下の通りである。

①「金属器」→模倣→②「磁器」→模倣→③「施釉陶器」→模倣→④「須恵器」→模倣→⑤「土師器」

ただし、①～⑤の各段階はその前後において直接的に模倣されるとは限らない。①～③のような卓越した技術を必要とする器は、都城を始めとする先進地に供給され消費されている。このような技術の高低差を反映している序列順序の逆転はないだろうが、それぞれの間が飛ばされて模倣がおこなわれる可能性は考慮に入れる必要があろう。

しかし、今回のテーマである③・④間は成形から調整に至る製作過程がほぼ同じであり、窯での焼成段階で初めて両者は分離されると想定されるため③→④の模倣構図は崩れないと考えられる。このことからも両者を分けるのは焼成技術であることは間違いない。つまり、この場合器の成形から調整を経た形態は模倣できても焼成により変化する質に関しては対応できなかったのではなかろうか。もちろん、焼成まで対応できれば施釉陶器模倣の須恵器ではなくなるのだが、今回の出土資料は焼成技術の未熟故に「模倣」に終わったと解釈できる。須恵器は焼くことができるが、施釉陶器は焼くことができないというジレンマが施釉陶器模倣須恵器に現れているのかもしれない。

では、このような生産活動の中で起こるジレンマが表出されている特殊須恵器が出土した広岡前遺跡はどのような集落だったのであろうか。一般的に東北地方における施釉陶器は、猿投窯などの東海地方産とみられるものが遠隔地である城柵や官衙遺跡へ搬入され出土する。一方、一般的な集落での出土は極めて少ないという事実を考えると、これらは非常に貴重で入手困難な品であったに違いない。と同時に、これら施釉陶器は在地にある主要な生産地では生産されていなかったということも想像に難くない。しかし、今回の広岡前遺跡のように一般的な竪穴住居から施釉陶器に似た須恵器が出土したことは、次の２点が想定される。一つ目は、城柵や官衙と一般的な集落との間隙を埋めるようなやや有力な集落であった。二つ目は、施釉陶器に似た須恵器を作った須恵器工人と近い関係にある人々の集落であった。以上のいずれか、あるいは両方の要因が備わった集落であったことが想定できる。ただし、二つ目は周辺で施釉陶器に似た須恵器を作ったという前提が必要である。

しかし、いずれにせよ、広岡前遺跡はこの地域においてきわめて特殊な集落であったことだけは間違いなさそうである。

今回出土した須恵器椀や須恵器水瓶は、これまで言及した通り施釉陶器の外観を意識、模倣して生産されたと考えられる。当時の施釉陶器主要生産地である東海地方の窯や工人、あるいはそこで生産された製品そのものとどのような関係があったのか注目されるところである。一般的に、施釉陶器が焼成される地域では須恵器生産が盛んである、または、かつて盛んであったことが多い。また、主要生産地においては施釉陶器が須恵器と併焼される例も多くある。つまり、施釉陶器の成立および発展は、大局的に言えば須恵器生産と

ハード面・ソフト面で密接な関係にあったと言う事ができる。しかし、施釉陶器の生産技術の方が須恵器のそれより高いものであったことは言うまでもない。これらの須恵器椀や水瓶が瀬谷子窯跡群で生産されたものであれば、瀬谷子窯跡群の操業にあたって東海地方から技術の伝播や工人の移動などがあったことが予想される。特に形態のみならず、法量まで酷似するものを作るということは、熟練した技術を持った製作工人の存在が窺えよう。しかし、今回紹介した須恵器水瓶は、施釉陶器の主要生産地のものとは形態からして似て非なるものである。これは、先の須恵器椀とは異なり、曖昧な情報や技術を形にしたから起こりえたのかもしれない。だとすれば、特殊須恵器として一括して扱っていたが、実は両者は存在する歴史的意味が異なることになる。一方は先進的工人移動の可能性を示唆するが、一方は先進的工人不在の可能性である。このような矛盾は現段階においては即座に明らかにできないが今後注目していくべき問題であろう。

このような関心事について瀬谷子窯跡群ではいくらかの興味深い事実がある。すなわち、瀬谷子遺跡出土のあかやき土器の中に施釉陶器の形態を模倣した高台付皿、段皿が出土しているという事実である。現時点では、瀬谷子窯跡群における須恵器とあかやき土器の関係は曖昧さを残しているが、少なくとも10世紀には東海地方より、この地域に施釉陶器の影響を受けた土器が生産されていたことは疑いようがあるまい。これに関しては小笠原好彦も指摘している通りである。東海地方の影響によって、10世紀段階に施釉陶器様あかやき土器生産がおこなわれた瀬谷子窯跡群では、それに先行する9世紀段階に施釉陶器様須恵器生産がおこなわれていても不思議ではない。

6．まとめにかえて

広岡前遺跡出土の須恵器を様々な角度から概観した。その結果、竪穴住居や土坑などから出土した須恵器の器種構成は9世紀代の集落におけるセット関係が明瞭であった。その中で須恵器供膳形態は、土師器のそれを大幅に上回る量が出土しており、当該期における一般の集落遺跡としては非常に珍しい様相である。この事実から、その他の江刺平野に存在する周辺集落に比べ極端に潤沢な須恵器保有が窺える。供膳形態全体における須恵器の占める割合は岩手県内の当該期集落と比較してもかなり高いと考えられる。このことは、本遺跡に近在する瀬谷子窯跡群の存在がその背景にあると予想できる。

この大規模な窯跡群は、胆沢城跡から多くの製品が出土しており、官営的性格が強いものと考えられているが、もし、この瀬谷子窯跡群が官営の土器生産地であれば、本遺跡との関係は地理的な繋がりのみならず、政治的な繋がりをも考えざるを得ない。広岡前遺跡は、地理的には須恵器の大規模生産地である瀬谷子窯跡群と須恵器の大量消費地である胆沢城との中間に位置しているが、それ以上に需要と供給のシステムの狭間に位置していると考えられる。これは、まさしく政治的な背景が見え隠れしている事象の一つではないだろうか。このような政治的な繋がりについて考古学的に言及することは非常に難しいが、周辺の集落との細かな比較をおこなうことで何らかの手がかりを掴むことが出来るかもしれない。本遺跡の所在する稲瀬地区では、平安時代集落の様相があまり明らかになっていない。よって今後、周辺での調査が進めば比較の対象資料が増え、より瀬谷子窯跡群と周辺集落との比較によって具体像に迫ることが可能になるであろう。今後、注目すべき事象である。

さらに、今回の調査では、施釉陶器との関係を強く示唆するような須恵器が出土した。須恵器椀と須恵器水瓶がこれにあたる。これらは、その形態から東海地方を中心に生産されていた施釉陶器の外観を意識、あるいは模倣していると考えられる。特に、このような須恵器が施釉陶器を模倣したものだとすれば、モデルになった施釉陶器の時期より古く遡るようなことはあり得ない。さらに、大幅に時期が新しくなることも考

え難い。模倣須恵器とモデルの施釉陶器は、同時期あるいは模倣されたものがやや新しいということが想定できる。このことから、今回出土した須恵器椀はK14窯式の施釉陶器の模倣である可能性が高いという点から9世紀初頭～半ば頃のものと考えられ、同じく須恵器水瓶は椀よりも不明確であるが、器種の消長から9世紀代のものと考えて良さそうである。以上の年代観は、竪穴住居出土の土器年代に齟齬を来すものではないため、そのままストレートに採用できそうである。

これら須恵器椀や須恵器水瓶は、遺跡周辺を含む東北地方ではきわめて珍しいものであるため、広岡前遺跡と東海地方との間に何らかの接点が存在すると考えられるが、直接的な接点を見出すことは現段階では困難である。しかし、そこに瀬谷子窯跡群を挟み込むことにより、東海地方との関わりを積極的に評価することができるかもしれない。先述した通り、この遺跡は須恵器の圧倒的保有量によって瀬谷子窯跡群との深い関係が想定されるため、東海地方と広岡前遺跡とが直接繋がらなくとも瀬谷子窯跡群を介する形で繋がっていたとも考えられる。加えて、これまでの研究で瀬谷子窯跡群と東海地方とは、あかやき土器生産段階で繋がりをみることができる。このことは、少なくとも10世紀代には東海地方から技術や知識が伝播していることを示している。しかし、広岡前遺跡で出土した須恵器?の存在によって、さらに古い段階である9世紀代に東海地方と瀬谷子窯跡群との繋がりが具体性を帯びてくるとも考えられる。もっと言うならば、9世紀代に瀬谷子窯跡群で東海地方の影響を受けた土器が生産されていた可能性が考えられ、瀬谷子窯跡群操業初期段階から東海地方より技術が伝わっていた可能性が高くなった。瀬谷子窯跡群が官営的性格を持つ土器生産地であるとすれば、東海地方から政治的な主導のもと技術あるいは工人が移動してきたのであろうか。現段階では不明確な当時の土器生産・窯業生産について言及できる数少ない重要な出土遺物であることは間違いない。

最後に、広岡前遺跡・瀬谷子窯跡群・東海地方の窯業生産遺跡・胆沢城跡の相互関係が現時点では不明確であり、今回述べたことも憶測の域を脱することができない。

また、今回は扱う資料を須恵器のみに限定して分析をおこなったが、その他の遺物に関しても今後検討材料に加えていく必要があろう。

なお、本稿は調査を終え、感じたままを吐き出すように述べたのみの感があり、積極的に評価できなかった部分も多くある。その部分に関しては、筆者の実証作業不足に他ならない。勝手ながら今後の予察としておきたい。

引用・参考文献

・小笠原好彦「東北における平安時代の土器についての二、三の問題」『東北考古学の諸問題』1976・伊藤博幸「陸奥国における黒色土師器　―その展開と終焉―」『東国土器研究第3号』1990　東国土器研究会

・高橋信雄ほか『主要地方道一関・北上線関連遺跡発掘調査報告書（岩手県江刺市力石Ⅱ遺跡・兎Ⅱ遺跡・落合Ⅲ遺跡・朴ノ木遺跡）』1979　㈶岩手県埋蔵文化財センター

・大川　清ほか『岩手県江刺市瀬谷子窯跡群緊急調査概報』1969　窯業史研究所

・大川　清『岩手県江刺市瀬谷子窯跡群第2次緊急調査概報』1970　窯業史研究所

・小島一夫ほか『名古屋市文化財調査報告Ⅵ　徳重西部土地区画整理事業予定地内所在埋蔵文化財発掘報告書』1976　名古屋市教育委員会

・小島一夫・平出紀男『名古屋市文化財報告XⅢ　NN-268号古窯跡発掘調査報告書』1983　名古屋市教育委員会

・山下峰司「灰釉陶器・山茶椀」『概説　中世の土器・陶磁器』1995　中世土器研究会

・尾野善裕「灰釉陶器生産技術の系譜」『楢崎彰一先生古希記念論文集』1998　楢崎彰一先生古希記念論文集発行研究会
・高橋照彦「平安期施釉陶器研究の現状と課題　―緑釉・灰釉陶器を中心に―」『中近世土器の基礎研究ＸＶ』2000　日本中世土器研究会
・佐藤雅彦『陶磁大系　第37巻　白磁』
・楢崎彰一『日本陶磁全集６　白瓷』1976
・楢崎彰一『陶磁大系第五巻　三彩・緑釉・灰釉』1973
・齋藤孝正「猿投窯における灰釉陶の展開」『考古学ジャーナル』第211号1982
・小笠原好彦「東北における平安時代の土器についての二、三の問題」『東北考古学の諸問題』1976

Ⅵ. 調査のまとめ

1．はじめに

今回の調査で竪穴住居３棟、土坑７基、溝、井戸など多くの遺構と、これらの遺構に伴う遺物が確認された。検出した遺構や出土した遺物より、この広岡前遺跡は平安時代の集落遺跡であることがわかった。また、多くの鍛冶関連遺物や検出した炉の存在から鍛冶などの鉄製産をおこなっていた遺跡でもあることが想定できた。ここでは、いくつかの項目を設定し推察及び私見を交えながら調査のまとめを述べたい。

2．竪穴住居を中心とする遺構と出土遺物

竪穴住居はⅠ区において２棟、Ⅲ区において１棟検出した。検出した竪穴住居は密集度が低いが、出土遺物から大幅な時期差は考えられない。加えて、住居の主軸、カマドの取り付け位置についても大きな差は認められず、これら３棟の竪穴住居はほぼ同時期に併存した可能性が高い。

各竪穴住居間は、竪穴住居１のみが比較的離れているが、各住居から出土した土器類の特徴が酷似し、ほぼ同一時期の可能性が高く、比較的近い関係にあったと考えられる。

集落を構成する要素のうち竪穴住居以外では、溝や墓、生産遺構などがある。溝は、水利に伴うものや集落内を区画するものなどが考えられる。今回の調査においても溝を検出している。これらの溝は溝１を除くとすべてがほぼ同じ軸あるいはそれらと直交する方向を指示していることが注目される。これらの方向性は住居の主軸と何らかの関係があると考えられ、その用途は集落内において重要な性格を保持していたものであろう。今回の調査では田畑などの耕作地は検出されておらず、周辺に存在するかもしれないが溝群と関係付けることは現段階では不可能である。

耕作地が近隣に存在したかどうかは不明であるが、集落内において何らかの生業が営まれていたはずである。特に土器類の特殊な出土等を考えると有力な集落であったと考えられる。しかし、その基盤となるものは明らかにできなかった。ただし、土器特に須恵器において特殊性がみられることから須恵器生産と関係のある集団、集落であるかもしれない。ただ、生産に直接従事していた集団であれば、もう少し窯に近い位置に居住域を設けていてもおかしくない。想像の域を出ないが、須恵器生産集団を管理掌握していた集団あるいは、須恵器の流通に関与していた集団などが想定できるのではないか

竪穴住居出土の土器を概観すると、日常の器種がほぼ完全なセットで揃い、なおかつ一括性が高い。竪穴住居１出土土器の器種構成は、供膳形態である土師器・須恵器の坏や椀、煮沸形態である土師器甕、貯蔵形態である須恵器甕・壺などが挙げられる。

竪穴住居１の床面ではまとまった土器の出土が認められた。出土遺物を概観すると、須恵器坏類は底部回転糸切り後無調整のもののみであり、いわゆる「あかやき土器」の存在は認められない。もっとも多く出土している土師器甕類は小形のものと大形のものに分かれ、両者とも粘土紐巻き上げによる１次成形の後、小形のものはロクロによる２次成形と回転ナデが顕著にみられ、大形のものはロクロによる２次成形タタキやケズリなどの調整がみられる。小形甕の底部は回転糸切り後無調整である。また、須恵器甕にはカキ目が体部上半にみられる。伊藤博幸氏の編年に照らすとカキ目の施される須恵器甕を９世紀の第1四半期と考えられる。土師器甕は、大小の分化と小形甕の底部回転糸切り後無調整であることから９世紀第2四半期に当てはめることができる。須恵器坏は後出するものが主体となる可能性がある。竪穴住居１床面出土遺物は概ね

9世紀前半～後半のものであると考えられる。埋土から出土した遺物と床面から出土した遺物の間に時間差が考えられるため、9世紀前半から9世紀後半の間に生活が営まれ、9世紀末から10世紀初頭頃にはすでに廃絶していたものと考えられる。

竪穴住居2は、出土遺物が少なく、遺構の大半が不明確なため詳細な時期は不明である。あえて年代を与えるならば、出土した土師器甕より9世紀の住居であると考えられる。

竪穴住居3は、9世紀前半から9世紀後半までの時期が考えられる。出土した土器の中に墨書されたものが存在するが、この時期、この地域において一般集落遺跡から墨書土器が出土する例は多く、この時期における墨書土器の出土は即識字層の存在を示すわけではないと考えられるが、今回出土の「大」の文字は比較的馴慣れた文字であるため識字層を想定できるかもしれない。

また、土坑5は、その他の土坑と埋土が異なり、さらに規模や形態から竪穴住居である可能性も考えられる。

土坑1、3、7からは土器が多く出土した。これらの土器は、いずれも破片であり竪穴住居と同じ時期のものと考えられ、特に土坑3と7出土の土器は相互に接合関係が認められるものもあり、時期はもとより性格に至るまで近い関係であったと考えられる。同様に土坑3、7出土の土器の中に竪穴住居3埋土出土の土器と接合関係が認められるものがあり、これらの土坑と竪穴住居3とは密接な関係があったと考えられる。以上のことから土坑3、7の2基は、竪穴住居3に伴う屋外の土器廃棄遺構であったという可能性も想定できる。これに関連して、土坑埋土からは多くの焼土塊や炭化物が出土している。竪穴住居3、同カマドの作り替え行為がなされる度に機能した廃棄土坑である可能性も考えられる。

3．鍛冶関連遺構及び関連遺物

西側調査区では、鍛冶関連の炉と考えられる遺構2基を検出した。2基とも同一軸方向に向き、同一規格の同一形態を呈する遺構である。遺構の規模や形態など諸属性から鍛冶関連の炉であると考えられる。さらに、溝1埋土からは多くの鉄滓が出土した。鉄滓は鉄塊系のものも含み、鉄の溶着痕を残すフイゴの羽口も確認された。また、井戸1埋土上層からは鍛造剥片が出土した。このような遺構や遺物から鉄製産・鍛冶がおこなわれていたことは確実である。 しかし、時期の判定が可能な土器などの遺物は共伴していないため、明確な時期は特定できない。ただし、鉄滓類の多く出土した溝1は竪穴住居2を分断して流れており、溝の軸線が現代の地割と符合する。このことから溝1は古代の遺構ではない可能性が高い。同時に竪穴住居床面や埋土下位から鉄製産関連遺物の出土はみられない。

これらのことから鍛冶関連の施設およびそれに伴う鍛冶関連遺物は、竪穴住居が展開していた平安時代以降の所産とみて間違いない。中世あるいは近世の所産であったと思われる。

ただし、調査区内から近現代の遺物は若干量みられたが、確実に中世と考えられる出土遺物は全くみられなかった。また、遺跡周辺では「カジヤシキ」という地名あるいは家名の伝承も残っているらしく、これを「鍛冶屋敷」と解釈することも可能であろう。以上を総合すると中世というより近世により近いと思われる。今後、周辺での調査事例の増加を待ち検討を加える必要がある。

4．総括

広岡前遺跡は、今回の調査で確認した遺構および遺物より9世紀前半から9世紀後半までを中心とする集落遺跡であると考えられる。江刺平野を中心とする周辺域では、当該期において爆発的に住居数の増加がみ

られる傾向にあり、しばしば北上川対岸に位置する胆沢城設置と関連付けられることがある。しかし、今回の調査では、集落の核である竪穴住居の検出数がわずか3棟だけであり、その数は決して多いものではない。また、住居の密集度合いも希薄である。このように竪穴住居の密集度が高くないことから今回の調査地点が集落の縁辺部であった可能性も考えられる。しかし、竪穴住居内の出土遺物から判断して他の周辺集落よりやや有力な集落であった可能性が高い。これに関しては、竪穴住居内から出土する須恵器の割合が非常に高く、他の集落とは異なる。

須恵器が潤沢にある状況は、瀬谷子窯跡との関連も考慮する必要があろう。住居内出土の須恵器は、広岡前遺跡の北西1.8kmに位置する瀬谷子窯跡群で生産されたとみられる坏などがまとまって出土しており、在地に根ざした集落であったことが予想される。また、考察で述べた通り水瓶や埦など特異な須恵器を所有する集団が想定されるため窯業生産との関わりが深いと考えられる。この関わりについては、土器の生産や流通との関係を考慮する必要があるが、発掘調査から明確にすることができなかった。

また、今回の調査では、鍛冶炉や鍛冶関連遺物を確認した。そのため平安時代の集落における生産基盤として鉄製産を考えることができるかもしれないが、現時点では鉄製産と竪穴住居との関係は非常に希薄であると言わざるを得ない。先に述べた通り、遺構や遺物から総合的に判断して、鉄に関連する作業は中世～近世の所産であると考えられるが、近世以降の所産の可能性が高い。

今回の調査では集落の全容を知ることはできなかったが、胆沢城対岸に位置する9世紀前半から10世紀までの集落様相の一端が窺える点で大きな成果であった。今後周辺の調査がおこなわれれば、明確に出来なかったものも明らかになると思われる。また、土器の年代観、集落の様相などより厳密な成果が期待される。江刺平野における今後の出土資料の増加を切に願う次第である。

表3　遺物観察一覧表（土器）

図　版	写真図版	分類	器種	残存率(%)	法　量（cm）				色　調			胎土	焼成	備　考
					口径	底径	器高	器厚	外　面	内　面	破断面			
図9－1	写11－3	土師器	甕	30↓	15.8	?	?	0.5	10YR5/2灰黄褐色	10YR3/2黒褐色	10YR3/2黒褐色	○	○	口縁端部潰れ気味
図9－2	写11－2	土師器	甕	30↓	?	7.6	?	0.8	10YR8/1灰白色	10YR8/2灰白色	10YR8/2灰白色	○	○	
図9－3	写11－1	土師器	甕	30↓	?	7.4	?	0.9	10YR7/4にぶい黄橙色	10YR8/6黄橙色	10YR7/4にぶい黄橙色	○	○	
図12－1	写11－5左上	須恵器	坏	40	13.8	5.7	4.7	0.6	10YR7/2にぶい黄橙色	10YR7/1灰白色	10YR7/1灰白色	○	○	
図12－2	写12－2	須恵器	坏	40	14.2	(6)	(4.8)	0.6	5Y6/1灰色	5Y6/1灰色	5Y6/1灰色	△	○	口縁部内面に沈線様一条
図12－3	写12－11	須恵器	坏	40	(15.0)	(5.8)	4.8	0.5	10Y6/1灰色	10Y6/1灰色	10Y6/1灰色	○	○	
図12－4	写12－7	須恵器	坏	40	(14.8)	(6.6)	4.4	0.6	5YR7/4にぶい橙色	5YR7/4にぶい橙色	2.5Y6/1黄灰色	○	△	還元不足
図12－5	写12－10	須恵器	坏	30↓	(15.7)	(6.5)	5.3	0.6	5Y6/1灰色	5BG6/1青灰色	5BG6/1青灰色	○	○	
図12－6	写12－9	須恵器	坏	40	(14.8)	5.5	4.8	0.7	10YR8/3浅橙色	10YR8/3浅橙色	10YR8/3浅橙色	○	×	ヘラ記号「－」あり
図12－7	写12－8	須恵器	坏	30↓	(15.0)	(7.0)	4.1	0.5	5Y8/1灰白色	5Y8/1灰白色	5Y8/1灰白色	○	△	
図12－8	写12－5左下	須恵器	坏	30↓	(14.0)	(6.8)	5.8	0.6	10YR7/6明黄褐色	10YR7/4にぶい黄橙色	10YR7/4にぶい黄橙色	○	○	
図12－9	写12－3	土師器	甕	50	?	6.9	?	0.7	10YR6/3にぶい黄橙色	10YR7/3にぶい黄橙色	10YR7/3にぶい黄橙色	○	○	二次焼成痕あり
図12－10	写11－4左下	土師器	甕	30↓	?	(5.8)	?	0.7	10YR5/2灰褐色	10YR8/2灰白色	10YR8/2灰白色	△	○	二次焼成痕あり
図12－11	写13－1	土師器	坏	70	12.2	6.8	5.0	0.6	5YR6/6橙色	7.5YR1.7/1黒色	7.5YR1.7/1黒色	○	○	内外面ともにタール状炭化物付着
図12－12	写13－7	土師器	坏	30↓	?	5.8	(1.6)	0.7	10YR7/4にぶい黄橙色	2.5YR3/1暗赤褐色	2.5YR3/1暗赤灰色	○	○	内面ヘラミガキ
図12－13	写13－8	土師器	坏	30↓	?	7.5	?	0.6	7.5YR6/6橙色	7.5YR2/1黒色	7.5YR6/6橙色	○	○	
図12－14	写13－10	須恵器	坏	30↓	?	(6.0)	?	0.8	7.5YR6/4にぶい橙色	N5/0灰色	N5/0灰色	○	△	還元不足
図12－15	写13－9	須恵器	坏	30↓	?	(6.1)	?	0.7	5Y6/1灰白色	5Y7/1灰白色	5Y7/1灰白色	○	△	
図12－16	写13－6	須恵器	壺	30↓	(12.6)	?	?	0.5	10BG5/1青灰色	10BG5/1青灰色	10BG5/1青灰色	○	◎	内面に星状の降灰あり
図12－17	写14－1右上	須恵器	甕	30↓	(25.0)	?	?	0.8	10BG5/1青灰色	10BG5/1青灰色	10BG5/1青灰色	○	○	
図12－18	写11－4左下	土師器	甕	30↓	(22.0)	?	?	0.7	10YR7/6明黄褐色	10YR7/6明黄褐色	10YR6/2灰黄褐色	○	○	
図12－19	写13－2	土師器	坏?	40	?	(8.0)	?	1.0	10YR7/4にぶい黄橙色	10YR7/4にぶい黄橙色	10YR7/4にぶい黄橙色	○	○	
図12－20	写11－5右上	須恵器	坏か	30↓	(17.0)	?	?	0.5	10BG5/1青灰色	10BG6/1青灰色	10BG6/1青灰色	○	○	と胎土・色調似る
図12－21	写12－5中上	須恵器	坏	99	16.3	6.1	7.1	0.9	10BG7/1明青灰色	10BG7/1明青灰色	10BG7/1明青灰色	○	△	墨書「大」逆字（体部外面）
図12－22	写12－1	須恵器	坏	60	16.3	6.4	6.1	0.6	10BG6/1青灰色	10BG6/1青灰色	10BG6/1青灰色	○	○	

図版	写真図版	分類	器種	残存率(%)	法量(cm)				色調			胎土	焼成	備考
					口径	底径	器高	器厚	外面	内面	破断面			
図12－23	写12－5	須恵器	坏	30↓	(16.0)	(7.0)	(4.5)	0.5	2.5Y8/1灰白色	2.5Y8/1灰白色	2.5Y8/1灰白色	○	×	還元不足
図12－24	写12－6	須恵器	坏	40	(17.9)	?	(4.5)	0.6	2.5YR7/4淡赤橙色	2.5YR5/3にぶい赤褐色	2.5YR7/4淡赤橙色	○	×	還元不足
図12－25	写13－4	須恵器	甕	30↓	(20.4)	?	?	1.0	N5/0灰色	N5/0灰色	N5/0灰色	○	◎	緑色の自然釉かかる
図12－26	写13－11	土師器	甕	40	(31.2)	?	?	0.6	2.5Y7/2灰黄色	10YR8/2灰白色	10YR8/2灰白色	○	◎	外面に二次焼成痕あり
図12－27	写12－12	土師器	坏	50	(17.0)	(8.0)	5.8	0.7	7.5YR5/4にぶい褐色	7.5YR2/1黒色	7.5YR5/4にぶい褐色	○	○	
図12－28	写11－4右上	土師器	甕	30↓	(14.6)	?	?	0.6	10YR8/2灰白色	10YR7/1灰白色	10YR7/1灰白色	○	○	
図12－29	写11－4左上	土師器	甕	30↓	(19.7)	?	?	0.6	2.5YR6/1にぶい橙色	10YR7/3にぶい黄橙色	2.5Y4/1黄灰色	○	○	器表面剥落著しい
図12－30	写12－4	須恵器	椀	98	18.4	8.7	6.2	1.2	5BG5/1青灰色	5BG5/1青灰色	5BG5/1青灰色	△	◎	底部内面は磨滅著しい
図12－31	写11－5左上	須恵器	椀	40	(18.2)	?	?	0.6	5B6/1青灰色	N4/0灰色	2.5YR5/1赤灰色	○	◎	
図12－32	写12－3	須恵器	坏	50	(14.1)	5.2	5.4	0.6	2.5Y7/1灰白色	2.5Y7/1灰白色	2.5Y7/1灰白色	○	×	底部外面に「＋」字ヘラ記号あり
図12－33	写13－5	土師器	甕	50	(24.0)	?	?	0.7	10YR8/1灰白色	10YR8/1灰白色	10YR8/1灰白色	○	△	
図15－1	写14－10左	須恵器	坏	30↓	(14.5)	(6.5)	4.6	0.6	10Y6/1灰色	10Y6/1灰色	10Y6/1灰色	○	○	
図15－2	写14－10右	須恵器	坏	30↓	(13.7)	(7.0)	5.3	0.6	10Y6/2灰色	10Y6/2灰色	10Y6/2灰色	○	○	
図15－3	写14－7上	土師器	甕	30↓	(25.0)	?	?	0.7	2.5Y8/4淡黄色	2.5Y8/2灰白色	2.5Y8/2淡黄色	○	△	
図15－4	写14－7下	土師器	甕	30↓	(25.1)	?	?	0.8	10YR6/3にぶい黄橙色	10YR6/1褐灰色	10YR6/3にぶい黄橙色	○	○	
図15－5	写14－2	土師器	坏	40	?	5.7	?	0.8	10YR7/4にぶい黄橙色	10YR2/1黒色	10YR7/4にぶい黄橙色	○	○	
図15－6	写14－3	須恵器	坏	30↓	?	(7.3)	?	0.7	7.5Y6/1灰白色	7.5Y6/1灰白色	7.5Y6/1灰白色	○	○	
図15－7	写14－1左上	須恵器	壷	30↓	(12.6)	?	?	0.6	N5/0灰色	10YR5/1赤灰色	10YR5/1赤灰色	○	◎	
図15－8	写14－6	土師器	坏	40	14.4	(5.2)	4.4	0.7	10YR5/3にぶい黄橙色	10YR3/1黒褐色	10YR5/3にぶい黄橙色	○	○	
図15－9	写14－11	須恵器	甕	30↓	?	?	?	1.1	5Y5/1灰色	5Y5/1灰色	5Y5/1灰色	○	○	
図15－10	写14－4	須恵器	坏	30↓	(15.0)	?	?	0.5	5Y6/1灰色	5Y6/1灰色	5Y6/1灰色	○	○	
図15－11	写14－8	須恵器	坏	70	14.0	6.4	5.8	0.6	10BG6/1青灰色	10BG6/1青灰色	10BG6/1青灰色	△	◎	
図15－12	写14－9	須恵器	・	70	13.3	7.7	5.2	0.5	5BG6/1青灰色	5BG6/1青灰色	5BG6/1青灰色	○	◎	
図15－13	写14－1左下	須恵器	・	30↓	(18.0)	?	?	0.5	10BG4/1暗青灰色	10BG4/1暗青灰色	N5/0灰色	○	○	
図15－14	写14－5	土師器	坏	30↓	(13.9)	?	?	0.8	7.5YR6/6橙色	7.5YR2/1黒色	7.5YR6/6橙色	○	△	
図16－1	写15－3	須恵器	坏	60	(13.4)	5.5	4.6	0.7	7.5YR5/2灰褐色	7.5YR5/2灰褐色	7.5YR5/2灰褐色	○	△	還元不足

図版	写真図版	分類	器種	残存率(%)	法量(cm)				色調			胎土	焼成	備考
					口径	底径	器高	器厚	外面	内面	破断面			
図16－2	写15－1	須恵器	坏	100	14.7	6.3	5.2	0.9	5YR8/3淡橙色	5YR8/3淡橙色		○	×	還元不足
図16－3	写15－6	須恵器	坏	60	14.2	5.2	4.6	0.8	10YR8/3浅黄橙色	10YR8/3浅黄橙色	10YR8/3浅黄橙色	○	△	底部外面に「＋」字ヘラ記号あり
図16－4	写16－5左	須恵器	坏	30↓	(15.2)	?	?	0.5	5B5/1青灰色	5B6/1青灰色	5B6/1青灰色	○	○	
図16－5	写16－2	土師器	坏	50	(13.0)	(6.9)	5.1	0.9	10YR8/3浅黄橙色	10YR2/1黒色	10YR8/3浅黄橙色	○	○	
図16－6	写15－7	土師器	坏	30↓	?	7.2	?	0.9	10YR7/4にぶい黄橙色	7.5YR2/1黒色	10YR7/4にぶい黄橙色	○	○	
図16－7	写15－5	土師器	坏	50	(14.8)	(6.2)	5.6	0.8	10YR6/2灰黄褐色	10YR2/1黒色	10YR6/2灰黄褐色	○	○	
図16－8	写15－4	土師器	坏	60	?	6.5	?	0.9	7.5YR7/4にぶい橙色	2.5YR2/1黒色	7.5YR7/4にぶい橙色	○	○	
図16－9	写15－2	土師器	坏	60	12.1	6.0	4.9	0.8	7.5YR6/4にぶい橙色	10YR4/1褐灰色	7.5YR6/4にぶい橙色	○	△	
図16－10	写15－8	土師器	甕	30↓	?	7.2	?	1.1	10YR7/3にぶい黄橙色	10YR7/3にぶい黄橙色	10YR7/3にぶい黄橙色	○	○	
図16－11	写15－9	土師器	甕	30↓	?	8.6	?	0.6	2.5YR6/6橙色	2.5YR6/6橙色	2.5YR6/6橙色	○	○	
図16－12	写16－4	土師器	甕	30↓	?	(8.0)	?	1.4	10YR4/2灰黄褐色	10YR6/3にぶい黄橙色	10YR4/2灰黄褐色	○	○	
図16－13	写16－5右	須恵器	坏	30↓	(13.5)	?	?	0.5	5B5/1青灰色	5B5/1青灰色	7.5YR6/1褐灰色	○	○	
図16－14	写16－7右上	土師器	甕	30↓	(16.2)	?	?	0.4	2.5Y6/2灰黄色	2.5Y6/2灰黄色	2.5Y6/2灰黄色	○	○	
図16－15	写15－7左下	土師器	甕	40	(20.3)	?	?	0.7	10YR7/3にぶい黄橙色	10YR5/1褐灰色	10YR7/3にぶい黄橙色	○	○	内面に炭化物付着
図16－16	写15－11	土師器	甕	40	10.8	?	?	0.3	10YR7/2にぶい黄橙色	2.5Y7/3浅黄色	10YR7/2にぶい黄橙色	○	◎	
図16－17	写16－7左上	土師器	甕	30↓	23.5	?	?	0.5	10YR5/6黄褐色	10YR5/6黄褐色	10YR5/6黄褐色	○	○	
図16－18	写16－7右下	土師器	甕	30↓	(21.9)	?	?	0.5	2.5Y4/2暗灰黄色	2.5Y4/2暗灰黄色	2.5Y2/2暗灰黄色	○	○	
図16－19	写16－3	土師器	鉢？	30↓	(23.3)	?	?	0.7	10YR8/4浅黄橙色	5Y2/1黒色	10YR8/4浅黄橙色	○	○	
図16－20	写15－12	土師器	甕	30↓	?	(18.7)	?	1.5	10YR8/2灰白色	10YR8/2灰白色	10YR8/2灰白色	○	△	
図16－21	写16－6	土師器	甕	40	(32.4)	?	?	0.9	10YR8/3灰白色	10YR8/3灰白色	10YR8/3灰白色	○	○	
図16－22	写15－10	須恵器	甕	30↓	?	?	?	1.0	10Y6/1灰色	N4/0灰色	N6/0灰色	○	○	
図25－1	写17－3	須恵器	坏	60	13.7	6.4	0.4	0.7	5Y6/1灰色	5Y6/1灰色	5Y6/1灰色	○	○	
図25－2	写17－2	須恵器	坏	70	13.6	5.7	4.2	0.6	N6/0灰色	N6/0灰色	N6/0灰色	△	○	外面に火襷あり
図25－3	写17－1	須恵器	坏	80	14.6	6.9	4.1	0.6	10BG5/1青灰色	5YR5/2灰褐色	5YR5/3灰褐色	△	△	
図25－4	写17－4	土師器	坏	40	(13.2)	(6.5)	4.5	0.8	7.5YR6/6橙色	7.5YR2/1黒色	7.5YR2/1黒色	○	○	
図25－5	写17－5	須恵器	坏	30	?	4.8	?	0.7	N5/0灰色	N5/0灰色	5YR5/3にぶい赤褐色	○	○	

図　版	写真図版	分類	器種	残存率(%)	法　量（cm）				色　調			胎土	焼成	備　考
					口径	底径	器高	器厚	外　面	内　面	破断面			
図25－6	写18－2	土師器	鉢？	30	(40.0)	?	?	0.85	5Y7/1灰白色	10YR7/3にぶい黄橙色	5Y7/1灰白色	○	◎	二次焼成痕なし
図25－7	写17－6	須恵器	壺	30↓	(18.8)	?	?	0.7	N3/0暗灰色	2.5GY4/1暗オリーブ灰色	7.5GY5/1緑灰色	○	○	
図25－8	写18－1右下	土師器	甕	30↓	(15.0)	?	?	0.7	5YR7/2明褐灰色	2.5Y5/2暗灰黄色	5YR7/2明褐色灰色	○	△	
図25－9	写19－1右	土師器	甕	40	(16.4)	?	?	0.7	10YR7/にぶい黄橙色	10YR7/3にぶい黄橙色	10YR7/3にぶい黄橙色	○	○	内外面に黒斑あり
図25－10	写18－5	土師器	甕	50	(15.3)	?	?	0.7	10YR8/2灰白色	10YR8/2灰白色	10YR8/2灰白色	○	△	
図25－11	写18－6	土師器	甕	40	(15.4)	?	?	0.6	5YR6/2灰褐色	7.5YR7/3にぶい灰色	5YR6/2灰褐色	○	○	
図25－12	写18－1左下	土師器	甕	30↓	(14.3)	?	?	0.3	10YR7/2にぶい黄橙色	10YR7/2にぶい黄橙色	10YR7/2にぶい黄橙色	○	△	外面に二次焼成痕あり
図25－13	写18－1右上	土師器	甕	30	(14.2)	?	?	0.5	2.5Y7/1灰白色	2.5Y8/2灰白色	2.5Y8/2灰白色	○	△	
図25－14	写18－3	土師器	甕	70	?	6.2	?	0.7	5YR6/4にぶい橙色	5YR6/6橙色	5YR6/6橙色	○	○	
図25－15	写18－1左上	土師器	甕	30	(22.2)	?	?	0.7	5YR7/2明褐灰色	5YR7/2明褐灰色	5YR7/2明褐灰色	○	△	
図25－16	写19－1左	土師器	甕	30↓	(23.0)	(12.4)	(7.5)	0.8	10YR7/2にぶい黄橙色	10YR7/2にぶい黄橙色	10YR7/2にぶい黄橙色	○	○	
図25－17	写18－7	土師器	甕	40	(22.2)	?	?	1.0	7.5YR7/4にぶい橙色	7.5YR7/4にぶい橙色	7.5YR7/4にぶい橙色	○	○	
図25－18	写18－4	土師器	甕	50	(24.4)	7.4	33.0	2.1	5YR8/4淡橙色	5YR8/4淡橙色	5YR8/4淡橙色	○	△	磨滅著しい
図25－19	写17－8	須恵器	甕	60	16.8	11.7	?	3.3	N3/0暗灰色	N3/0暗灰色	N3/0暗灰色	○	○	
図25－20	写17－7	須恵器	水瓶	40	1.9	?	14.6	1	10BG5/1青灰色	10BG6/1青灰色	5YR5/4にぶい赤褐色	◎	◎	
図27－1	写19－3中下	須恵器	坏	40	(15.2)	6.2	4.1	0.3	N3/0暗灰色	N3/0暗灰色	N3/0暗灰色	○	○	
図27－2	写19－3	須恵器	甕	30↓	?	?	?	3.0	10BG5/1青灰色	10BG5/1青灰色	10BG5/1青灰色	○	○	
図27－3	写19－3右上	土師器	甕	30↓	(25.5)	?	?	0.7	10YR8/3浅黄橙色	10YR8/3浅黄橙色	10YR8/3浅黄橙色	○	○	
図27－4	写19－3右下	須恵器	坏	(12.0)	?	?	?	0.4	5Y6/1灰色	5Y6/1灰色	5Y6/1灰色	○	○	
図27－5	写19－3左下	須恵器	坏	40	(12.8)	(2.8)	(3.8)	0.5	10BG5/1青灰色	10BG5/1青灰色	10BG5/1青灰色	○	○	

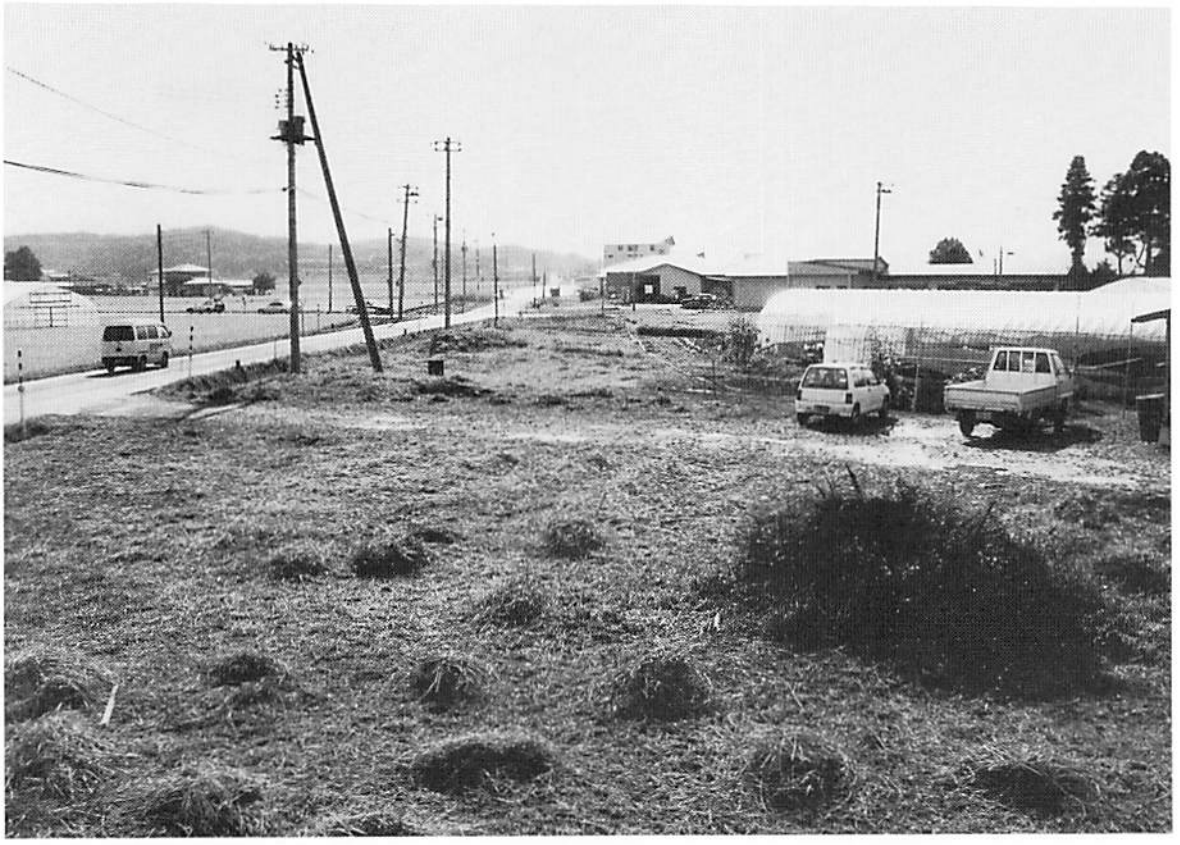
＊残存率は％で表し、30％以下のものは特に「30↓」と表した。

＊胎土は「精良」…○「やや粗」…△「粗」…×と記号化した。

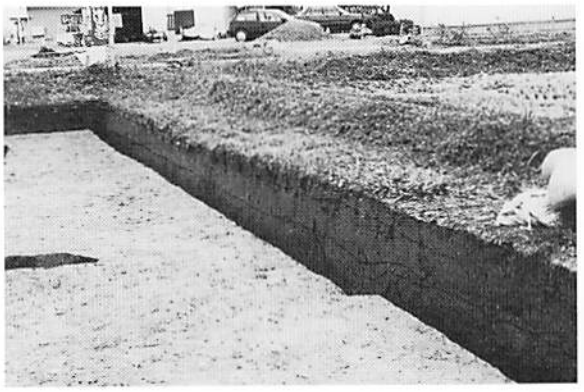
＊法量の数値は、残存値・推定値を（　）で表した。

＊焼成は「非常に良好」…◎「良好」…○「やや不良」…△「不良」…×と記号化した。

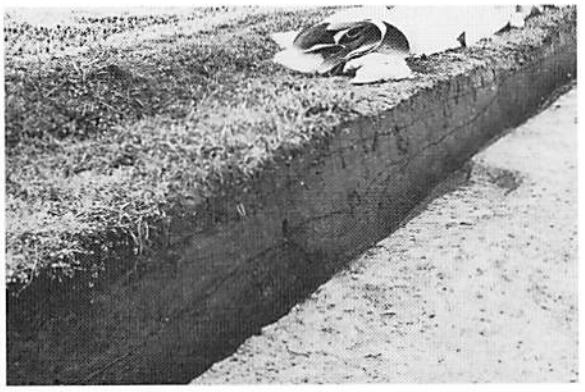
写 真 図 版



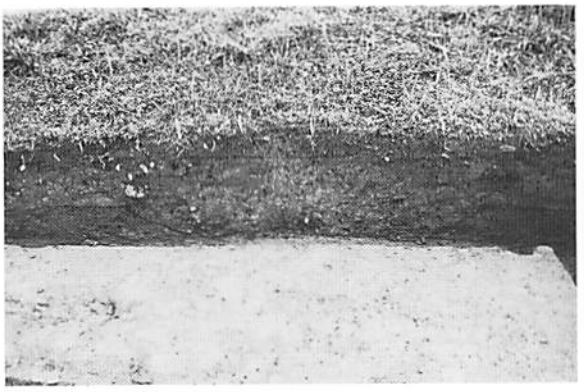
調査前全景



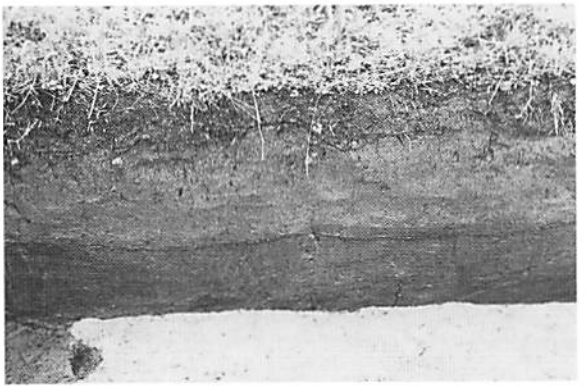
土層断面（Ⅰ区南）



土層断面（Ⅰ区南）

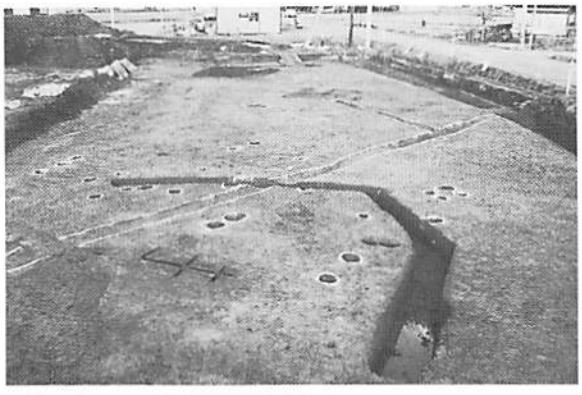


土層断面（Ⅰ区東）



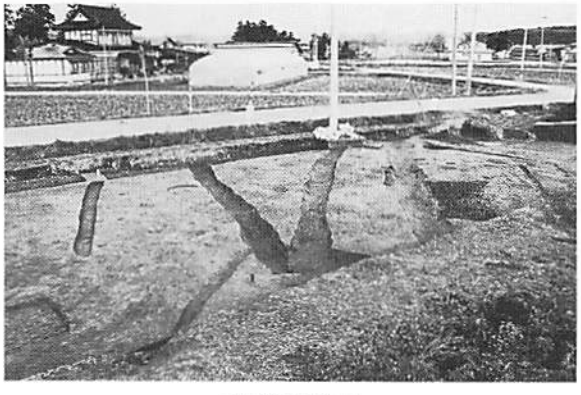
土層断面（Ⅰ区東）

写真図版 1

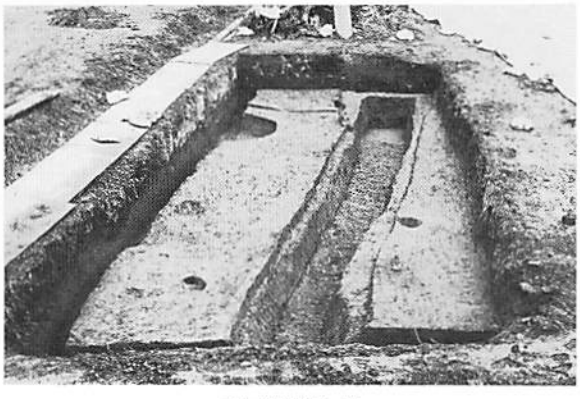


Ⅰ区全景

Ⅰ区全景

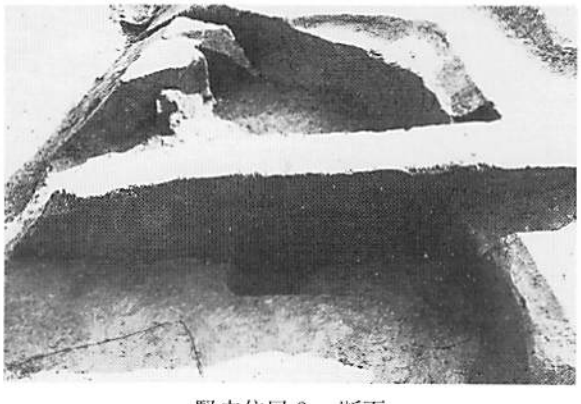


Ⅰ区東側全景



Ⅰ区西端全景

竪穴住居２　断面

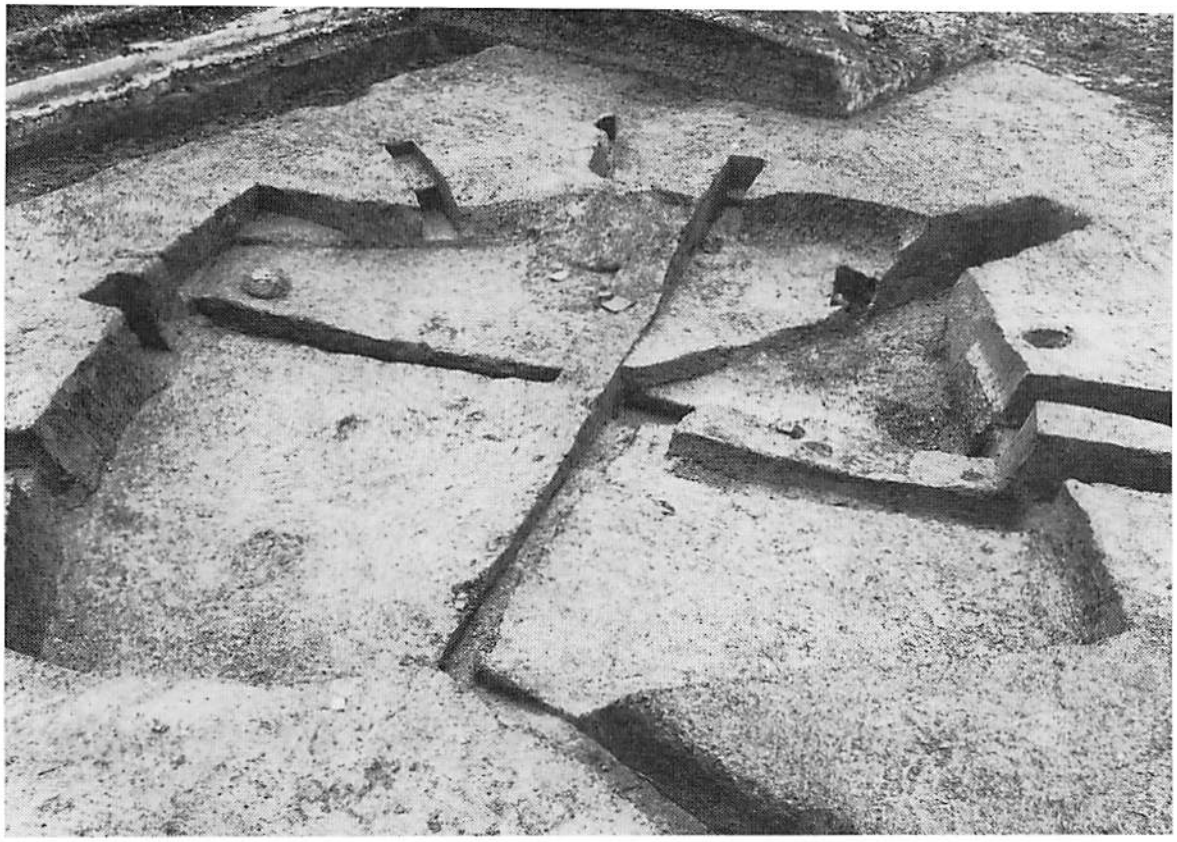


竪穴住居２　断面

竪穴住居２　カマド断面

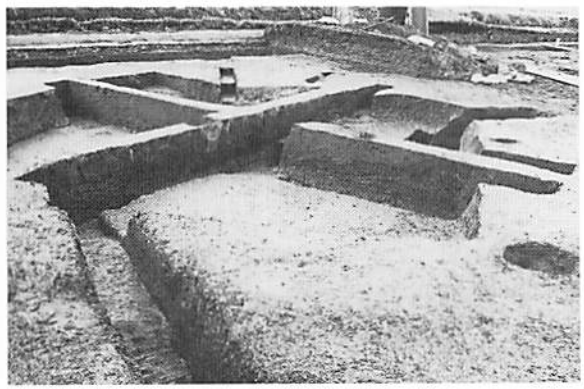
竪穴住居２　カマド断面

写真図版２

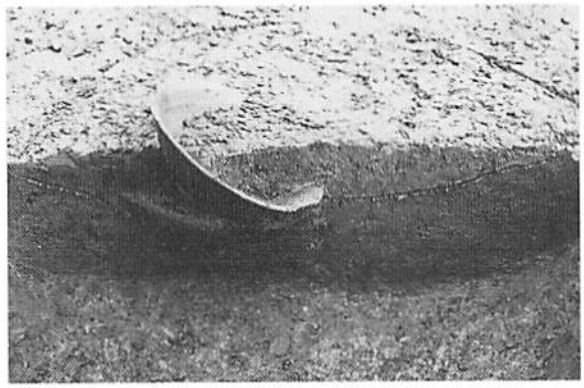


竪穴住居１　全景

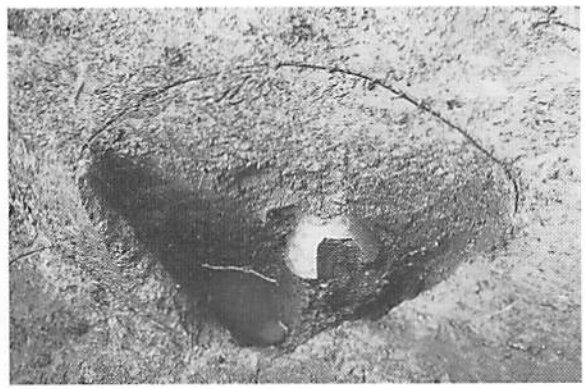
竪穴住居１　断面



竪穴住居１　断面

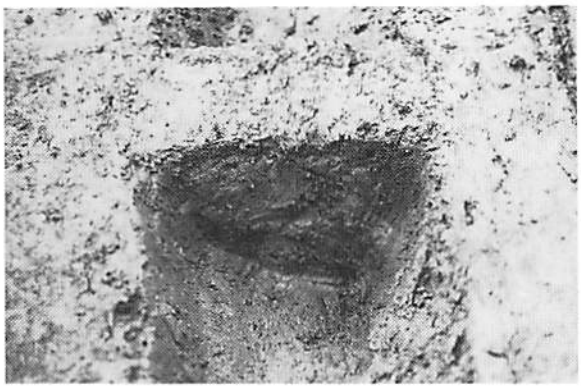


竪穴住居１　遺物出土状況

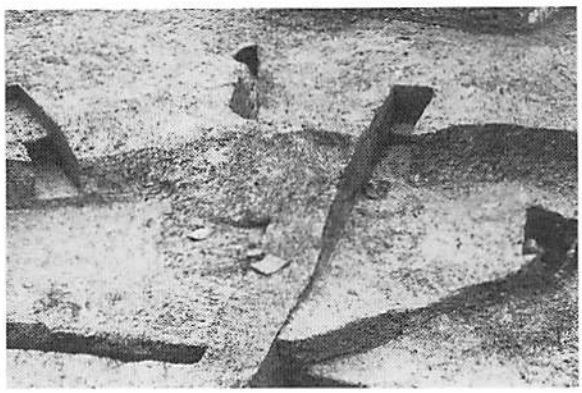


竪穴住居１　遺物出土状況

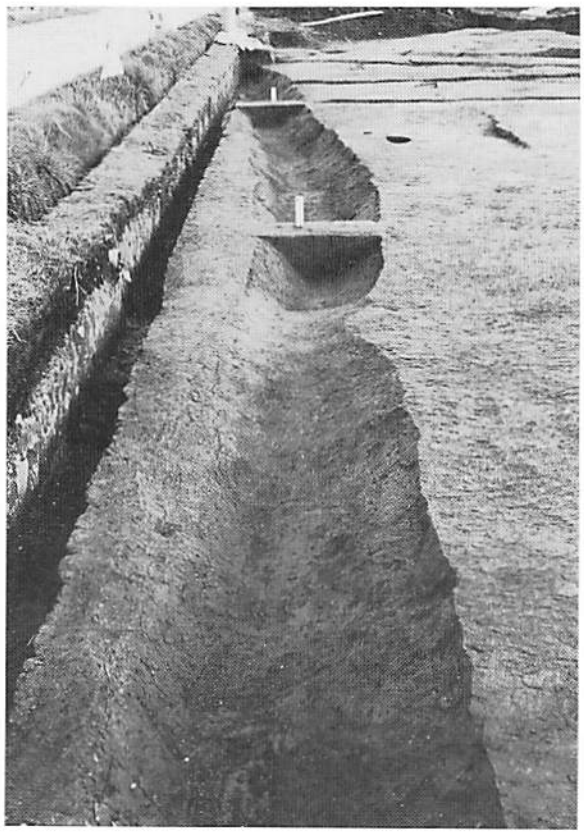
写真図版３



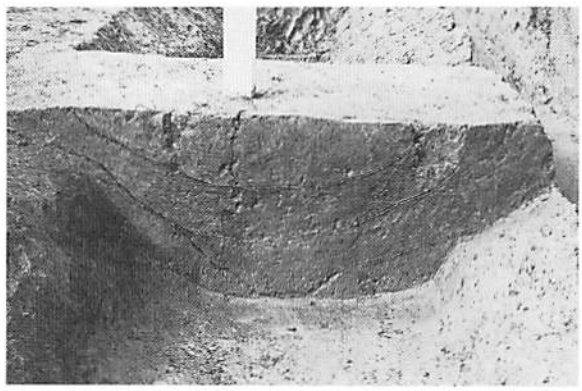
竪穴住居１　壁周溝



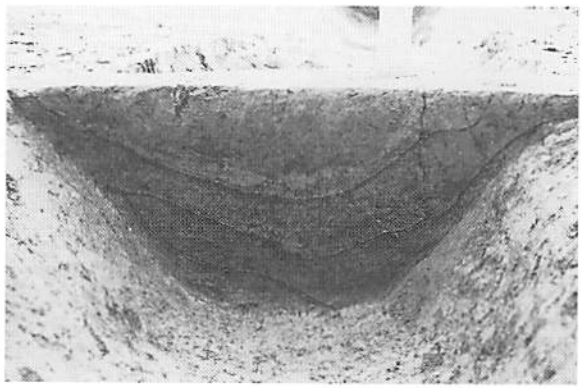
竪穴住居１　カマド



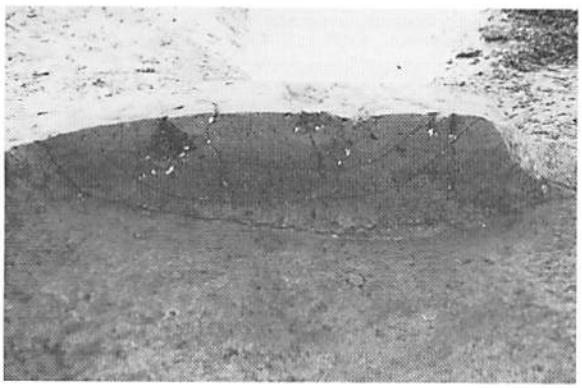
溝１　完掘状況



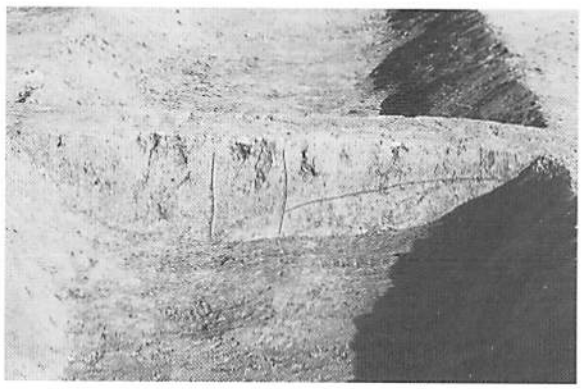
溝１　断面



溝１　断面

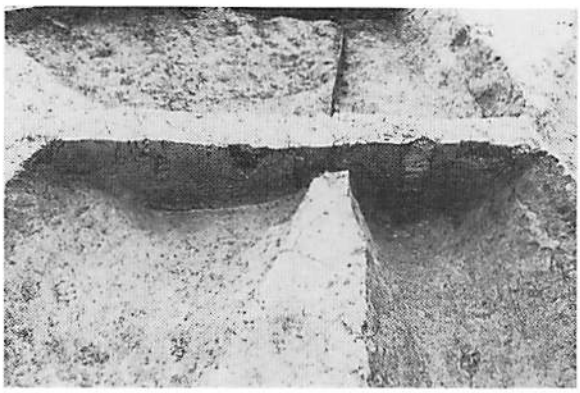


溝３　断面

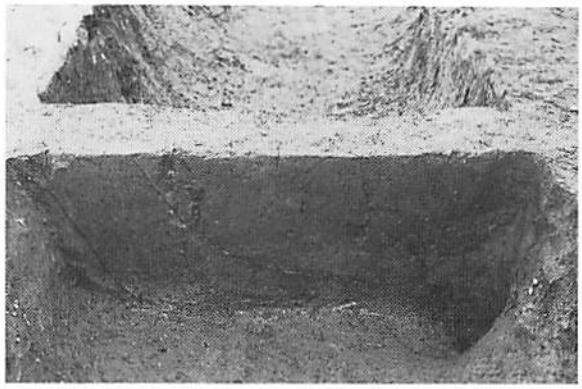


溝４　断面

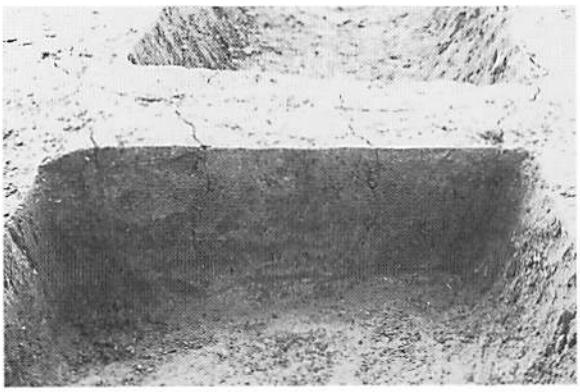
写真図版４



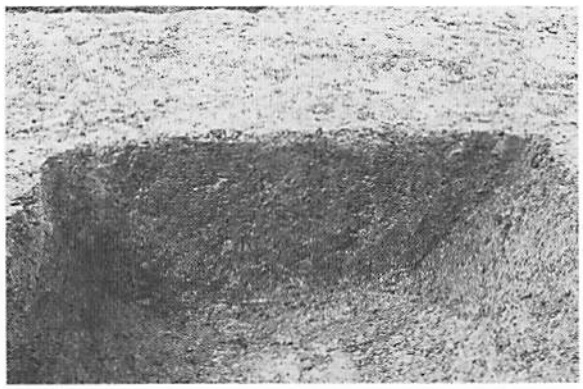
溝４・５　断面



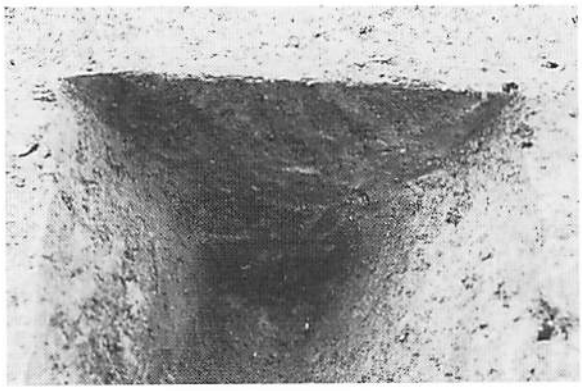
溝５　断面



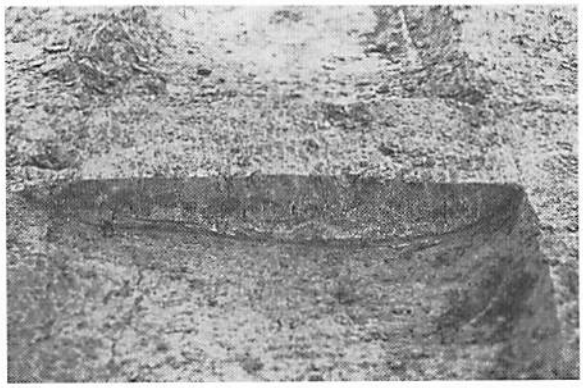
溝６　断面



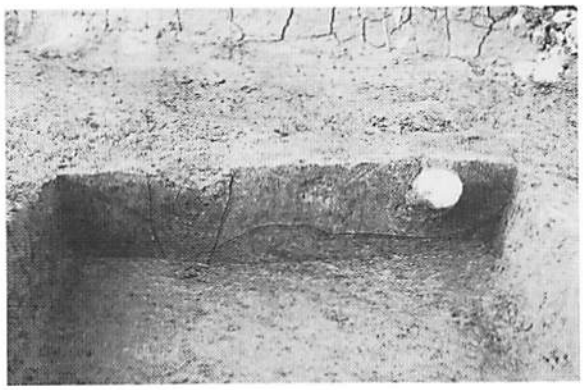
溝７　断面



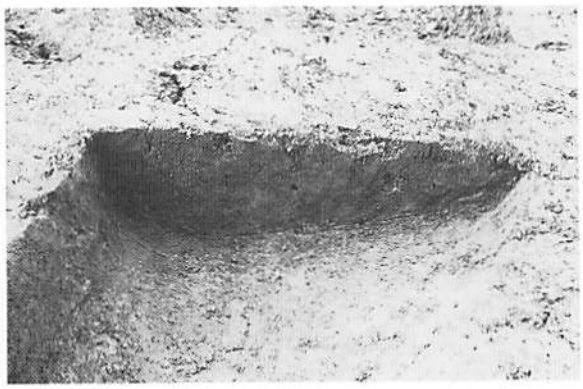
溝８　断面



溝９　断面

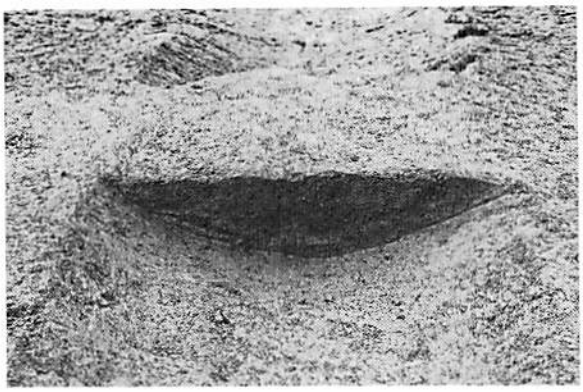


溝10　断面

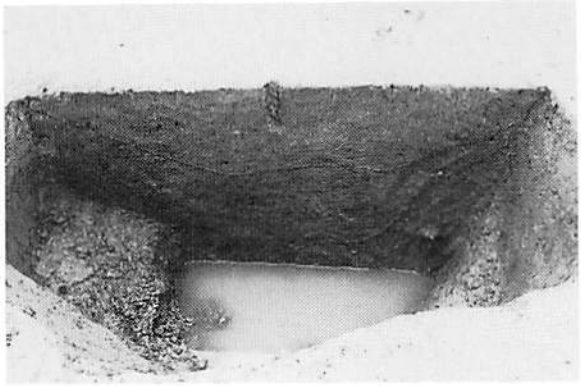


溝11　断面

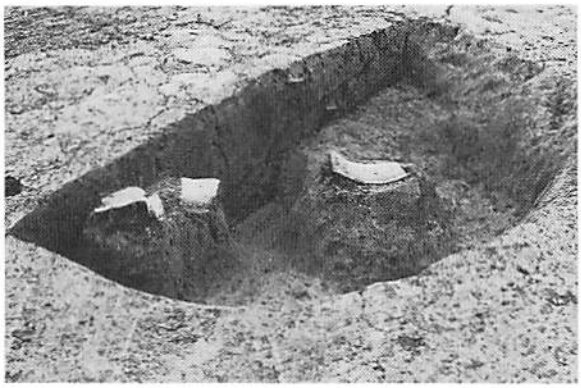
写真図版５



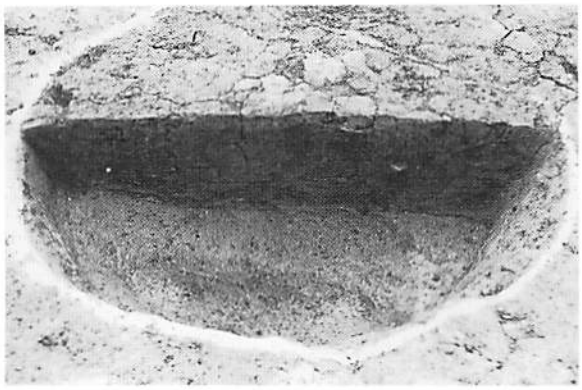
溝12　断面



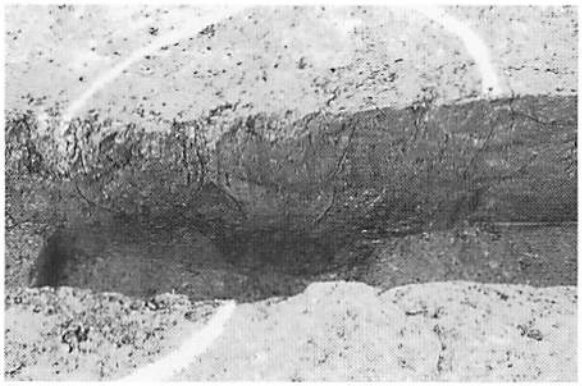
井戸１　断面



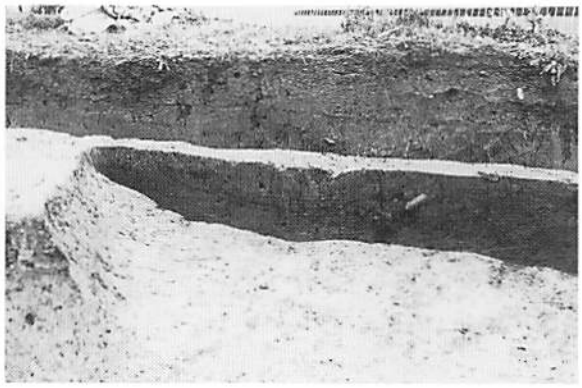
土坑１　土器出土状況



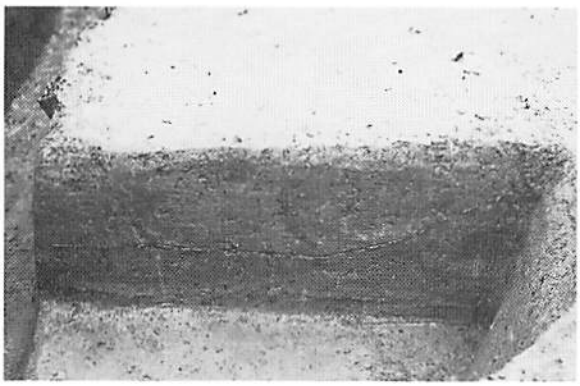
土坑１　断面



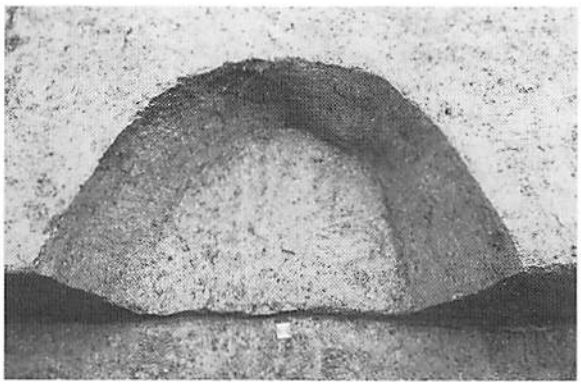
土坑２ａ・ｂ　断面



土坑３　断面

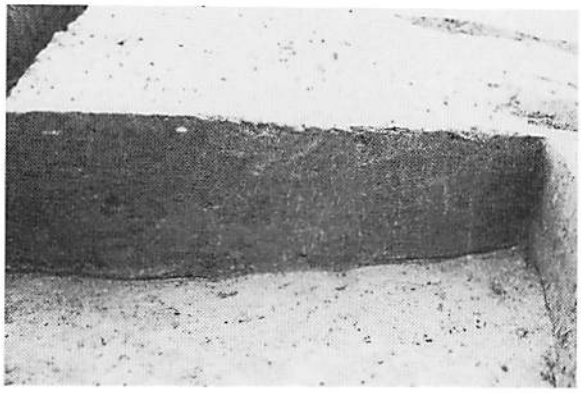


土坑４　断面

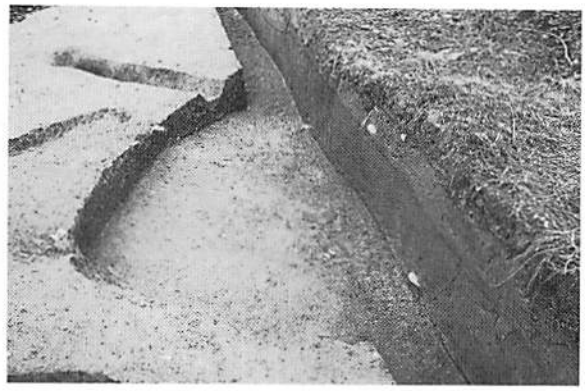


土坑４　完掘状況

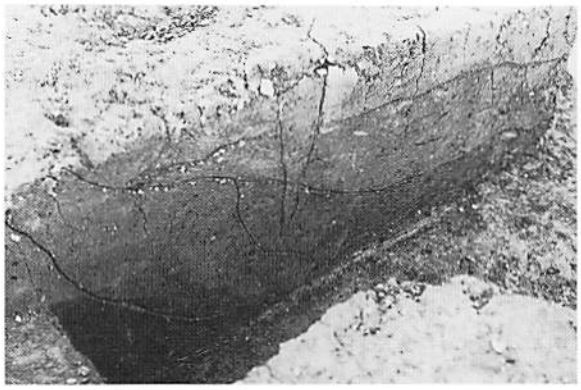
写真図版６



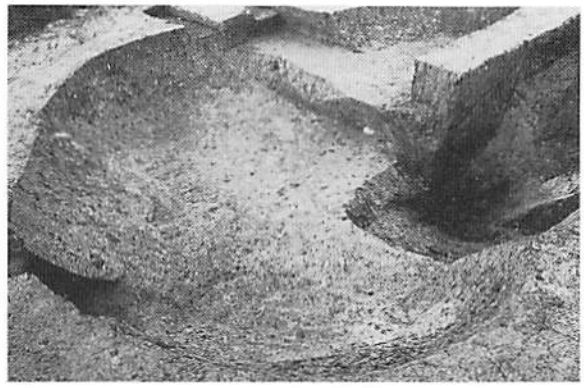
土坑５　断面



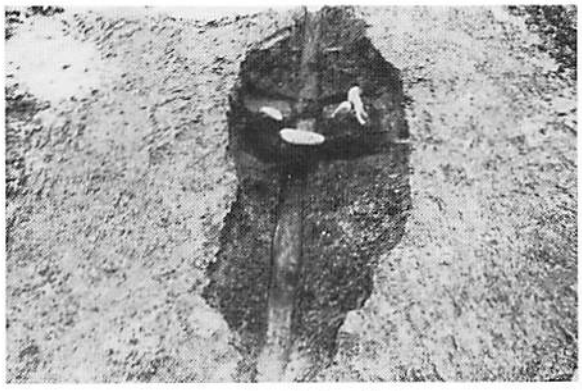
土坑５　完掘状況



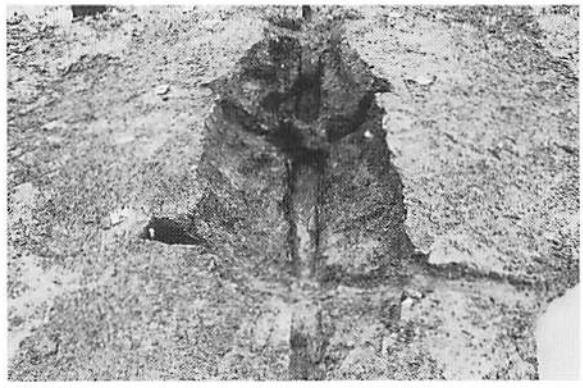
土坑７　断面



土坑７　完掘

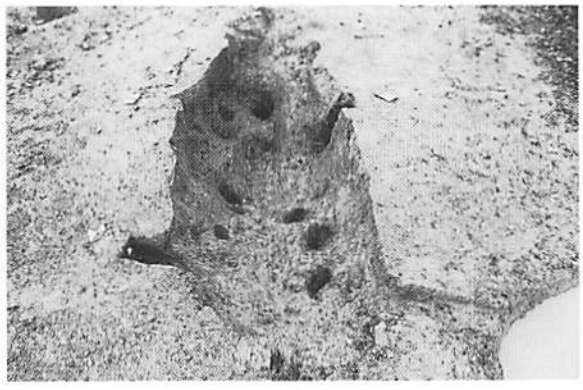


炉１　炭化物出土状況



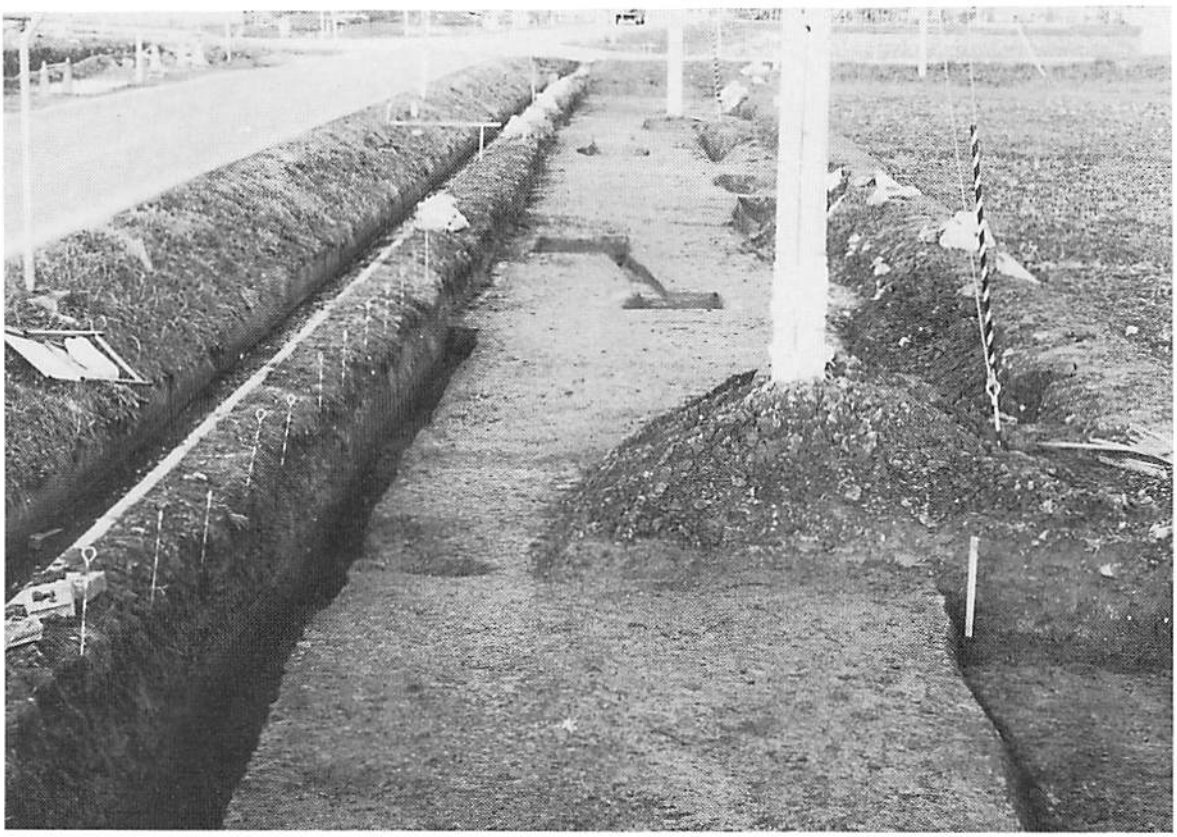
炉１　炭化物出土状況

炉１　完掘状況

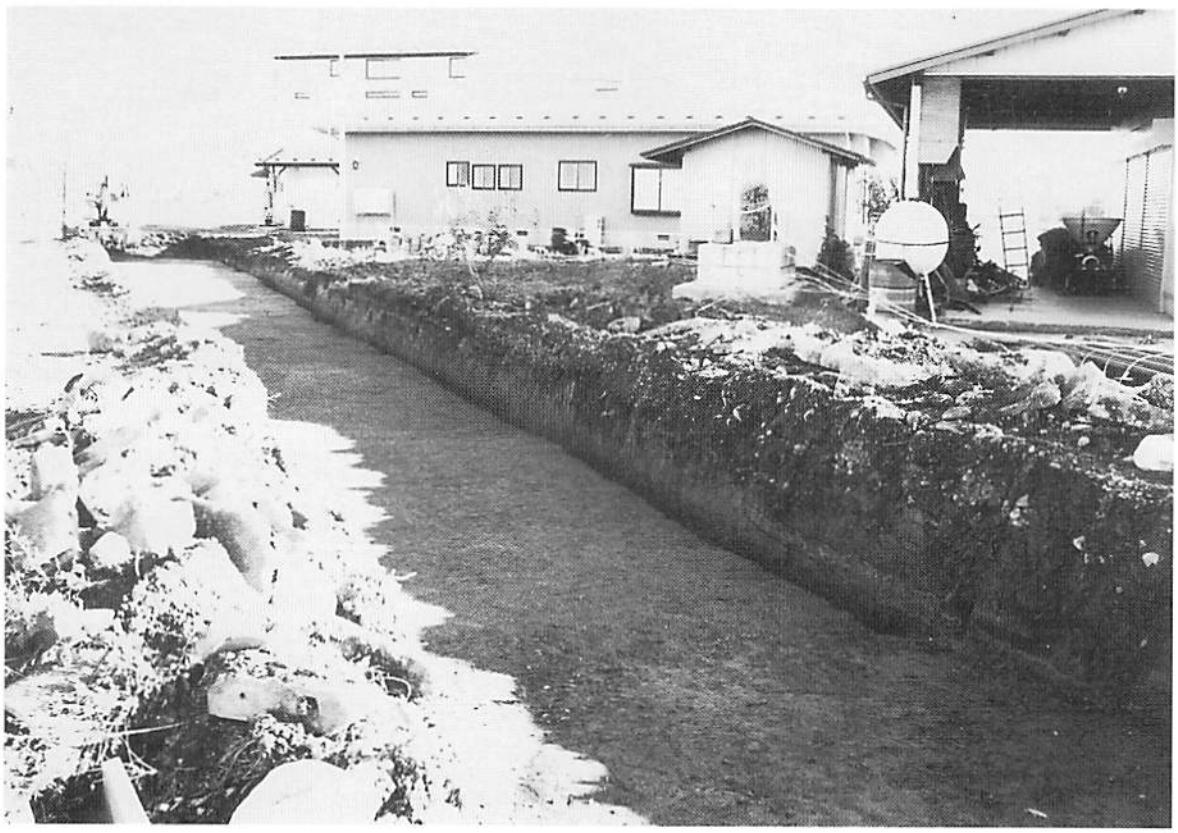


焼土２　完掘状況

写真図版７

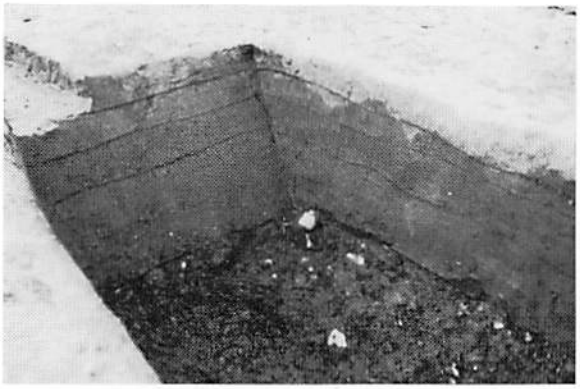


Ⅱ区全景

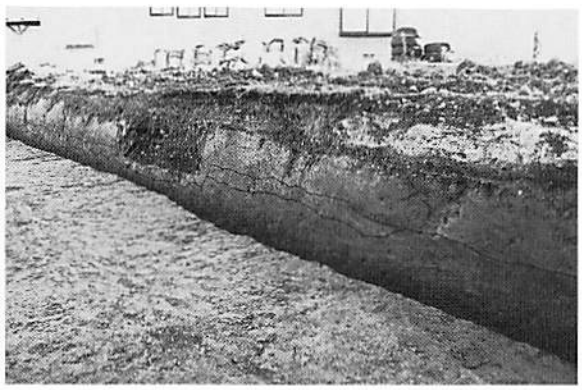


Ⅲ区全景

写真図版 8



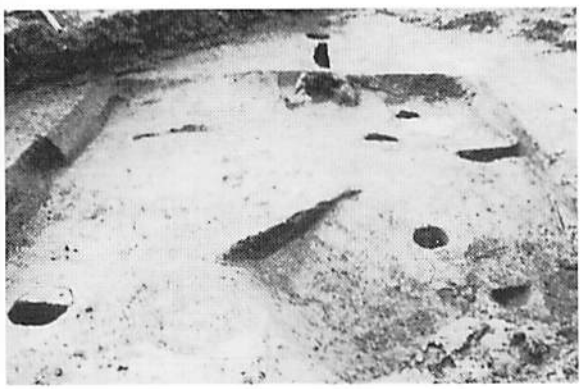
Ⅱ区　土層断面



Ⅲ区　土層断面

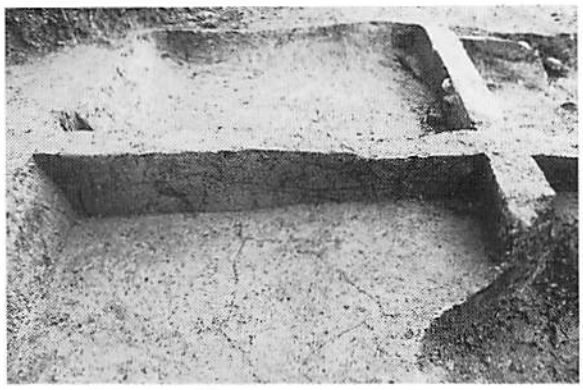
竪穴住居１　遺物出土状況

竪穴住居１　検出状況

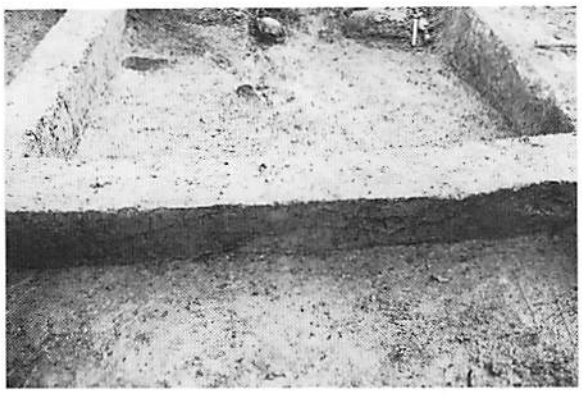


竪穴住居１　完掘状況

写真図版９

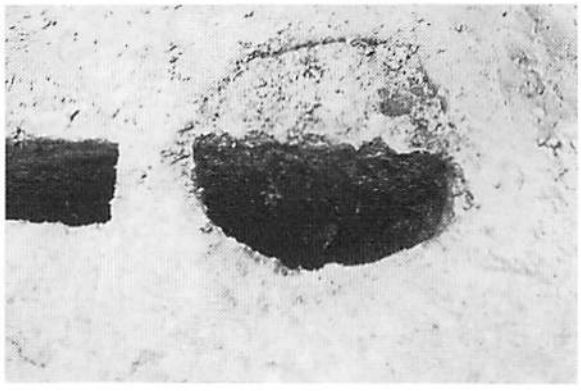


竪穴住居１　断面

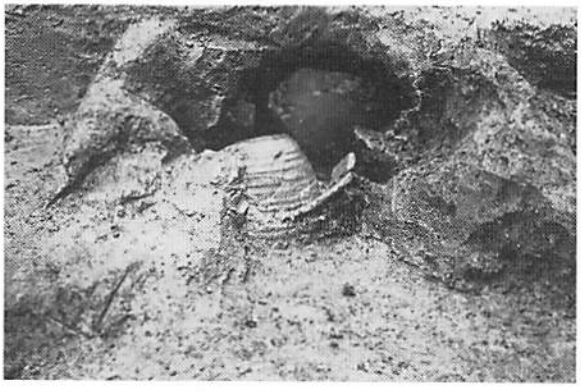


竪穴住居１　断面

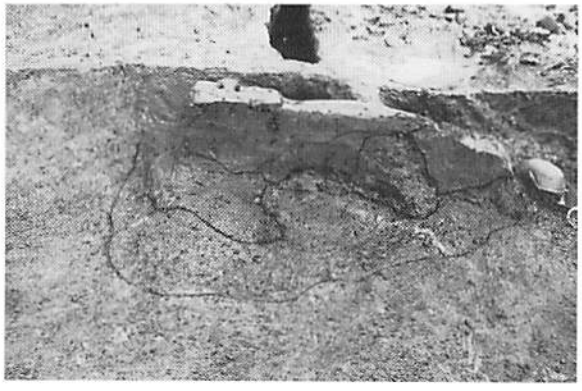
竪穴住居１　断面



竪穴住居１　煙出し断面



竪穴住居１　カマド

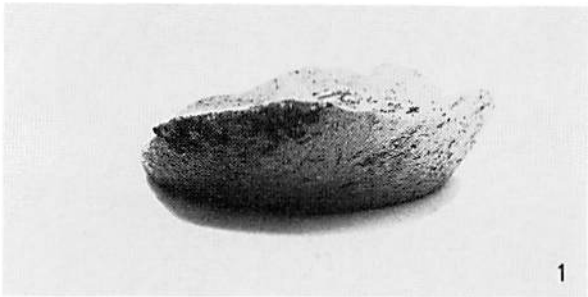


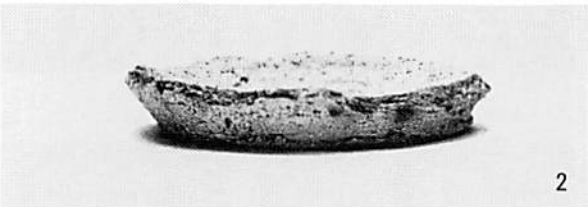
竪穴住居１　カマド断面

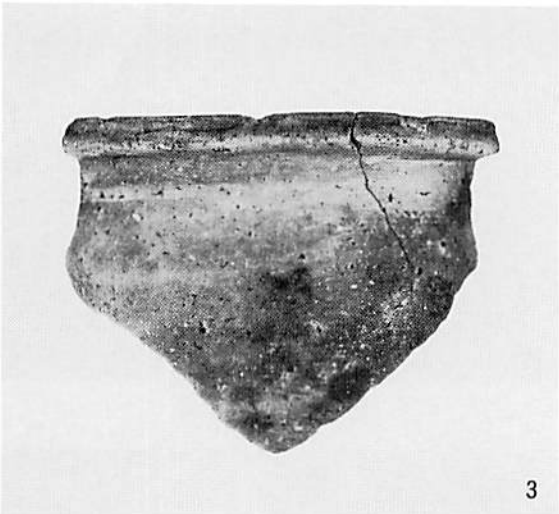
竪穴住居１　床面遺物出土状況

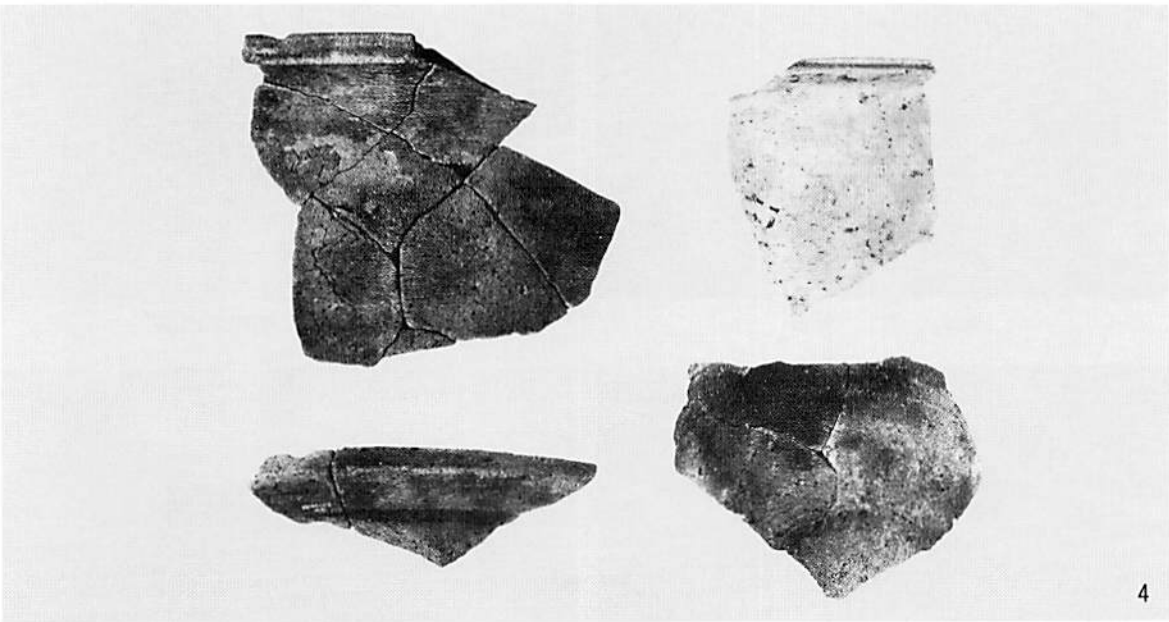
溝13・14　断面

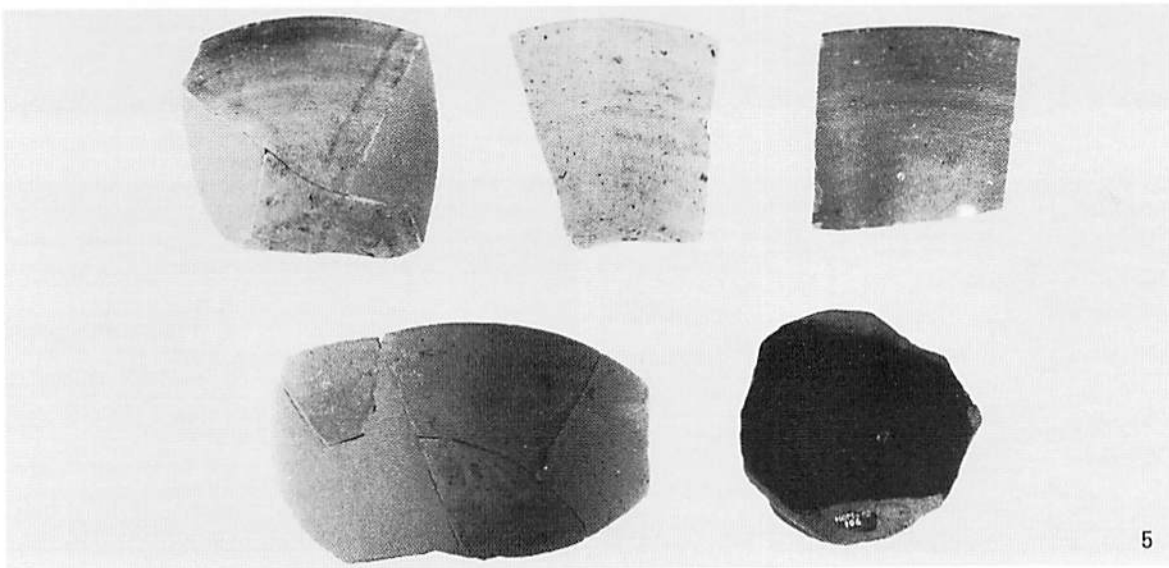
写真図版10



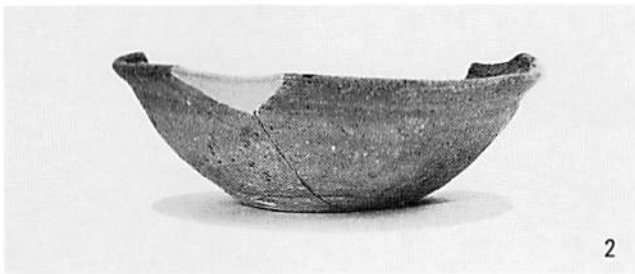


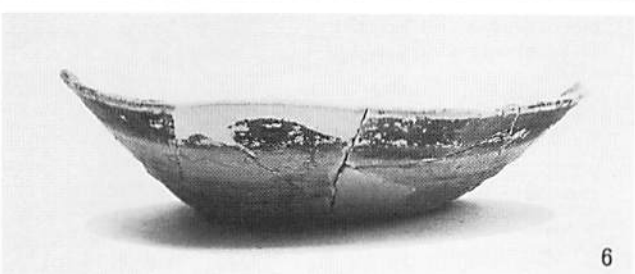


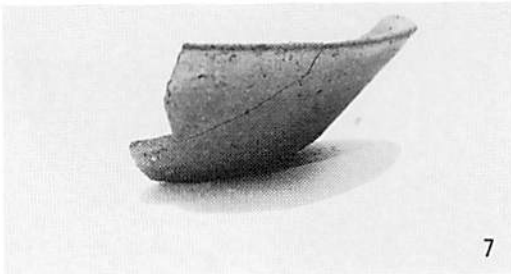


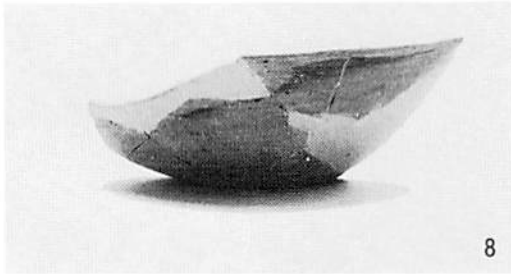


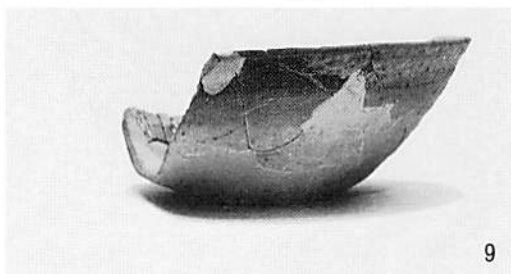
写真図版11　竪穴住居２・３出土遺物

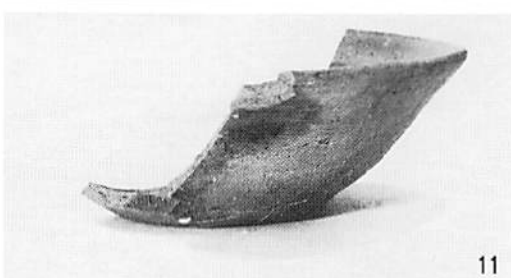


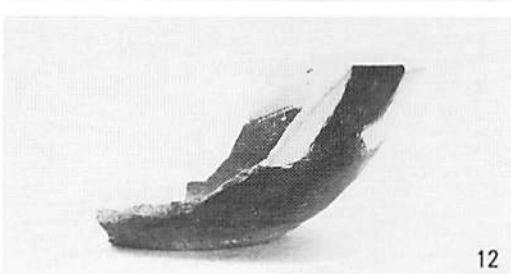




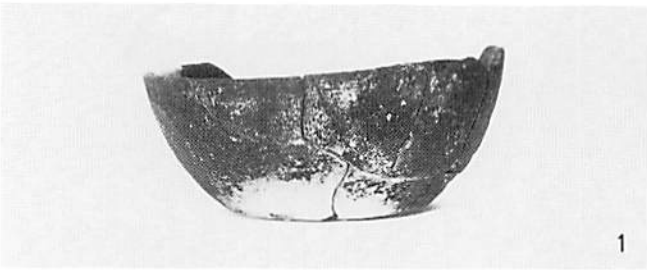


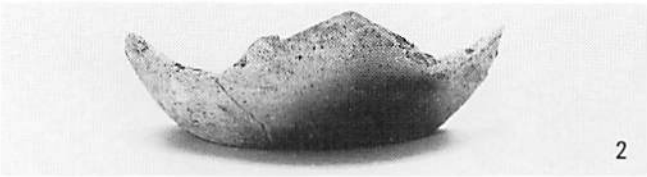


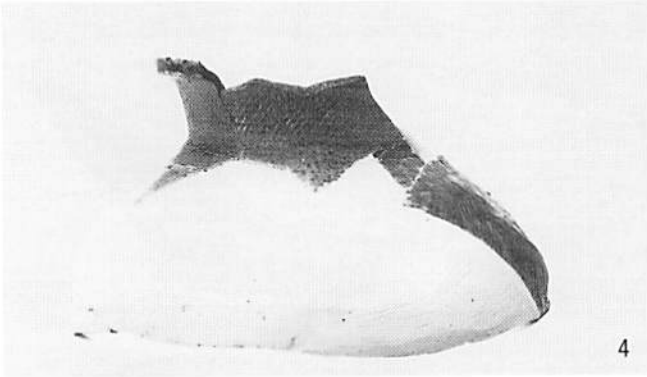


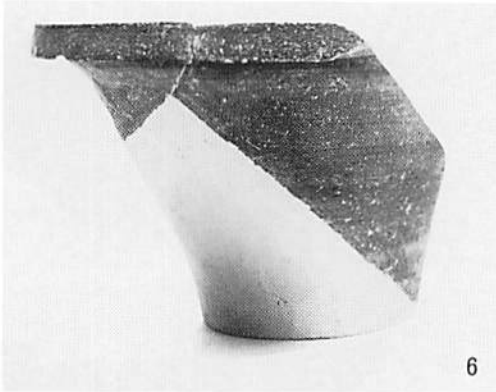


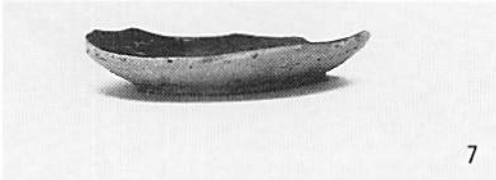
写真図版12　竪穴住居３出土遺物

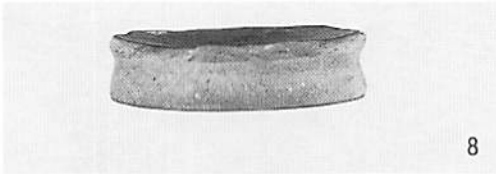


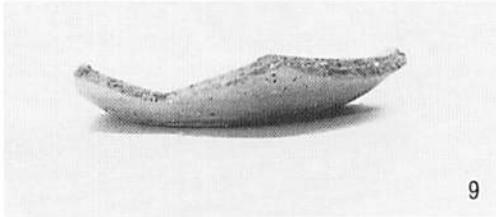


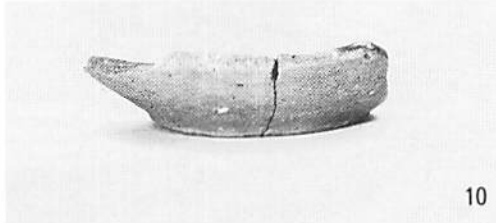




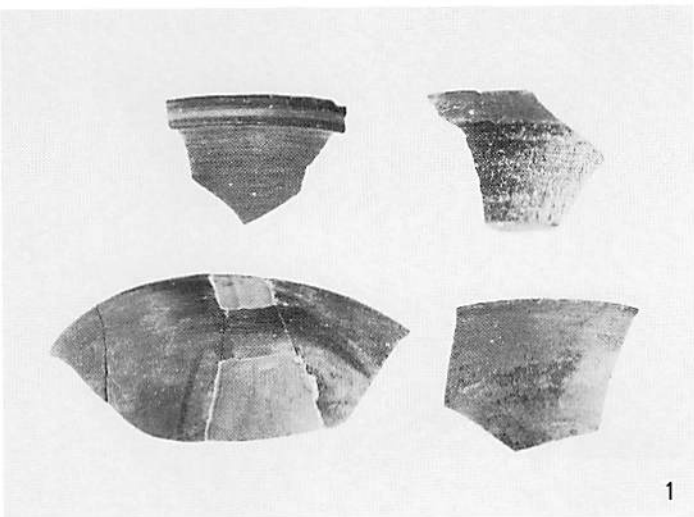


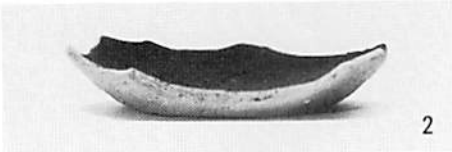


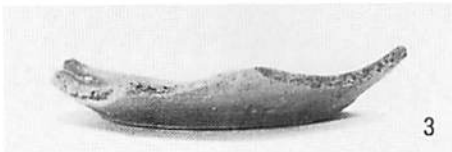


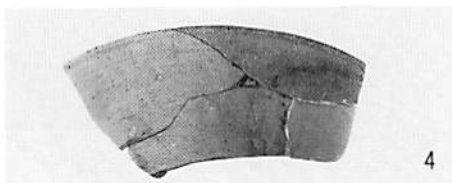


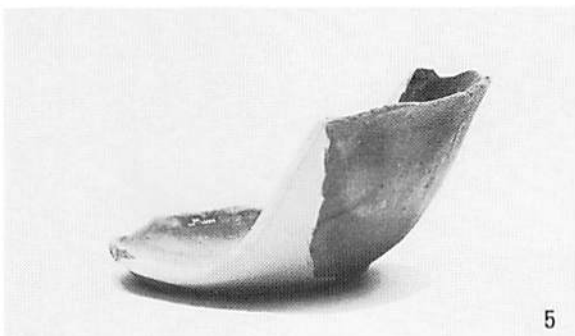
写真図版13　竪穴住居３出土遺物

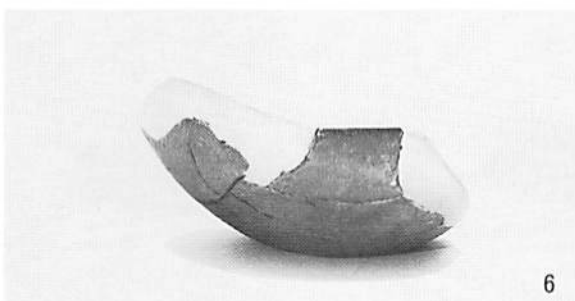


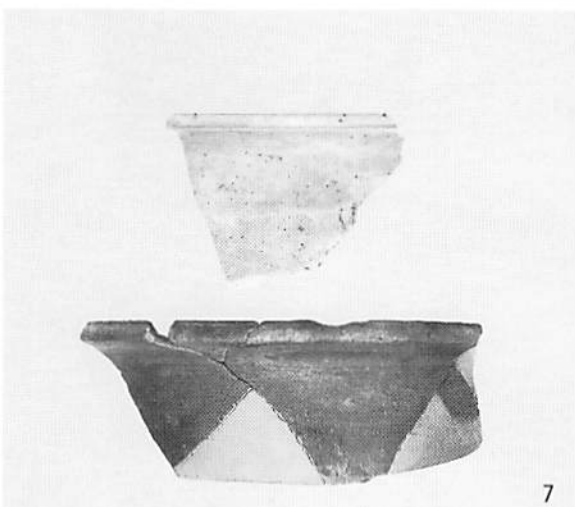


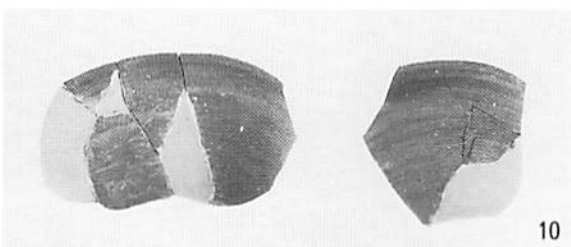


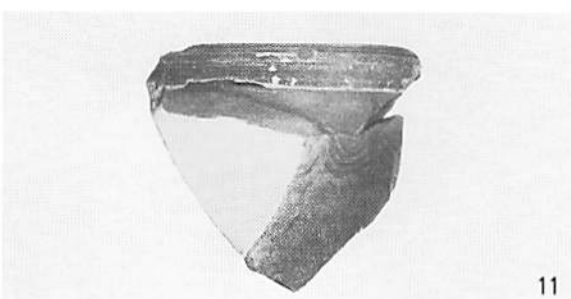




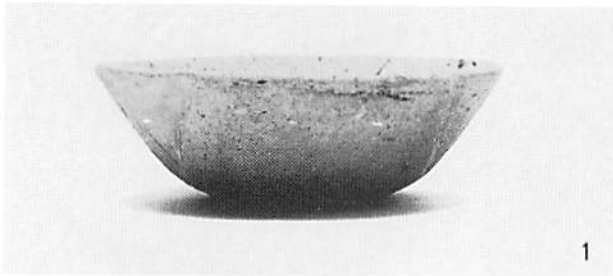


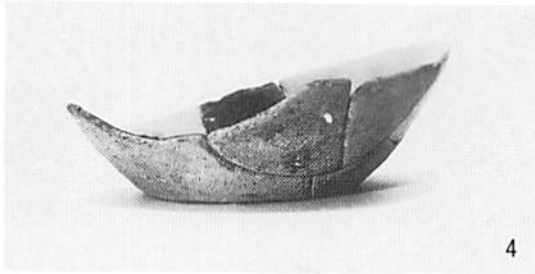


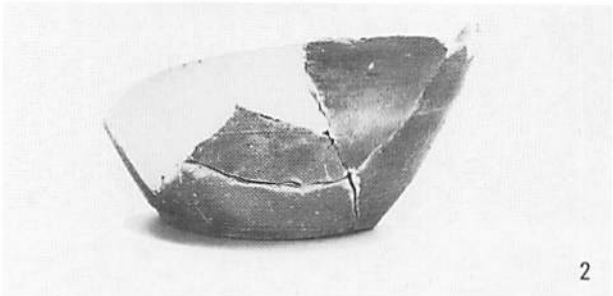


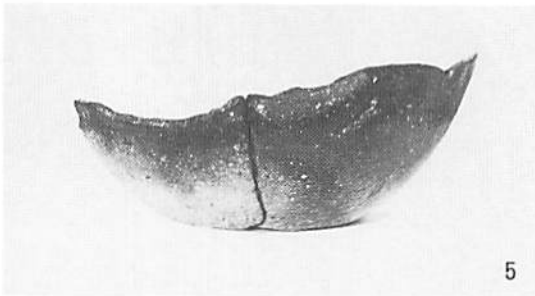


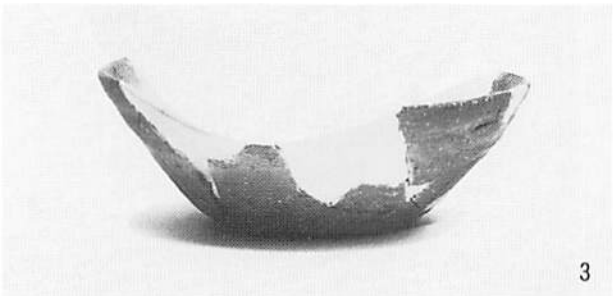
写真図版14　土坑１・３出土遺物

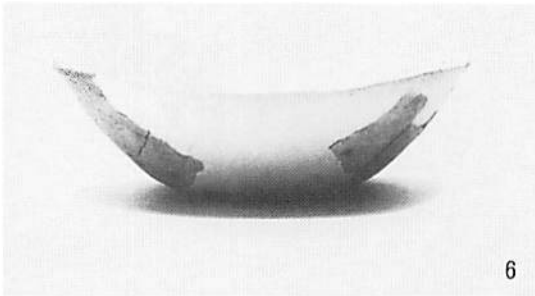


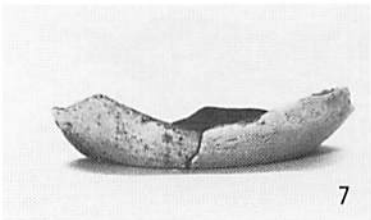


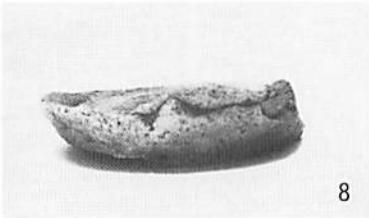


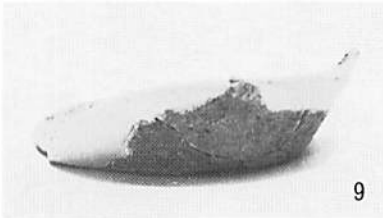


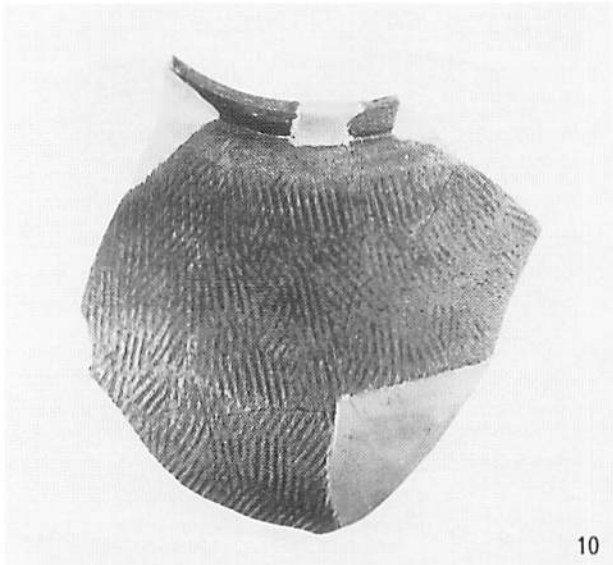


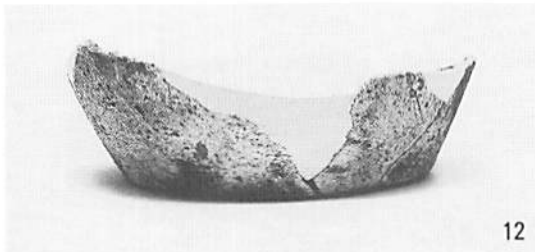




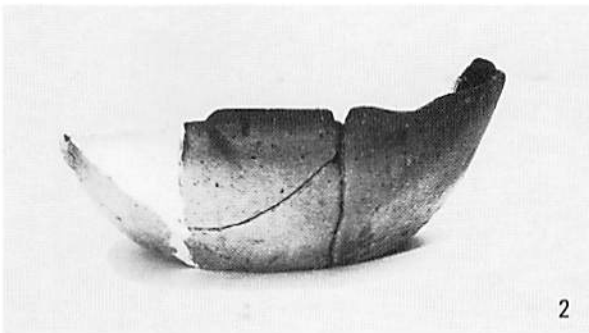


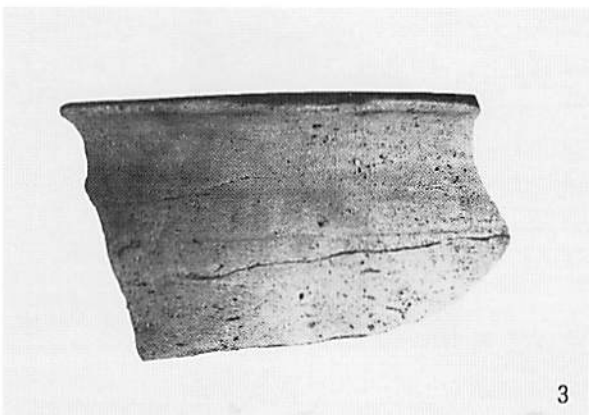


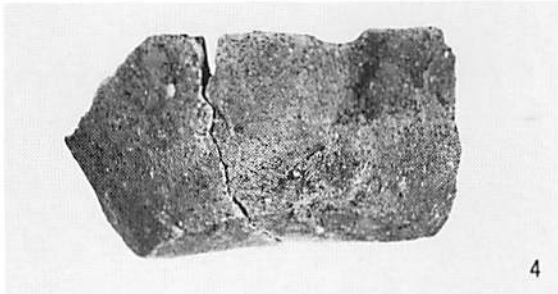


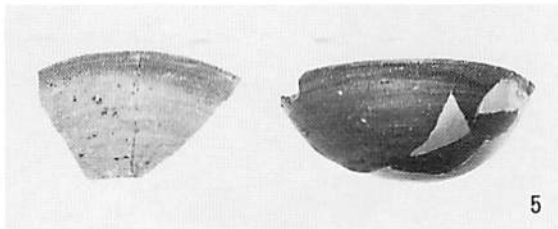


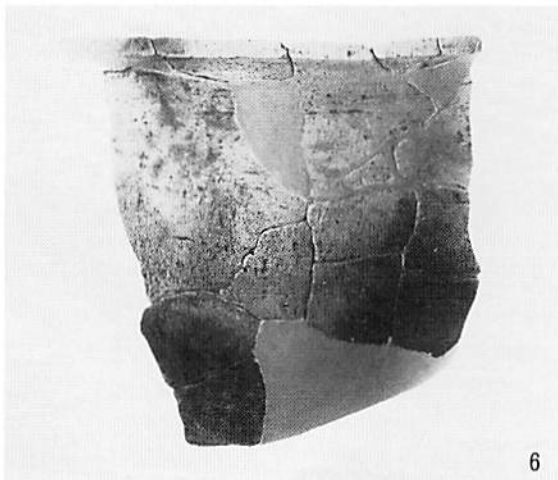
写真図版15　土坑７出土遺物

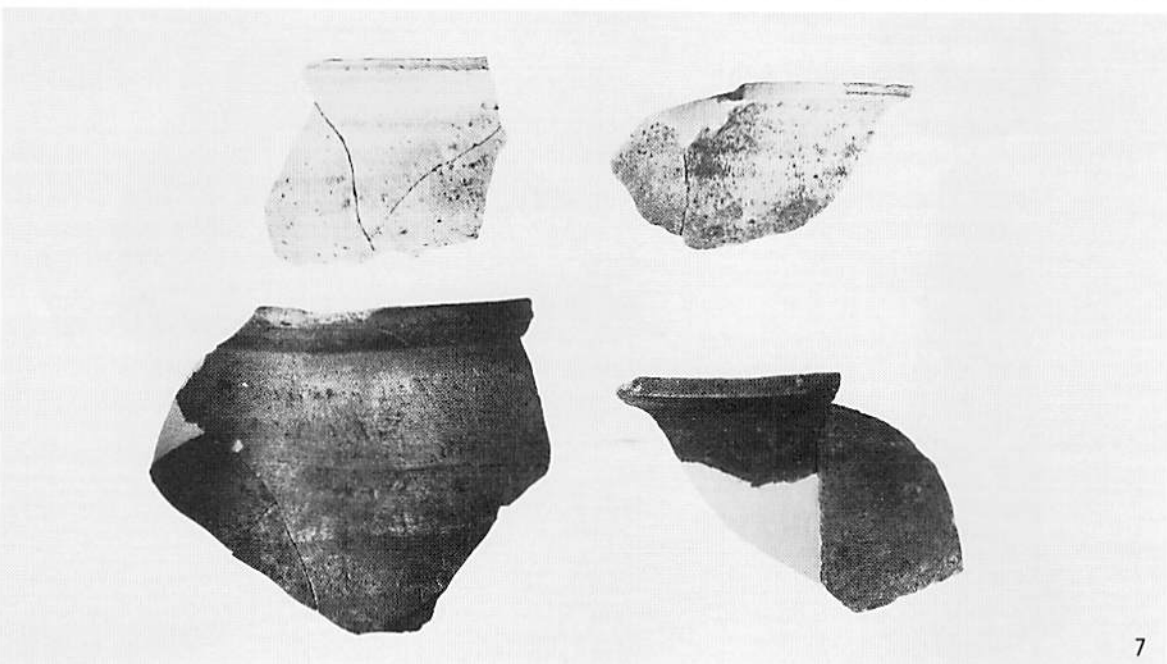




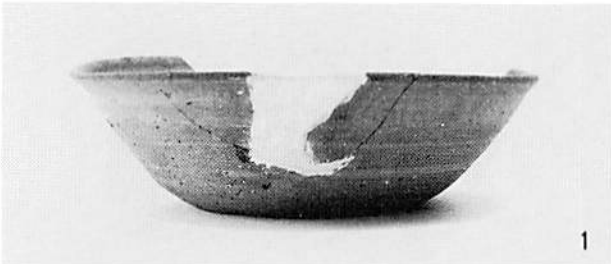


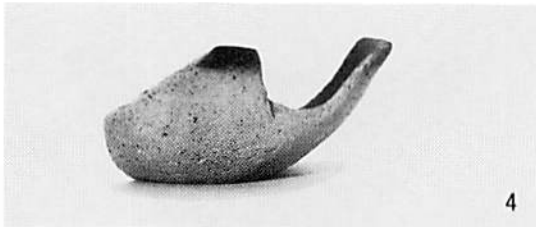


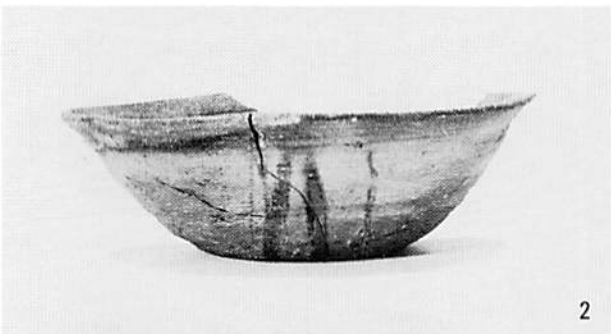


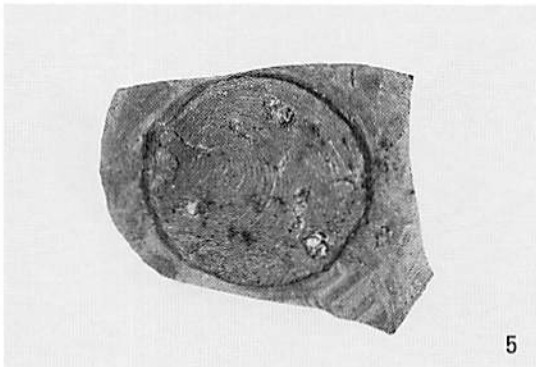


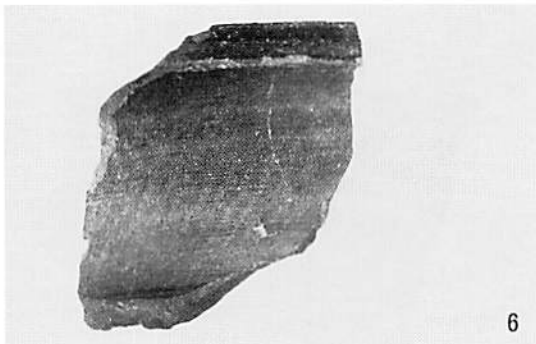
写真図版16　土坑７出土遺物



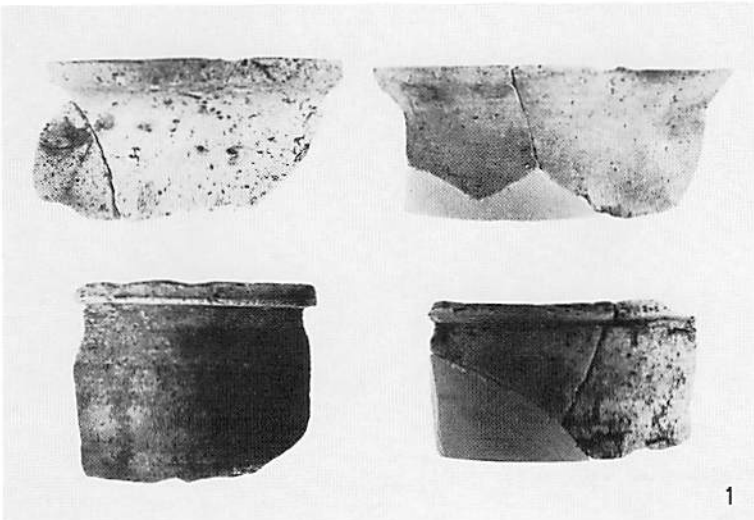


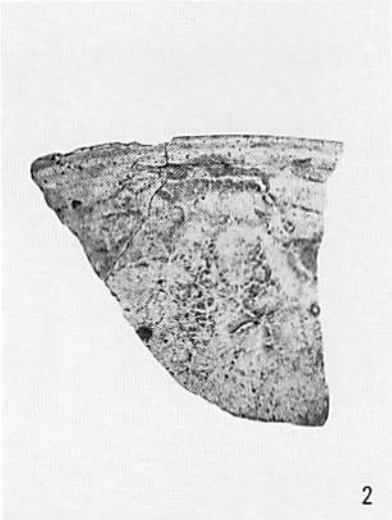


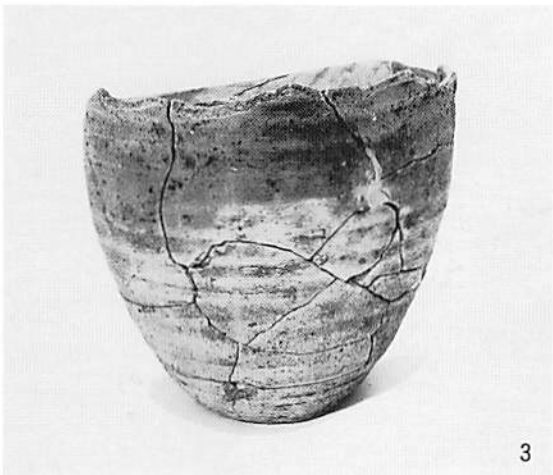


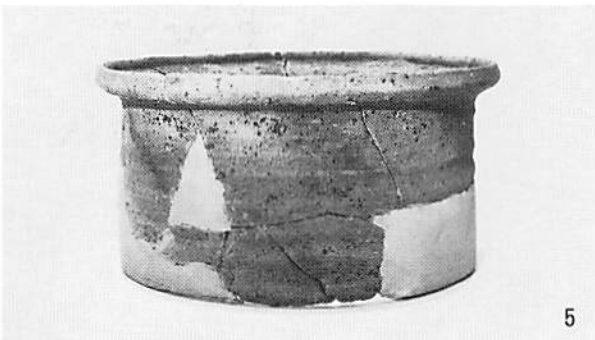


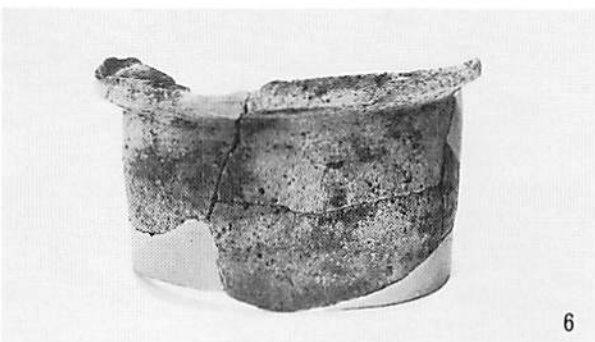
写真図版17　竪穴住居１出土遺物

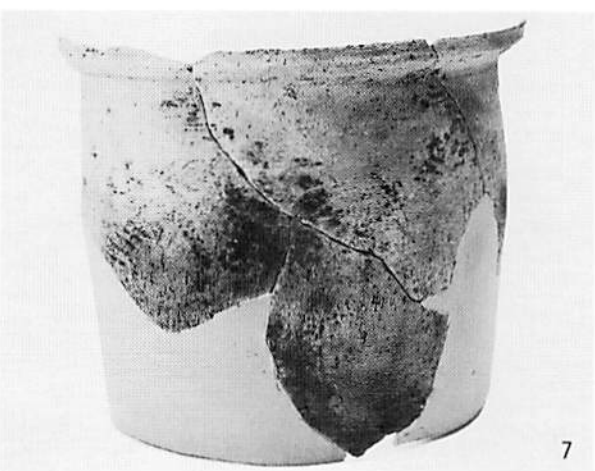




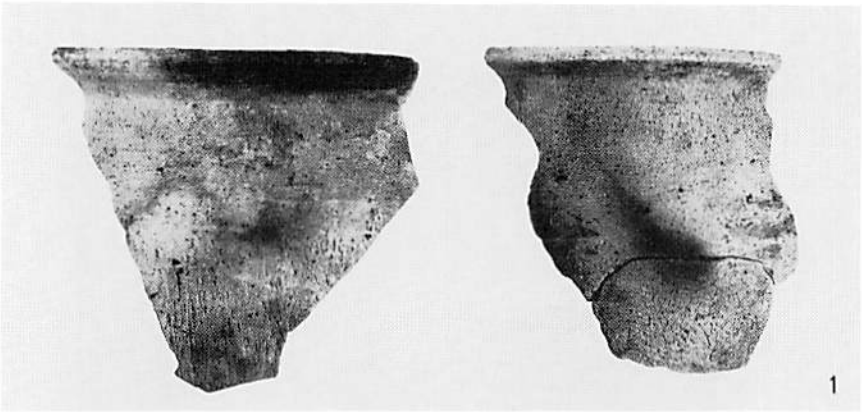




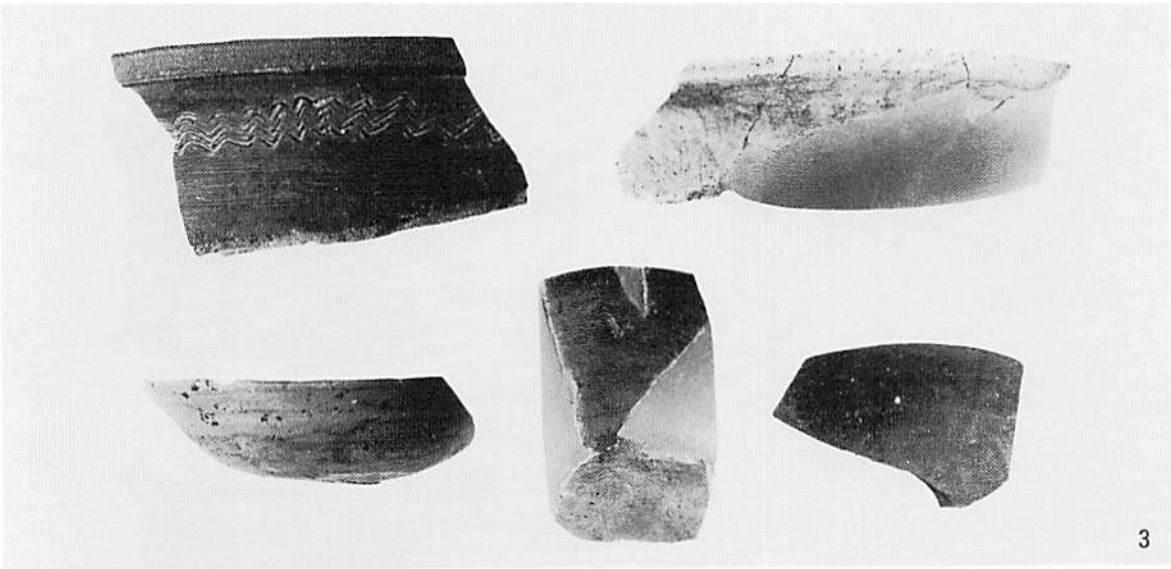


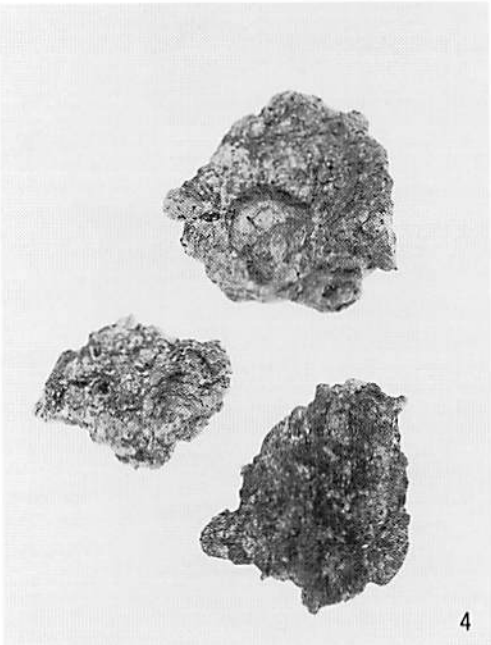


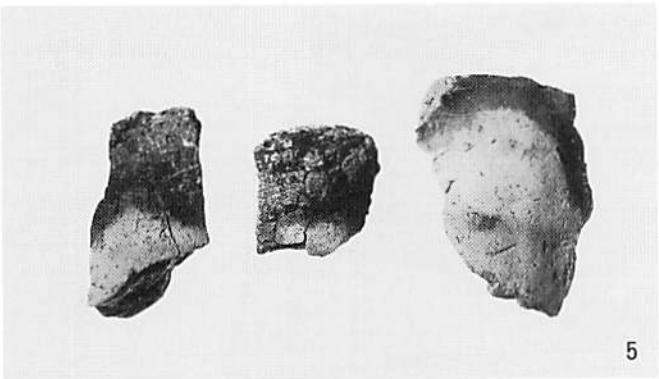
写真図版18　竪穴住居１出土遺物



竪穴住居１　出土遺物







写真図版19　その他の遺物

報告書抄録

ふりがな	ひろおかまえいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	広岡前遺跡発掘調査報告書
副書名	緊急地方道路整備事業関連遺跡発掘調査
巻次	
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第430集
編著者名	福島正和・江藤　敦
編集機関	財団法人　岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地　TEL019-638-9001
発行年月日	西暦2004年3月26日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
広岡前遺跡（ひろおかまえいせき）	岩手県江刺市稲瀬字広岡前（いわてけんえさししいなせあざひろおかまえ）246－143ほか	03212	ME96-0399	39度12分25秒	141度09分18秒	2002.09.17～2002.11.28	3,510㎡	緊急地方道路整備事業に伴う緊急発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
広岡前遺跡	集落跡	平安時代	竪穴住居　3棟 溝跡　17条 素掘り井戸　1基 鍛冶炉　2基 土坑　7基 柱穴　33基	土師器 須恵器（墨書坏2点含む） 砥石 鞴羽口片 鉄滓（鉄塊系遺物含む） 鍛造剥片	平安時代（9世紀代中心）の集落遺跡

平成15年度(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員名簿

所　　長　木村　昇

副所長　平野允苗

〔管理課〕

課　　長　韮沢正吾
課長補佐　山岸直美
主　　査　中島賢一
主　　事　猿橋幸子

嘱　　託　高橋照雄
〃　　湯沢邦子
〃　　沼田テル子
〃　　伊藤滋子

〔調査第一課〕

課　　長　佐々木　勝
課長補佐　佐々木清文
文化財専門員　金子昭彦
文化財調査員　吉田　充
〃　　亀　大二郎
〃　　野中真盛
〃　　新妻伸也
〃　　阿部勝則
〃　　杉沢昭太郎
〃　　西沢正晴
〃　　村木　敬

文化財調査員　北村忠昭
〃　　丸山浩治
〃　　八木勝枝
〃　　島原弘征
〃　　北田　勲
期限付調査員　坂部恵造
〃　　小林弘卓
〃　　藤原大輔
〃　　太田代一彦
〃　　小針大志
〃　　新井田えり子

〔調査第二課〕

課　　長　三浦謙一
課長補佐　中川重紀
〃　　高橋義介
文化財専門員　小山内　透
〃　　金子佐知子
〃　　濱田　宏
文化財調査員　赤石　登
〃　　阿部眞澄
〃　　水上明博
〃　　阿部　憲
〃　　早坂　淳
〃　　小松則也
〃　　阿部徳幸
〃　　窓岩伸吾
〃　　亀澤盛行
〃　　飯坂一重
〃　　鈴木裕明
〃　　林　勲
〃　　阿部孝明
〃　　羽柴直人

文化財調査員　星　雅之
〃　　佐藤淳一
〃　　星　幸文
〃　　溜　浩二郎
〃　　本多準一郎
〃　　丸山直美
〃　　福島正和
〃　　米田　寛
〃　　中村絵美
〃　　川又　晋
〃　　須原　拓
〃　　村田　淳
　　(村上　拓)
期限付調査員　吉田里和
〃　　江藤　敦
〃　　齋藤麻紀子
〃　　立花　裕
〃　　駒木野智寛
〃　　石崎高臣

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第430集

広岡前遺跡発掘調査報告書

緊急地方道路整備事業関連遺跡発掘調査

印刷　平成16年3月22日
発行　平成16年3月26日

発行　(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡11—185
TEL (019)638－9001

印刷　小松茂印刷所
〒020-0025　盛岡市大沢川原2丁目5-37
TEL (019) 623-6073
©(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2003